



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

平成27年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国14の団体との共催により実施された平成27年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成26年度から27年度にかけて岐阜県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」についてもとりまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成27年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

第1部 平成27年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター	3
実施団体	4
全体研修会実施概要	5

第2部 平成27年度公共ホール音楽活性化事業 事例紹介・アシスタントレポート

宮古市 (岩手県)	8
加美町 (宮城県)	14
南陽市 (山形県)	20
白河市 (福島県)	25
町田市 (東京都)	30
高岡市 (富山県)	34
川根本町 (静岡県)	39
裾野市 (静岡県)	45
長浜市 (滋賀県)	50
呉市 (広島県)	54
山口市 (山口県)	63
下関市 (山口県)	68
白石町 (佐賀県)	73
時津町 (長崎県)	79

第3部 平成27年度公共ホール音楽活性化事業 コーディネーターレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	86
丹羽 徹 (コーディネーター)	87
花田 和加子 (コーディネーター)	89
山本 若子 (コーディネーター)	91

第4部 平成26-27年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要	94
派遣アーティストプロフィール	101
レポート	
児玉 真 (チーフコーディネーター)	104
楠瀬 寿賀子 (コーディネーター)	105
大島 路子 (コーディネーター)	106
田村 緑 (コーディネーター)	107
菱川 浩二 (アシスタントコーディネーター)	109
高井 晴美 (アシスタントコーディネーター)	112
田辺 沙保里 (アシスタントコーディネーター)	114
赤尾 芳英 (事業担当者)	116

第1部

平成27年度公共ホール 音楽活性化事業の概要

平成27年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

(1) 実施団体 全国14団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらに関わる指定管理者等は除く。

(2) 研修事業 ①全体研修会

平成27年4月13日(月)～15日(水) / (一財)地域創造、HAKUJUホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階(公演2、3カ月前)に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

(3) 公演事業 公演事業の実施(全国14地域) 平成27年9月～平成28年1月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①コンサート 身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②アクティビティ 出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

3 費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

(1) 一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

(演奏家の出演料、交通費(現地移動費を除く)、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料(演奏家)、演奏家派遣に関するマネジメント料)

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

(2) 開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外の経費(現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など)

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等

共 催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

平成27年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 平成26年度・27年度登録アーティスト

金子 三勇士 (ピアノ)	株式会社ジャパン・アーツ
森岡 有裕子 (フルート)	株式会社ミリオンコンサート協会
田村 真寛 (サクソフォン)	株式会社ヤマハミュージックアーティスト
高見 信行 (トランペット)	株式会社プロ アルテ ムジケ
廣田 美穂 (声楽 (ソプラノ))	公益財団法人日本オペラ振興会
中井 亮一 (声楽 (テノール))	公益財団法人日本オペラ振興会
前田 啓太 (打楽器)	株式会社プレルーディオ

2 コーディネーター

小澤 櫻作 (上田市交流文化芸術センター プロデューサー)
丹羽 徹 (一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 理事事務局長)
花田 和加子 (keynote代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子 (有限会社N. A. T取締役)

3 サブコーディネーター

菊地 俊孝 (公益財団法人東松山文化まちづくり公社 総務・文化グループ)
柿塚 拓真 (公益財団法人日本センチュリー交響楽団 コミュニティ／教育プログラム、助成金担当マネージャー)
三浦 幸恵 (神奈川県立音楽堂 業務課)
桜井 しおり (ワークショップデザイナー、ピアニスト)

4 アシスタントスタッフ

奥田 もも子 (公益財団法人びわ湖ホール 音楽企画アドバイザー)
杉山 幸代 (上野学園大学音楽文化研究センター)

5 アドバイザー

能祖 将夫 (北九州芸術劇場プロデューサー、桜美林大学准教授)
楠瀬 寿賀子 (公益財団法人せたがや文化財団音楽事業部)
吉本 光宏 (株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事 [社会研究部 芸術文化プロジェクト室長])

6 実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	岩手県	宮古市	特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター	宮古市民文化会館	9/11～9/13	高見 信行 森岡 有裕子	山本 若子 奥田 もも子
2	宮城県	加美町	加美町	加美町中新田文化会館	11/19～11/21	金子 三勇士	山本 若子 杉山 幸代
3	山形県	南陽市	南陽市	南陽市文化会館	11/27～11/29	田村 真寛	小澤 櫻作 三浦 幸恵
4	福島県	白河市	NPO法人カルチャーネットワーク	白河市民会館	9/2～9/5	廣田 美穂	小澤 櫻作 菊地 俊孝
5	東京都	町田市	(一財) 町田市文化・国際交流財団	和光大学ポプリホール鶴川	12/9～12/11	金子 三勇士	小澤 櫻作 柿塚 拓真
6	富山県	高岡市	(公財) 高岡市民文化振興事業団	高岡市生涯学習センターホール	1/21～1/23	前田 啓太	花田 和加子 奥田 もも子
7	静岡県	川根本町	川根本町	川根本町文化会館	10/15～10/17	前田 啓太	小澤 櫻作 櫻井 しおり
8	静岡県	裾野市	裾野市	裾野市民文化センター	10/15～10/17	高見 信行	花田 和加子 三浦 幸恵
9	滋賀県	長浜市	(株) ロハス余呉	浅井文化ホール	12/10～12/12	高見 信行 田村 真寛	丹羽 徹 菊地 俊孝
10	広島県	呉市	(公財) 呉市文化振興財団	呉市文化ホール	10/7～10/9	金子 三勇士	山本 若子 奥田 もも子
11	山口県	山口市	NPO法人こどもステーション山口	クリエイティブ・スペース赤れんが	1/14～1/16	田村 真寛	山本 若子 柿塚 拓真
12	山口県	下関市	川棚温泉まちづくり株式会社	下関市川棚温泉交流センター	11/5～11/8	高見 信行 中井 亮一	丹羽 徹 菊地 俊孝
13	佐賀県	白石町	(公財) 白石町文化振興財団	白石町スカイパークふれあい郷 自営館ホール	1/28～1/30	金子 三勇士	丹羽 徹 櫻井 しおり
14	長崎県	時津町	時津町教育振興公社	とぎつカナリーホール	12/15～12/17	金子 三勇士	花田 和加子 杉山 幸代

平成27年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会実施概要

1 概要

平成27年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。2日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討会議及び発表を行った。

2 参加者

平成27年度事業実施団体 担当者

3 日程

平成27年4月13日（月）～15日（水）（3日間）

4 会場

4月13日（月）・15日（水）：一般財団法人地域創造 会議室

4月14日（火）：HAKUJU ホール

5 実施団体研修スケジュール

4月13日（月）

時間	会場：地域創造 会議室
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～15:10 (120分)	ワークショップ 赤丸急上昇（赤松美智代＋丸山陽子）小澤 櫻作（チーフコーディネーター）
休憩（20分）	
15:30～16:00 (30分)	おんかつを知る Vol.1～基礎編～ 小澤 櫻作（チーフコーディネーター） 造
16:00～16:30 (30分)	おんかつを知る Vol.2～実務編～ 地域創造
休憩（10分）	
16:40～19:00 (140分)	おんかつを知る Vol.3～事例紹介編～ I部：亀山市事例（45分）※担当者の思い 山本若子、野間秀一（担当者） II部：演奏家事例（45分）※演奏家の思い 丹羽徹、花田和加子 デュオ・レゾネ（登録アーティスト） <5分休憩> III部：事業担当者の役割とは（45分） 柿塚拓真

4月14日(火)

時 間	会場：HAKUJU ホール（渋谷区富ヶ谷）
10:00～11:30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来 吉本 光宏（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12:30～14:20 (110分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
14:20～14:30 (10分)	プレゼンテーションの聴き方 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
休憩・移動（30分）	
15:00～18:35	平成26・27年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 森岡 有裕子（フルート） 田村 真寛（サクソフォン） 金子 三勇士（ピアノ） ＜休憩（20分）＞ 前田 啓太（打楽器） 廣田 美穂（声楽（ソプラノ）） ＜休憩（20分）＞ 高見 信行（トランペット） 中井 亮一（声楽（テノール））
休憩・移動（25分）	
19:00～21:00	交流会 参加者、H26・27登録アーティスト、コーディネーター

4月15日(水)

時 間	会場：地域創造 会議室
10:00～12:00 (120分)	フィードバックとグループ別企画検討 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
昼食休憩（60分）	
13:00～15:00 (120分)	企画発表 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
15:00～15:15 (15分)	事務連絡、閉講式

第2部
平成27年度公共ホール
音楽活性化事業
事例紹介・アシスタント
レポート

実施団体：特定非営利活動法人 いわてアートサポートセンター

実施時期：平成27年9月11日（金）～平成27年9月13日（日）

出演アーティスト：森岡 有裕子(フルート) 高見 信行(トランペット) 岡本 知也(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：ミニコンサートと合唱の共演

期 日：平成27年9月11日（金） 10：35～11：20

会 場：磯鶏小学校 音楽室

参加者：4年生 51人

フルートとトランペットそれぞれの楽器紹介からスタート。フルートの紹介では、音量や音の出方を感じてもらうために児童とともに近い距離で演奏。トランペットでは、トランペットの原理がわかるように身近なものを使って作られたもので音の響きを児童が手で確認して驚いていた。プログラムの最後には、児童が習っている曲「Don't Mind」を演奏し、演奏に合わせて合唱をした。

タイトル：クラシック ミニコンサート～金曜の昼下がり、素敵な音色を楽しみましょう～

期 日：平成27年9月11日（金）

会 場：サンホームみやこ デイホール

参加者：高齢者介護施設「サンホームみやこ」ご利用者や関係者、近隣の方 68人

フルートとトランペット、それぞれの音色を楽しむバラエティ豊かな演奏会となった。また、施設でよく歌っているという「りんごの唄」や「青い山脈」を、参加者に歌詞カードを配って演奏し、一緒に口ずさんでもらった。春夏秋冬の曲のメドレーでは耳馴染みのある曲を演奏。終演後、施設の方から花束贈呈をいただき、参加者と演奏者の全員で写真撮影を行なった。

タイトル：ミニコンサート

期 日：平成27年9月12日（土）

会 場：赤前小学校 体育館

参加者：赤前応急仮設住宅にお住まいの方、近隣の方 11人

赤前地区は津波で大きな被害が出た地域で、赤前小学校のグラウンドには今も応急仮設住宅が並んでいる。仮設住宅を中心に近隣の方にもこのコンサートの案内をした。事前に参加者の年齢層や男女、どんな背景の方がご参加いただけるかわからなかったが、3人のアーティストが「演奏会」として考えてくれたプログラムを演奏した。どんな方が来てくださっているのか、開演前にアーティストらが来場者に直接話しかけて情報収集。演奏会の中でアーティストが曲を紹介するMCを聞いていると、開演前のご来場者のお話で感じたことを曲に乗せてくださっていたように思う。



タイトル：ミニコンサート

期 日：平成27年9月12日（土）

会 場：宮古市役所 大ホール

参加者：市役所職員やご家族 20人

宮古市には今も全国の自治体から「派遣職員」が勤めている。被災者に向けての演奏会はあっても、派遣職員への感謝の気持ちがなかなか示せないということがあり、今回、市役所で行わせていただいた。ただ、派遣職員さんは土日は実家に戻る方も多く、実際にご来場いただくことはできなかったようだ。多数が市役所の職員やその家族だった。小さな子供が多く、終演後に希望する子供にはフルートやトランペットの演奏を体験してもらった。



コンサート

タイトル：「夜韻を楽しむコンサート～夏の終わり編～」

期 日：平27年9月13日（日） 16：00開演

会 場：宮古市民文化会館 大ホール舞台上舞台（定員：200人）

入場者数：91人

星や夜空をテーマにした宮沢賢治の童話「双子の星」や絵本2冊の朗読と、その物語に合わせた演奏、その一方で、フルートやトランペットの音色を楽しんでいただくクラシック曲の演奏を合わせ、休憩含む約1時間45分のコンサートとなった。アクティビティ1の磯鷄小学校4年生の有志に急ぎょ出演してもらい「Don't Mind」の合唱も織り込んだ。アンコール曲「見上げてごらん、夜の星を」で余韻漂うコンサートを締めくくった。



① 応募の動機・事業のねらい

宮古は音楽が活発で、小中学校や高校のブラスバンドや合唱、大人も合唱や弦楽、吹奏楽に取り組む人が多く、鑑賞者としての音楽ファンも少なくない。その中で今回は、音楽の楽しみ方をいつもとちがった角度から知ってもらう機会にしたいと考えた。また、「2. 企画のポイント」に書いた通り、会館として20代～30代へのアプローチが弱いため、若い観客層の掘り起こしを目指した。

② 企画のポイント

地域の財産としてまず考えたのは、宮古の美しい夜空や星空だった。おんかつ研修の際にコーディネイターの方より岩手出身の作家・宮沢賢治の童話には星空をテーマにした物語がたくさんあることをアドバイスいただき、そこから童話の朗読を交えてはどうかと考えた。会館として、20代～30代の客層へのアプローチがあまりできていない現状があり、朗読を用いることで子どもと一緒に聴きにきてもらえるようなコンサートにしたいと考えた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アーティストと直接打ち合わせができないため、忙しいアーティストのみなさんに、企画に対してどこまでどのように取り組んでいただけるのか、感触がわからず不安だった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コーディネイターやアーティストの事務所の担当者に進捗を尋ね、少しずつ状況がわかった。実施が近づいてきた段階で、事務所の方の配慮でアーティストと直接やりとりをさせていただくことができ、会館側の企画意図や状況をお伝えし、お互いに企画への共通意識を持った上で当日を迎えることができた。

⑤ 事業を実施しての成果

小学校以外のアクティビティ先3か所では参加対象が固定していなかったため、アーティストにはご苦勞をかけたと思うが、3人のポテンシャルが高く、その場所に合わせて工夫して取り組んで下さり、参加者が大変喜んでくださった。

最終日のコンサートについては、アーティストが宮古入りしてから地域の朗読メンバーと初めて会って、毎夜、演奏と朗読の合わせの作業となったが、一緒に作るという現場を体験し、地域の朗読メンバーに大変刺激になった。良い出会いが演奏会にも表れていたように思う。また、宮古では演奏会が多い中で、フルートとトランペットそれぞれの音色を楽しめるコンサートは珍しく、観客に満足いただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

「事業のねらい」としてしたことに関しては失敗だった。20代30代への広報がうまくできていなかった。演奏会を作る上では当然のことだと思うが、「子ども」と言っても小学生以上という入場制限があり、その点も企画のPRが曖昧となる要因となった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティやコンサートを通して、地域にいらっしゃる、いろんな立場のいろんな方にお会いすることができた。

舞台上舞台という設営での演奏会は会館として初めての試みで、音響的な課題はあるが、演劇等でも面白い空間づくりができる可能性を感じた。貸館での利用には料金の問題があるが、会館をいろんな形で楽しんでもらう一つの方法にしたいと思った。

<概要>

岩手県宮古市は本州最東端に位置しており、2011年の東日本大震災において最も大きな津波の被害を被った町のひとつである。今回の会場となった宮古市民文化会館も、全壊は免れたものの客席まで波が押し寄せた浸水被害から永く休館していたが、復旧工事を終え2014年12月に再オープンの日を迎えた。

今回のおんかつは、宮古の美しい星空と共に、朗読を交えて音楽に親しんでもらいたいという担当者福島さんの思いから「夜韻（よいん）を楽しむコンサート」というテーマのもと、高見信行さん（トランペット）、森岡有裕子さん（フルート）、岡本知也さん（ピアノ）の3名を迎えて実施された。トランペットとフルート、という少し珍しい組み合わせに加え、朗読とのコラボレーションや舞台上舞台での上演など随所に工夫を凝らした公演となった。

<アクティビティ>

宮古市でのアクティビティは、磯鶏小学校の4年生、高齢者福祉施設の利用者、震災による仮設住宅の入居者、そして市役所で復興支援に携わっている方々を対象に4箇所で行われた。

小学校以外の3件については参加される方の人数や層を事前に把握しきれない面があり、演奏プログラムを決める際にある程度無難な方向性をとらざるを得なかった。一方、小学校でのアクティビティは対象がはっきりとしていたため目的を見据えたプログラムを組むことができた。木管・金管2つの楽器の違いを感じてもらい、次はアンサンブルでの演奏、最後は合唱で子どもたちとの共演と、今回の2人ならではの内容であった。森岡さんがフルートで蜂の羽音のような音を出したり、高見さんお手製ホースのトランペットから音が鳴った時の子どもたちの目の輝きは印象的で、子どもたちは1度すごい！と思ったら後の曲はぐっと集中して聴いてくれることも実感として感じられた。

他の会場も手探りながらアーティストは健闘しており、たとえば仮設住宅でのアクティビティは、小学校の体育館という大きな会場で行うことに懸念もあったが、アクティビティが始まる前からアーティストと参加者の方々の間で和やかにおしゃべりが始まったことで、あたたかな雰囲気の中で進めることができた。各会場とも参加者から良い反応があったことは間違いないが、アクティビティを効果的に行うために対象者を絞っておくことの重要性を改めて感じた次第である。

<コンサート>

アーティスト同士が初めての組み合わせというだけでなく、朗読とのコラボレーションや舞台上舞台での上演、星空を照明で演出するなどチャレンジな要素をたくさん含んでの公演であった。事前準備は行っていたものの、実際に朗読の皆さんとリハーサルを進める中でインスピレーションを得ることも多かったようで、連日閉館ぎりぎりまでリハーサルや打ち合わせを重ね、一同が協働して現地で作り上げたオリジナルな公演となった。また、担当の福島さんがねらいとしていた、小さな空間で密に音楽に触れてもらうという点は達成できたように感じる。

<総括>

今回のおんかつは前述のとおり課題も多かったが、各所の皆さんがあたたかく迎えてくださったことも無事終了された要因のひとつである。地域の方にとってホールの再開が復興の象徴のひとつであるように感じられた。震災から4年、新たなスタートを切った宮古市文化会館にとって、今回のおんかつがこれからのホール運営の礎の一部となり、被災地という一種特殊な地域における公共ホールの役割をより発展させていく布石になったことを期待したい。

また今回は、アーティストのお三方にとって初めて体験する要素がたくさん詰め込まれたもので、連日アクティビティとリハーサルを重ね、体力的にも精神的にもハードなものであったが、終始全力で取り組む姿に我々も感銘を受けた。今回の経験がアーティストにとっても新たなステップになったことと思う。

実施団体：宮城県 加美町

実施時期：平成27年11月19日（木）～平成27年11月21日（土）

出演アーティスト：金子 三勇士（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：中新田幼稚園 訪問コンサート

期 日：平成27年11月19日（木） 11：30～12：10

会 場：中新田幼稚園 ホール

参加者：年長児37人

燕尾服を着用した金子氏が颯爽と登場。担任の先生が弾く歌遊びのいつものピアノと違う音色のようで、子供たちの新鮮な笑顔が印象的だった。小さな子供たちでも、金子氏の話（説明）は分かりやすく良い。

金子氏の提案で、子供たちに打楽器を手にしてもらい、子犬のワルツに合わせて自由に音を鳴らしながら動き回り、金子氏が演奏をストップしたら、子供たちも演奏を止め動きをストップする遊びの要素を取り入れた内容になり、終始子どもたちは楽しそうであった。

タイトル：賀美石小学校 訪問コンサート

期 日：平成27年11月19日（木） 14：05～14：50

会 場：賀美石小学校 音楽室

参加者：4・5・6年生 46人

金子氏の力強い演奏でスタート。

ピアノがこんなにもなり響くものなのかとみな驚いた様子だった。

始めは緊張していた子どもたちであったが、合間のトークや力強い演奏で金子氏の魅力にすっかり引き込まれた様子であった。

演奏のお礼にと子供から合唱の披露があった。

タイトル：旭小学校 訪問コンサート

期 日：平成27年11月20日（金） 10：40～11：25

会 場：旭小学校 音楽室

参加者：全校生徒 24人

全校児童24人と規模の小さな学校であり、1年生から6年生まで大変仲が良いと先生方から話があったとおり、学校全体がアットホームな雰囲気であった。

この子供達も最初は緊張していたが、金子氏の演奏と人柄に魅了され、合間のトークでは質問に対する発言を子供たちが極的に述べていた。

ランチルームで給食を一緒にとり、子供達と一層交流を深めることができた。



タイトル：宮崎中学校 訪問コンサート

期 日：平成27年11月20日（金） 14：35～15：25

会 場：宮崎中学校 音楽室

参加者：3年生 34人

力強い演奏、超絶技巧の演奏もさることながら、リストの愛の夢の解説で、「大切な人を想って聴いてみてほしい」「愛にはいろいろな種類があるが、そこには必ず優しさが伴う」と語りかける。金子氏の真剣な言葉や演奏に何かを感じ取り、心を動かされたようだった。

演奏の最後に、金子氏に質問をするコーナーを設けたが、恥ずかしかったようで積極的に手をあげる生徒は少なかった。

コンサート

タイトル：金子 三勇士 ピアノリサイタル

期 日：平成27年11月21日（土） 14：00開演

会 場：中新田バウホール（定員：684人）

入場者数：294人

通常より、やや客席にピアノを近づけ、曲間に金子氏のトーク、曲の解説をまじえながら終始和やかなムードで演奏会を終えることができた。

アンコールは、担当者の強い要望により、ショパン《英雄ポロネーズ》をお願いし、快く引き受けていただいた。



① 応募の動機・事業のねらい

文化全体が衰退傾向にある中で、音楽ホールの使命として、幅広い年代層に喜んでもらえるクラシック演奏会を提供することを目的として、ひとりでも多くの方々に、一度ホールに足を運んでもらいたい。

② 企画のポイント

アウトリーチ先の学校等では、子どもたちに生の音楽（演奏）に触れてもらい、若い演奏家の姿を見て、音楽という分野で切磋琢磨して道を切り開いていこうとする真摯な生き方から、将来の夢にむかって挑戦することや努力することを学んでもらいたい。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アウトリーチ先の学校（施設）選定

④ 上記③をどのようにクリアしたか

小さな会場、少ない人数、短い時間をキーワードとし、比較的規模の小さな学校等に的を絞り、交流アクティビティが実施できる学校等を選定した。

⑤ 事業を実施しての成果

当ホールでは、過去にこのようなアウトリーチを交えたコンサートを実施したことがなく、今回初とも言える試みとなった。

金子氏の演奏力と人間性に支えられ、最終日のコンサートには、アウトリーチ先の子供たちとその親、学校関係者にもホールに足を運んでもらえたので、一定の成果はあったと思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

当初は、多くの集客を見込んでいたが、目標に掲げた数値には届かなかった。

コンサートの前には、ピアノ発表会や仙台での公演があり周知、広報は十分であったと考えるが、コンサートの内容が素晴らしかっただけに、非常に残念である。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

昭和56年（1981年）に開館して35年を迎え、開館当初「田んぼの中の音楽堂」として、全国的に話題になり、その後現在に至るまで地域の音楽文化活動の拠点として様々な事業を展開してきた。

文化全体が衰退傾向にある中、積極的にお金を出してまで音楽を享受する住民は減り、若い世代を中心に音楽への嗜好が多様化し、有料の演奏会に足を運ぶ絶対数はいよいよ減少傾向にある。

登録アーティストの公開プレゼンテーションに参加するまでは、希望するアーティストが複数いたが、金子氏のやってみたいアクティビティと演奏を聴き、これから成長していく子供たちに生の演奏を身近で身体全体で味わってもらえればと考え、地域創造の協力をいただきながら事業を進めることができた。

アウトリーチ先の子どもたちは、目を輝かせて演奏に聞き入っていたのが印象的であり、最終日の演奏会では、アウトリーチ先の子供たちが親子で来場する姿を見て、地域とホールがつながったような気がした。

アーティスト本人の力量によるところが多いが、このような事業を継続して行うことに地域の音楽ホールの可能性がまだまだあると感じた。

次年度も引き続き、本事業への協力者を増やししながら、普段生の音楽に触れる機会のない方々、これから成長していく若い世代の方を中心にアクティビティを行い、最終日の演奏会に繋げていきたいと考えている。

加美町中新田文化会館、通称「中新田バッハホール」は1981年に開館した音楽ホールである。1981年といえば、わが国における公共文化施設建設ラッシュの初期であり、とりわけ中新田バッハホールは日本屈指の響きの良さ、そして国内外からのトップアーティストとの意欲的な企画で、その名は一躍全国区になった。

その中新田バッハホールが、2016年で開館35周年を迎える。開館時に開始されたヴァイオリン教室は、現在も弦楽器とパイプオルガンのレッスン講座「バッハホール音楽院」として開講されている。ホールが支援する市民オーケストラ活動には、仙台フィルハーモニー管弦楽団や山形交響楽団のメンバーも携わる。また、毎年バッハホール音楽コンクールを開催するなど、町内外の地域音楽活動の拠点を目指している。

この歴史あるホールが公共ホール音楽活性化事業に応募した理由は、非常に明確であった。アウトリーチプログラムを起点とし、疎遠になりがちだった加美町内への発信を改めて強化し、町内からの来客数向上、ひいては町民とホールの関係性を編み直すという目的が掲げられた。全国区になった公共ホールだからこそ、町内の住民はホールの存在は知っているものの、自分たちのホールという意識が失われがちになってしまったと言う。町民のホールに対するオーナーシップ（当事者性）を回復することが命題とされ、開館35年目を目前に、アウトリーチプログラムの開始に踏み切ったのである。

初年度はまず若い世代に向けて働きかけるために、アウトリーチ先には町内の幼稚園と小学校、中学校の4箇所が選ばれた。アウトリーチ全体のねらいは、豊かな米田に囲まれて暮らす子どもたちが生の演奏に触れること、そして、若い演奏家がひとつの分野で真摯に研鑽をする生き方から将来の夢や目標に向かって切磋琢磨する大切さを考えることとされた。アーティストには、事業担当者の檜野満さんが4月の研修時に「演奏に衝撃を受けた」という、ピアニストの金子三勇士さんを指名した。

第1箇所目のアクティビティは、中新田幼稚園に伺った。中新田幼稚園では、音色や曲想の違い、音楽に込められた気持ちを体感する40分プログラムが用意された。途中、緩急の激しいピアノ演奏にあわせて、教室を動き回りながら簡単な打楽器（幼稚園からお借りした）で音をだすというアクティビティが取り入れられた。音楽版だるまさんころんだ、とでも言えばわかりやすいかもしれない。この約3分の「よく聴く」体験により、最後の演奏曲〈ハンガリー狂詩曲〉を若干5～6歳の園児たちが目をランランと輝かせて、最後までしっかり集中して聴き続けた様子は忘れがたい。

賀美石小学校、旭小学校、宮崎中学校では、音楽の表現の幅広さを体感する工夫として、ショパンの〈英雄ポロネーズ〉の演奏中にピアノの下に潜り込んだり、金子さんに近寄れる時間が設けられた。楽器の振動やハンマーの動き、金子さんの息遣い、指の動き、音圧に、思わず立ちすくむ児童・生徒も少なかった。リスト作曲〈愛の夢〉の演奏前に、金子さんから「愛ってなんだろう？」と問いが投げかけられた。すると、「命」「やさしさ」「人」「家族」「友達」「ハート」などの思い思いの答えが児童・生徒たちから寄せられ、周りに立ち会っていた大人の方が驚くという場面も見られた。

すべてのアウトリーチ先で、金子さんはこれまでの生い立ちや自身の音楽に対する想いを話しながら、「夢や目標をしっかりとって、あきらめずにチャレンジし続ければ、長い時間がかかっても、叶う」と力強く語りかけた。質問コーナーでは、「ピアニストをあきらめようと思ったことはありますか」「緊張はしますか」「プロになる人は才能があるから最初からうまいのですか」など率直な質問が寄せられた。特に進路決定間近の中学3年生たちは、金子さん自身のこれからの夢や目標について、大切にしている哲学などをめぐる回答内容に、その日一番の真面目な表情で聞いていた。

最終日のコンサートには、町内外からたいへん多くのお客様がご来場くださった。ホール前にハンガリー国旗を掲揚くださるというサプライズもあった（金子さんは大喜び!）冒頭、突然マジヤール語で

話し始めた金子さんに会場は呆然。日本語に切り替わった途端に、お客様の顔が一瞬にしてほころんだのは言うまでもない。この日の演奏プログラムは、バッハホールにちなんで、バルトーク作曲〈バッハに捧ぐ〉とJ.S.バッハ作曲〈フランス組曲 第5番〉が演奏された。また、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ〈月光〉では、最新の楽譜研究から導かれた解釈と奏法に基づいて演奏がされ、これまでの作品のイメージとは異なる音楽世界が広がった。

中新田バッハホールは、これから独自のミッションのもと、加美町内でのアウトリーチ活動を定期的に実践していこう。平成15年に完成した「やくらい文化ホール」も地区内に隣接し、活動内容の差別化も求められている。町内におけるホール認知度は高いだけに、いかに来館を促すための心理的ハードルをさげられるかが直近の課題と思われる。チケット価格やアクセスだけでは解決しがたい課題にも、忍耐強く取り組む場面がでてくるかもしれない。中新田バッハホールが加美町の町民の魂となり、町民が自分たちのホールだと誇れる音楽堂になるためには、これからのアウトリーチプログラムが要となると感じている。加美町ならではの仕掛けと内容で、今後も末永くホールと地域をつなぐ様々な取り組みを継続くださることを願う。

実施団体：南陽市

実施時期：平成27年11月27日（金）～平成27年11月29日（日）

出演アーティスト：田村 真寛（サクソフォン） 大野 真由子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：初めてのクラシックミニコンサート

期 日：平成27年11月27日（金） 10：30～11：00

会 場：南陽市立こばと保育園 お遊戯室

参加者：全児童74人（年少24人、年中26人、年長24人）、先生8人、
父兄4人

幼児を対象に間近で演奏に触れるミニコンサートを実施しました。大野さんの伴奏に合わせて、田村さんが演奏しながらホールに入場した他、楽器の説明と様々な演奏、幼児が鈴やタンバリンと一緒に叩いて演奏する時間も設けました。サクソフォンの奏でる音や演奏者の動きを幼児が興味を持って観ている姿が印象的でした。



タイトル：クラシックを楽しむミニコンサート

期 日：平成27年11月27日（金） 14：00～14：45

会 場：南陽市立荻小学校 音楽室

参加者：全校生徒 24人、先生5人

音楽室に生徒が椅子を運んできてミニコンサート実施しました。コンサートの前に小学生と一緒に給食を食べる時間を設けたことにより、より一層アーティストの距離が縮まったように感じます。子ども達は、終始演奏に興味を持って向き合っているように感じました。一緒に演奏する時間では、持ち寄ったピアノカやリコーダー、ビブラフォン等を使って演奏しました。



タイトル：事業の輪を広げるミニコンサート

期 日：平成27年11月28日（土） 11：00～11：45

会 場：南陽市文化会館 大ホール舞台上

参加者：ホール関係者、市職員、一般 計27人

前日のアウトリーチ2ヵ所の事業報告会（後パブリシティ）を兼ねた関係者向けのミニコンサートを開催しました。27日の様子を写真で展示した他、実際に演奏を聴き、カスタネットで合奏する時間も設けました。一般の参加者に子ども達も数人いたことで、より実際の形に近いアクティビティとなりました。また、舞台上でスポットライトを浴びる体験も新鮮であったようです。参加した関係者からは、アウトリーチを自らの会館でも実施していきたいとの感想をいただきました。



タイトル：大人のサクスライブ

期 日：平成27年11月28日（土） 15：00～15：45

会 場：竹田電機（MIYAUCHI2632）店内

参加者：地域住民 計35人

竹田電機のカフェ風の店内を借りて地域の音楽愛好家の方を対象にミニコンサートを開催しました。演奏曲も映画音楽等も交え、大人向けのコンサートとして構成しました。会場では、普段から定期的に演奏会が開催されており、来場者も演奏に聴き入っているようでした。結果として、翌日の当日券による来場に結びついた部分もあったようです。

コンサート

タイトル：3才からのクラシックわいわいコンサート

期 日：平成27年11月29日（日） 13：30開演 15：30終演

会 場：南陽市文化会館 大ホール（定員：1403人）

入場者数：224人（大人170人、小人54人）

3才から入場できる本格的なクラシックコンサートを平成27年10月開館の南陽市文化会館大ホールで開催しました。二部構成、2時間のコンサートとし、到達目標として、コンサートにおける青少年、20代～40代の世代の参加割合5割を目指しました。アンケート結果から、到達目標はおおむね達成しましたが、コンサートの集客方法や事業を企画する上でのコンセプト、対象者の設定については検討が必要な課題の1つと考えています。



① 応募の動機・事業のねらい

本年10月の南陽市文化会館の開館を契機として、市の方針である文化会館を文化芸術の創造拠点、交流人口増の起爆剤として活用し、「人が集い賑わいのある南陽」を実現するため、広く地域の方々が文化芸術に触れる機会を提供し、普段は文化事業に足を運ばない子育て世代の親子や小学生にも働きかけていくため、本事業に応募しました。

② 企画のポイント

事業の趣旨を明確にするため、到達目標を掲げて、企画運営に望みました。

アクティビティ4ヶ所については、今後の継続的なアウトリーチ活動も視野にいれて、教育委員会及び保育施設の所管課とも連携をとりながら選定を進めました。また、アクティビティ1ヶ所をホール関係者向けのミニコンサートとし、事業報告会を兼ねる形で実施しました。本番のコンサートは、子育て世代の親子が気軽に訪れることができるように3才から入場できるコンサートとしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

現状分析による課題の整理と、それに対する方向性を見出していく過程が最も苦労しました。行政ネットワークを生かしながら、情報を分析・整理し、課題解決に向けた方針を見出していくことが企画を実現する上で重要であると改めて感じました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターの小澤さん、アシスタントの三浦さん、地域創造担当者の下川さんからポイントごとに助言をいただきながら、情報として不足している点を埋めていく作業を行いました。それにより、一つ一つのアクティビティやコンサートについて実りあるものになったと思います。

⑤ 事業を実施しての成果

来場者アンケートでは、世代に関わらず多くの方からコンサートについて良かったとの回答を得ており、クラシック音楽への興味関心を寄せるきっかけになっているものと考えます。また、コーディネーターの方々よりクラシックコンサート及びアクティビティを開催する上での様々なノウハウを頂戴できたことが会館のスタッフにとっての成果であると考えています。これらを生かし、今後も特色ある事業を企画実施してまいります。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

事業企画のスケジュールを計画的に実施しなければならないと考えます。また、事業のコンセプト、対象者の設定をより明確にしていくことが事業の成功につながるものと考えています。おんかつコンサートを含め、会館事業の周知方法について、いかにして対象者に情報を伝えていくかも課題であると考えました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業を通じて、「初めてクラシック音楽を聴きにきた」との声を多くいただきました。その多くの方が生演奏の魅力に引き込まれ、クラシック音楽を純粋に楽しんでいるように感じられました。文化会館は、様々なジャンルの文化芸術の入口を作り、一人ひとりが文化芸術、地域文化を創造するためのきっかけをつくるのが一つの使命であると考えています。今後、より魅力ある事業の企画運営を進めたいと考えています。

アシスタントレポート

三浦 幸恵

今回訪れたのは東京から新幹線で約2時間20分、山形市と米沢市のほぼ中間に位置する人口約3万2千人の山形県南陽市。開湯920年の歴史を誇る赤湯温泉があり、温泉街として首都圏からも多くの観光客が訪れる町である。

南陽市おんかつの拠点になったのは、平成27年10月開館の南陽市文化会館。南陽市文化会館は、建物の主要構造部（柱やはりなど）を耐火木造で構築した国内初のホールとして注目を集める「木のホール」である。地元の木材をふんだんに使った木の豊かな香りがあふれるホールを、幅広い年齢層の方々に知っていただくため、アーティストはサクソ奏者・田村真寛さんとピアニスト・大野真由子さんに決まった。

■アウトリーチ

アウトリーチ先は、こどもを対象とした保育園、小規模小学校（全校29名）、そして大人を対象とした市役所・教育関係者向けのインリーチ（大ホール舞台上）、地域の方々が集う竹田電機（街のアートスペース）が選定された。

遊び心たっぷりのデュボア「パリジェンヌ風に」ではこどもたちに歩み寄り耳元で音をきかせ、バッハ「G線上のアリア」ではソプラノ・サクソの綺麗な音色を、そして、「ジェラシー」では情熱的な表現をみせるなど、サクソの多彩な音楽を楽しめる内容であった。そして、おんかつ2年目となる田村さんのチャレンジは「音を鳴らしてみる体験」を取り入れることだった。カントループ「オーヴェルニュの歌第1集」「3つのブルー」の一部を使って、手拍子やカスタネットなどの楽器でリズム遊びをしたり、吉松隆「ファジィ・バード・ソナタ」の一部を使って、ピアノやシロフォン、マリンバで共に即興演奏をしたりと新たな試みが行われた。

特に印象に残ったのが、全校29名の小規模小学校への訪問であった。演奏の前にたっぷり時間があつたため、授業の見学や給食と一緒に食べて交流し、こどもたちや先生方とゆっくり会話をする時間がとれた。家族のようなアットホームな校風とゆるやかな時間のなかで、こどもたちの様子や珍しい学校の行事、南陽市のおもしろいところなどを知り、アーティストが街の方々に徐々に親身になっていく様子を垣間みることができた。

■コンサート

就学前のこどもや若年層・子育て世代にもホールに積極的に足を運んでもらいたいとの思いから、3歳以上入場可と設定した。内容は、幅広い層の方々にホールに足を運んでいただくために、あえてこども向けに偏らず、サクソのオリジナル曲を中心とした本格的なものとし、「3才からのクラシック わいわいコンサート」と題された。当日は、親子連れや中高の吹奏楽部員などが多く見られ、本格的な曲目と田村さんの優しいトークによってなごやかな雰囲気コンサートになったと思う。

今回は1305席の大ホールでの実施となり、響きのよい空間を生かした点は良かったが、集客には課題が残った。事業内容の性質と音響の状況によるが、おんかつのようにアーティストが地域に入り込むような事業の場合は、館内に併設される小・中規模ホールで行うことで、より出演者の雰囲気や魅力が伝わる親密な空間が作れる可能性も大いに感じた。

■さいごに

開館直後、視察の対応や数々のイベントの準備・本番が重なる時期に実施したおんかつ事業。そのため、鈴木さんをはじめとするホールの皆さまには大変な苦勞がうかがえた。まずは、幾多のハプニング

を乗り越え、このおんかつ事業を成し遂げたホールの皆さまに大きな拍手を送りたい。

今回のおんかつを足がかりとして、これから更にホールの魅力を広げ、是非たくさんの仲間をつくっていただきたいと思う。ぬくもりあふれるあたたかなホールの持ち味と素晴らしい音響を生かし、街のシンボルのひとつとして、南陽市民に愛される施設となることを期待したい。

実施団体：NPO法人カルチャーネットワーク

実施時期：平成27年9月2日（火）～平成27年9月5日（土）

出演アーティスト：廣田 美穂（ソプラノ）

アクティビティ

タイトル：親子で楽しもう！「はじめてのクラシック」

期 日：平成27年9月2日（火） 11：30～11：40

会 場：おひさま広場 おひさま広場（遊具広場）

参加者：4才以下の子どもとその保護者・おひさま広場スタッフ 57人

市内の子育て支援施設を会場に、普段は子育てで忙しく音楽に触れる時間の少ない保護者とその子どもたちを対象に実施。手遊びを交えた歌などもあり、最初は戸惑っていた子どもたちも徐々にアーティストに親しんでいく様子が見れた。特に、曲の紹介中は騒いでいた子どもたちが歌いだすとピタッと静かになる様子が印象的であった。

施設としても初めての試みであったが、保護者やスタッフには好評であった。

タイトル：オペラと過ごすひととき「川のせせらぎコンサート」

期 日：平成27年9月2日（火） 14：30～15：15

会 場：和楽久しらかわ 食堂

参加者：施設利用者・施設スタッフ 28人

高齢者福祉施設の入居者・利用者および施設スタッフを対象に実施。入居者については当初参加しないと言っていた方も参加され、全員（17人）に参加していただけた。

主に高齢者が対象で、歌好きが多いということで、オペラのほか唱歌を取り入れたプログラムで実施。全員で合唱した際の元気で大きな声に驚くとともに、歌っている参加者の表情から人と人とを繋げることができる歌ならではの楽しさや魅力を再認識させられた。

タイトル：本格オペラ「声という楽器で生み出すクラシック」

期 日：平成27年9月3日（火） 11：25～12：20

会 場：大屋小学校 音楽室

参加者：児童・教諭 40人

全校児童61人という市内で一番小さな小学校の4・5・6年生37人を対象に音楽室を会場として実施。普段とは違った雰囲気音楽室にソワソワした様子の児童達、初めはアーティストの歌声と声量に驚きを見せていた表情もクイズや「ふるさと」の合唱など交流を深めていく中で、笑顔に変わっていった。また、今回対象ではない1・2・3年生が音楽室の外の廊下や階段で聴いていたおり、結果的に全児童に歌声を届けることができた。



タイトル：四季を彩るオペラの歌声「心に響くクラシック」
期 日：平成27年9月3日（水） 16：30～17：15
会 場：白河市立図書館 会議室
参 加 者：白河文化交流館建設現場作業員・図書館スタッフ・図書館利用者 79人

現在建設中の白河文化交流館の中で、作業員を対象に実施を予定していたが、雨天続きのため会場整備ができず、隣接する市立図書館に会場を変更し実施。参加人数について現場担当者も4～50人ではないか予想していたが、70人を越える人数となった。

参加人数もさることながら「ふるさと」の合唱で全員が椅子から立ち、真面目に歌っていた姿は、歌や音楽への関心の高さが窺えた

コンサート

タイトル：本格オペラ歌手による ワンコイン カジュアルコンサート
期 日：平成27年9月5日（土） 18：00開演
会 場：白河市民会館 ホール（定員：684人）
入場者数：276人

開催日を市内のイベントと重ならない土曜日とし、仕事の人も最初から鑑賞しやすい18時を開演時間とした。料金をワンコイン500円（前売り）に設定し、プログラムもオペラの曲目のほか「ふるさと」などの唱歌を加え、オペラに馴染みの薄い市民に気軽に鑑賞していただき、アーティストを身近なものに感じていただける内容とした。276人という予想（200人）を越えた人数を集客することができ、コンサートの内容については概ね好評を得た。



① 応募の動機・事業のねらい

貸館を主な業務としてきた会館事業であったが、平成28年度に完成予定の新会館に向けオープンまでをノウハウを得る期間として捉え、平成26年度より自主事業を行うようになった。自主事業を行う目的の一つは市民に様々な芸術文化に触れる機会をつくり、身近なものと感じてもらふことと考える。それにはまず、ホールと市民の距離を縮めることが重要であり、その手法の一つであるアウトリーチなどの具体的なノウハウを体験を通じて得ることは、優先すべき事項ある。

② 企画のポイント

アーティストについては、多くの市民に受入れられるジャンルであることやアクティビティでのアイデアの実現性を考慮した。アクティビティでは、様々な世代・環境の人たちにより多く参加していただける会場や協力が得られる会場「今」しかできない会場を選定した。コンサートでは、堅苦しくない雰囲気気で気軽に楽しんでいただけるようなタイトルとし、料金もワンコイン（前売り500円:当日200円増し）に設定した。また、無料の託児コーナーを設け、小さな子どもがいる保護者も鑑賞できるように配慮した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティでは、ピアノの搬出搬入やアーティストの靴の持込みへの対応など、会場準備・設営面でいかにスムーズに行うか。

コンサートでは、チケット販売数と実際の来館者数をどう伸ばしていくか。

全体としては、スタッフのスケジュール調整。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティ会場側の協力・了承を得、機材や備品の搬入搬出は前日の準備や持込み・搬入開始時間の繰上げで対応、靴は会館備品のカーペットを会場に敷くことで対応した。また、スタッフ間で前日・当日ともに流れを確認した。チケット販売数・来館者数では、広報紙や情報紙でのPRや個別に地域の団体に宣伝・告知を実施した。スケジュールについては、十分ではなかったが変更内容等、新しく知り得た情報を都度伝達した。

⑤ 事業を実施しての成果

今まで、ただ漠然と捉えていたアウトリーチやコンサートについてその手法を体験できたことは、私たちにとって非常にメリットがあり、手法はもちろん事業を通じての反省点など机上の課題から現実の課題として捉える機会となった。各アクティビティ参加者の目の輝きや笑顔は、芸術文化を通じてこの街をどうしていくかということ、会館やスタッフが今後やるべきことに方向性や可能性を見出した。また、外に出ることで、新しい会館への期待度を生の声で受け取ることができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

当NPOでは文化施設を3館管理しており、今回の事業スタッフが各々館を担当し、多くの業務を兼務しているということから、情報の共有や役割を分担すること、アイデアをより良いものにしていくことにおいて不十分だったところがある。これを単なる人数的な問題や1事業における一時的な問題と捉えるのではなく、今後の事業や館の特徴づくりにどのように活かしていくか検討する必要がある。このような課題を短時間で解決することは難しく、定期的な検討機会を設けることも課題の一つである。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

ホールで開催される事業を如何に知ってもらうか。一方的な情報発信には知ってもらうことに限界がある。コミュニケーションを活発にし、双方向性のある情報発信を広報宣伝に活かす活動が必要。

公共ホールが賑わうことは街が賑わうことに通じる。新会館への期待度は高く、様々な意見はあるが市民に文化芸術を身近なものとして頻繁にホールに足を運んでいただくことや市民文化活動の醸成に繋がる事業は、私たちの挑戦なしでは前に進まないであろう。

1960年代から1990年代にかけて、日本国内に多くの公共ホールが建設され、数々の公共ホールが日本の芸術文化を支えてきた。しかし時代とともに施設は老朽化し、最近は新しいホール建設が行われることも少なくない。

福島県白河市にも1964年白河市民会館が建設され、多くの市民の感性を育んできたが、建設後50年が経ち、施設は老朽化、そのため新たなホール建設が行われており平成27年9月現在建設の真っ只中である。

今回公共ホール音楽活性化事業に取り組むのは、現在の白河市民会館を管理運営するNPOカルチャーネットワーク。おんかつの担当者はNPO法人の矢上氏、祓川氏、そして新ホール準備に携わる白河市の鈴木氏の同級生3人組みである。

白河市がおんかつに参加したのは新ホール完成を間近に控え、より深く市民へ芸術文化を届けたいとの思いがあったこと。アクティビティ先に選んだのは児童施設の「おひさま広場」、高齢者住宅の「和楽久しらかわ」、そして市街地から離れた場所にある「大谷小学校」、そして現在建設が進んでいる新ホールの建築に携わる現場の方々を対象にアクティビティを実施した。アーティストは廣田美穂さん。アクティビティでは主にホールへ足を運ばない方々を対象として実施した。お母さん方や高齢者住宅の方々など、廣田さんの歌声とその軽快なおしゃべりで参加された方々にもとても喜んでもらうことができた。お母さん方はなかなか聞くことのできないソプラノの歌声にうっとりしていた。

小学校でのアクティビティでは、子供たちは廣田さんの声量に驚く。小学生たちは市街地から離れたところにある小学校ということもあり、とても純朴な子供たちで演奏に対する反応もとても素直で身を乗り出して演奏に聴き入っていたのが印象的だった。

今回の白河市のアクティビティでなんといっても特徴的だったのは新ホール建設に携わる方々へのアクティビティである。このアクティビティはホール建設に携わる方々に、今後ホールで実施されるクラシック音楽の公演をイメージしながら、ホール建設に携わってもらいたいと想いから企画され、当初ホールの建築現場でのアクティビティの実施を計画していた。しかし、工事日程や天気などの要因から現場でのアクティビティは叶わなかったが、別の会場で現場作業に携わる多くの方々に聴いてもらうことができた。普段クラシック音楽は聴かないという現場作業員の方々には会場に入るときには、硬い表情であったのだが、音楽が始まるとだんだんと心地よい響きに耳を傾けてくれ、帰りは心なしか晴れやかな顔になっていたのがとても印象的で、音楽のもつ力を改めて感じるアクティビティであった。作業に携わる方々からも、施設の目的がイメージでき、このような施設建設に携われたことを誇りに思うと感想をいただくことができ、担当者の意図を参加者に伝えることができた。

本公演は新ホールに変わることで近い将来取り壊しが決定している白河市民会館で実施され、地域からも多くの方が足を運んでくださり、廣田さんのパワフルかつ繊細な歌声に会場からは割れんばかりの拍手をもらい大成功となった。これから取り壊される旧ホールの50年に想いを馳せながら、白河市の芸術文化の新たな発展を予感させるような素晴らしい演奏会となった。

全体を通して、特に感じたのはホールの管理運営者と設置者である行政がともに協力するスタッフたちの熱意と芸術文化に対する想いの高さである。それが今回のおんかつの成功につながったのではないかと思う。おんかつを含めこれからの白河の芸術文化活動は新ホールのオープンという大きな節目を迎えるが、これまで白河市民会館で培われた50年の歴史とともに、これからの新ホールから発信される文化は、おんかつに携わったスタッフの皆さんの熱い想いと、新しいホールにより地域の人々を巻き込みながら大きな一歩を踏み出してほしい。

実施団体：一般財団法人町田市文化・国際交流財団

実施時期：平成27年12月9日（水）～平成27年12月11日（金）

出演アーティスト：金子 三勇士（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：金子三勇士ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月9日（水） 10：30～11：00

会 場：東平ひまわり保育園 2階

参加者：3歳児以上 86人

水疱瘡流行のため中止

タイトル：金子三勇士ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月9日（水） 14：00～14：45

会 場：鶴川サナトリウム病院 会議室・食堂

参加者：入院患者と病院関係者 100人

入院患者様と病院の関係者を対象に開催。病院の関係者も入れ替わりで鑑賞するなど、大盛況でした。入院患者様から、曲についての質問などもありました。音楽をやっていたというかたも数名いて、プロの演奏を間近で聴いて、とても感動した様子でした。

タイトル：金子三勇士ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月10日（木） 11：35～12：20

会 場：三輪小学校 音楽室

参加者：3年生 85人

3年生の全クラス（3クラス）を対象に開催。生徒たちにピアノの周りに立ってもらい、迫力ある演奏を間近で聴いてもらったときは、とても感動した様子でした。

また、金子さんからの質問の時間では、次々に手が上がり、積極的な生徒が多かったです。クラシックについての話や、ハンガリーについての話も、とても楽しそうに聞いている生徒が多かったです。

タイトル：金子三勇士ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月10日（木） 16：00～16：50

会 場：鶴川中学校 音楽室2

参加者：吹奏楽部 30人

放課後の時間で、吹奏楽部を対象に開催。ピアノの周りで演奏を間近で聴いているときは、驚きを隠せない様子でした。また、金子さんからの質問の時間では、恥ずかしそうにしている子が多く、なかなか手が上がりませんでした。金子さんの演奏を聴いて、またピアノをやりたいとなったという声が多数あがっていました。



コンサート

タイトル：金子三勇士ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月11日（金） 14：30開演

会 場：和光大学ポプリホール鶴川 ホール（定員：300人）

入場者数：289人

ショパンの英雄ポロネーズや、リストのラ・カンパネラなど、クラシックの名曲を中心に、解説を入れながらのコンサートでした。アクティビティとは違い、ピアノの周りに立ってもらうなどはありませんでしたが、フルコンサートピアノによる、大迫力の演奏となりました。



① 応募の動機・事業のねらい

金子さんのテクニックと迫力のある演奏で、音楽に触れる機会の少ない方や、ホールに足を運べない方に、音楽の素晴らしさや感動を届ける。ホールでの演奏も聞いてみたいという気持ちを持っていただく。

② 企画のポイント

アクティビティの内容については、金子さんにほぼお任せしました。変わったアイデア等は特に伝えず、通常のコンサート形式で演奏をしていただきました。

ただ、身近で聴きやすい曲を中心にとということだけはお伝えしました。音楽にまったく興味のない方が、難しい曲を聴いても、興味がわかないと思うので、そこだけは企画のポイントとしていました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

学校との日程調整で苦労しました。学校は年間でスケジュールが決まっているところがほとんどでしたので、開催したいけれど日程が合わないという学校がいくつかありました。

また、グランドピアノがある施設を探すのも苦労しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

学校との日程調整を優先し、その後病院や保育園との日程調整をしました。

グランドピアノがない施設では、アップライトピアノで対応していただきました。

⑤ 事業を実施しての成果

金子さんが演奏を聴いているときは真剣な表情の方が多く、金子さんの話のときは笑顔の方が多かったというのが、一番の成果だと思います。金子さんの演奏や話を通じて何かを感じてくれたのではないかと思います。

また、中学校についてはピアノを習うのを辞めてしまったが、もう一度ピアノを習いたくなったという方が数名いたのも、とてもよかったと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

もっとアクティビティ先との連絡を密にとる必要があったのではないかと思います。

アクティビティ先によって、歓迎ムードの所、そうでない所がはっきりしていたので、もう少し事前に盛り上げる必要があったのではないかと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

ホールの役割を改めて考えさせられる事業でした。プロの演奏を聴きたいけど、ホールへ足を運べない方や、プロの演奏を聴いたことがなく、音楽に興味をもつきっかけがない方などがたくさんいるように感じました。今後は、そういった方へどのようにして音楽に触れる機会やきっかけをつくれるかを考えていきたいと思っています。

東京都町田市和光大学ポプリホール鶴川でのおんかつを1) アクティビティの内容、2) アクティビティの考え方に分けて振り返りたい。

1) アクティビティの内容

今回のピアニスト、金子三勇士さんとは小学校、中学校、病院での3回のアクティビティを実施した(残念ながら予定していた保育園でのアクティビティは園内で水疱瘡が流行し中止)。いずれのアクティビティでも第一線で活躍するコンサートピアニストとしての経験と実績を反映した、金子さんの面目躍如というべき演目、演奏だった。特に注目したいのは、演奏間でのアクティビティ参加者へのお話、参加者との会話だった。けして饒舌ではないのだが、落ち着いた口調で自然と話の内容が頭に入り、参加者の心を掴み、そして、ここが一番大事なのだが、演奏の邪魔をしない。話の内容は金子さんのアイデンティティーの話、幼少のころからハンガリーで音楽を勉強したこと、作曲者や作品の紹介が中心だった。特殊なことを話すでもないのに、なぜ金子さんの話がアクティビティ参加者の心を掴むのか考えてみた。金子さんの話は、全て金子さん自身の話なのだ。背伸びをせず、謙遜もせず、自分の経験とそれに基づき考えていることを自分の言葉で話している。例えば作曲家リストの話をしてもしリストの人生という事実を伝えるだけでなく、自分がそのことをどう思うのか、そしてそのことが金子さん自身にどう影響しているのかを伝える。そして、決して無理に面白いことを言ったり、盛り上げようと話題を盛り込んだりしない。多くの参加者の前で話すのだから盛り上げたい、特に児童・生徒の前では静寂に耐えられないという心理になりそうなものだが、それが無い。その結果、金子さんという人間が、個性が何も足さず、何も引かず、まっすぐに感じられる話になっていた。アーティストにとって一番大事だと私が思う、唯一無二性、「あなたじゃなきゃだめ」ということが演奏だけでなく、話しや会話にも存在していた。アウトリーチを展開するアーティストはもちろんのこと、我々にも参考になる生き方というか、ものごとへの姿勢だと思う。そのことはアクティビティ参加にも、特に小学生、中学生には伝わったのではないだろうか。完成されたアクティビティだった。

2) アクティビティの考え方

今回の和光大学ポプリホール鶴川は主催公演も多く開催し、施設の稼働率も高く、所謂、お客さんが付いているホールである。今回も公演1ヶ月前には300席全席が完売。今回は平日(金曜日)の午後(14:30開演)のコンサートだったが、主催公演はこの時間帯、この方法で継続しており、毎回来場者数は順調と聞いている。施設の存在と活動が市民の要求と一致しているホールだ。

ここで、再確認したいのがアクティビティ(アウトリーチ)への考え方だ。既にチケットが完売するのだからアウトリーチをして、コンサートのこと、ホールのことを伝える必要があるのかという考え方があるかもしれない。しかし、よく考えてほしい。毎回の固定客で満席になるということは、その固定客以外には事業を提供していない、できないという見方もできる。お客さんが付いている上での贅沢な悩みかもしれないが、「ホールが地域文化を創造し、その発展を図る」ことを目的とするならば、結果的にであっても、一部の固定客を対象とした主催事業だけでは不十分だ。そこで一つの手段として今回のアクティビティが活きてくる。アーティストとの交流を通じて、あらゆる市民一人一人が芸術やアーティストに影響を受けて、変化が起こる。コンサートの実施が主でアクティビティはその周辺事業という考え方でなく、どちらもそれぞれ目的をもったメインの事業なのだ。既にホールでの主催公演が順調であるからこそ、このアクティビティの目的、事業全体の位置づけを再確認する意味がある。次年度のおんかつ支援事業も実施予定と聞いている。是非、それまでに今回のアクティビティでの経験を活かしホール全体でアクティビティについての認識を再度共有し、これまでのホールの実績をさらに素晴らしいものにして、地域の文化政策の最前線としての更なる活躍を真に願っている。

実施団体：(公財)高岡市民文化振興事業団 高岡市民会館

実施時期：平成28年1月21日(木)～平成28年1月23日(土)

出演アーティスト：前田 啓太(打楽器) 藤原 耕(打楽器)

アクティビティ

タイトル：カラダで感じるパーカッション

期 日：平成28年1月21日(木) 11:30～12:15

会 場：高岡市立博労小学校 音楽室

参加者：4年2組 (24人)

パントマイムにはじまり、マリンバとジャンベの二重奏、スネアドラムの独奏のほか、即興演奏や児童も交えたコール&レスポンス、サンバと多彩な構成で、児童だけでなく先生方もアクティビティを楽しんでいる様子だった。即興演奏では、児童から何故か「桜と富士山」というシブいお題が飛び出し、会場は笑いに包まれた。しかし、突然の提案を一瞬で美しい演奏に変えてしまうアーティストの2人に、児童は驚いた様子で聴き入っていた。

タイトル：カラダで感じるパーカッション

期 日：平成28年1月21日(木) 13:50～14:35

会 場：高岡市立博労小学校 音楽室

参加者：4年1組 (25人)

2組に比べると大人しい児童が多く、最初は緊張した雰囲気だったが、コール&レスポンスやパントマイムで一気に前田さんの世界に引き込まれ、終始笑いの絶えないアクティビティとなった。演奏が始まると、前のめりになって真剣に聴き入っており、特にスネアドラムの演奏では、音の大きさや速さに驚いた表情を見せていた。「音がビリビリする」「ジンジンする」など、肌で感じる「音」に興奮した様子だった。

タイトル：カラダで感じるパーカッション

期 日：平成28年1月22日(金) 10:35～11:20

会 場：高岡市立川原小学校 音楽室

参加者：4年生 (27人)

アクティビティを経験するのは今回が初めてということで、先生方も興味深そうに参加されていた。学校所有の打楽器が豊富だったので、楽器はほとんど音楽室のものを使用した。児童からは「本当に学校の楽器?」「あんな音が出るの?」と驚きの声が聞かれた。次年度に連合音楽会という大きな発表会を控えていることから、特に前田さんの演奏技術に関心を持った児童が多く、手やブラシを使った奏法や鮮やかなバチ捌きに見入っていた。



タイトル：カラダで感じるパーカッション

期 日：平成28年1月22日（金） 13：45～14：30

会 場：高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所 第一講義室

参加者：2年生（50人）

幼稚園教諭や保育士を目指す学生を対象としたアクティビティ。対象の年齢が20歳ということで、小学校とは構成を変更し、より演奏を集中して聴いてもらえるよう比較的演奏時間の長い「RUSH OUT」を組み込んだ。めまぐるしく変わる音とリズムに、真剣に聴き入っている様子が印象的だった。アンコールのマリンバ二重奏「この道」は、対照的にしっとり落ち着いた雰囲気の演奏で、打楽器の持つ多彩な魅力を感じられるアクティビティとなった。

コンサート

タイトル：前田啓太パーカッションリサイタル～体感！パーカッションの世界～

期 日：平成28年1月23日（土） 14：00開演

会 場：高岡市生涯学習センターホール ホール(定員:403人)

入場者数：390人

地元の新聞やTVでアクティビティが大きく取り上げられたこともあり、会場はほぼ満席となった。今回のコンサートでは、通常と異なるステージの使い方を試みた。客席と舞台を地続きにしたことで一体感が生まれ、観客はアーティストの演奏をより間近で楽しみ、全身で音とリズムを体感出来た事と思う。コンサートは2部構成で、朗読なども交えたバラエティ豊かな内容となっており、笑顔で感想を語り合う来場者の姿が印象的だった。終演後のサイン会では長い行列が出来ていた。



① 応募の動機・事業のねらい

当館は客席数1,613席という大ホールのため、自主事業はオペラやオーケストラによるクラシックコンサートなどが中心である。そのため、クラシックに馴染みのない市民（特に若い世代）にとっては、会館を訪れる機会がほとんどないのが現状である。近年は、子どもを対象とした身体表現のワークショップや舞台作り、市民合唱団の結成など市民参加型の事業にも力を入れているが、より市民にとって身近で親しみやすい会館を目指し、新しいアプローチを模索している。この事業を通してそのヒントを掴みたいと考え応募した。

② 企画のポイント

クラシックに対する苦手意識を変え、まず興味・関心を持ってもらいたいという思いから、アクティビティ先には市内小学校と、将来先生として、子ども達に音楽の魅力を伝える幼稚園教諭・保育士養成所の専門学校生を対象に選び、普段の音楽授業では得られない驚きや感動を全身で感じてもらうことを目指した。ホールコンサートでは、普段の事業で特に来場者数の少ない「10代～20代の若者世代」をあえてメインターゲットとした。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

- I. アクティビティの会場がいずれも三階（エレベーター等の昇降機なし）であったため、大きな打楽器をどのように運ぶかが課題となった。
- II. アーティストから地元吹奏楽部との共演をご提案頂いたが、演奏に必要な楽器（ファゴット等）が必要数揃わないことや、提案のあった曲が学生には難易度の高いこと、コンクールや期末試験時期と重なり、十分な練習時間が確保出来ないこと等が問題となった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- I. 音楽室にある楽器を使わせて頂き、搬入・搬出する楽器を最小限に抑えた。音楽室の楽器を使ったことで、逆に児童らの興味・関心をひくことが出来た。
- II. 吹奏楽部の顧問の先生方と何度か協議を重ねたが、限られた時間の中コンサートで共演できる内容に仕上げることは難しいとの判断から、共演企画は断念。しかしコンサートのPR面でご協力頂けることになり、顧問の先生方から学生へ積極的に呼び掛けて頂けた。結果的に、学生の集客へ結びつけることが出来た。

⑤ 事業を実施しての成果

「アクティビティ」という取り組みがどのようなものか、訪問先の小学校など地域の方に理解してもらえたことが一つの成果である。このような事業を継続的に実施していくためには、地域の中に少しずつ理解者を増やしていくことが大切だと思う。また、ホールコンサートでは幅広い年代の方々にご来場頂き、特にメインターゲットとしていた10代、20代の客層が普段より多くみられたことに、手応えを感じている。ステージの使い方も好評で、新しいコンサートの形を提供出来たと考えている。また、今回の事業を通じて前田啓太さんという地元・富山県出身の素晴らしいアーティストにお会い出来たこと、共に事業を企画・実施出来たことは、当館にとって本当に大きな成果であった。この繋がりを今後も大切にしながら、より地域に根ざした、高岡でしか実現しえない魅力的な事業を考えていきたいと思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

細かいところで、伝達ミスや確認がうまく取れておらず、準備の流れを止めてしまう場面があった。打合せの内容や変更を、きちんと共有出来ていなかったことが最大の原因だった。コーディネーターやアシスタントの方々にフォローして頂き、何とか乗り切る事ができたが、関わっている全ての人と情報を共有することが、円滑に事業を進めていく上で最も大切なことだと、身をもって実感した。今回の反省を意識しながら、今後事業を展開していきたいと思う。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回アクティビティに参加した小学校の生徒が、何人かホールコンサートにも来てくれた。後日学校から頂いた児童の感想文の中には、「ワークショップが楽しかったからコンサートにも行きました」とあった。質の高い舞台芸術を提供することもホールの役割の一つだが、音楽や舞台に興味・関心のなかった人が「行ってみようかな」と思う、魅力的なきっかけ（仕掛け）作りを積極的かつ継続的に行うこともまた、ホールの大切な役割であると感じた。

<概要>

富山県高岡市は、加賀藩主前田利長の築いた高岡城の城下町として発展し、古くより仏具などを中心とする銅器産業が発達している。金沢から近いこともあり、市内の小学4年生全員がオーケストラ・アンサンブル金沢を聴く機会を持つなど、芸術教育にも力を入れている。今回のおんかつはもともと会場として想定されていた高岡市民会館（昭和41年開館）が改修中のため、高岡駅前に位置する高岡市生涯学習センターを会場に、前田啓太さんと、共演者の藤原耕さんの打楽器奏者2名を迎えて開催された。

<アクティビティ>

若いうちに本物に触れてもらいたいという観点からまずは市内の小学校2校（いずれも4年生・計3クラス）、そして子どもたちを指導する立場にある方にも是非本物に触れていただきたいということで、アクティビティの1件は幼稚園教諭・保育士養成所で行うことになった。

前田さんのアクティビティの特徴のひとつに「言葉を使わないコミュニケーション」がある。ボディパーカッションとパントマイムを組み合わせた「ここにボールはない」から、言葉を使わずジェスチャーのみでコール&レスポンスへと繋ぐ。前田さんが何を伝えようとしているのか読み取ろうと、子どもたちがぐっと集中する様子が見られた。途中数名に前に出してもらってリズム打ちの見本をしてもらった箇所があるが、戸惑ってうまくできなかった子どもを、これも言葉を使わずうまくフォローする前田さんの姿が印象的であった。

幼稚園教諭・保育士養成所については大半が20歳前後の女性という環境で実施。これまでの対象とはがらりと異なるため内容も少し変化を加え、より音楽面に重きをおいて進行された。前田さんには最初少し固さも見られたが、対象者が幼稚園教諭を目指す若者の集団ということもあってノリも良く、コール&レスポンスなども大変盛り上がった。

連日タイトなスケジュールで大量の打楽器搬出入を行うことは懸念のひとつであったが、財団の皆さんのチームワークにより、毎日スムーズに進めることができた。

<コンサート>

担当・小林さんの狙いは「ホールにあまり来られない層＝若い人、特に20代から30代の女性に足を運んでもらいたい」。そのため当該層に最も訴求力のありそうなアーティスト前田啓太さんを起用、公演内容やチラシのデザインについてもクラシックの王道パターンとは異なるアプローチをとった。会場はシューボックス式・客席可動型のホールで、館長のアイディアを元にコーディネーターとも相談を重ね、会場面積の約半分をフラットのアクティビティエリアとして両サイドにパイプ椅子を配置、スラストステージ形式で行う事になった。これによって席数を少し減らさざるを得なくなり、券売数から予測して席数を決めていたものの、当日券が予想を大きく上回る売れゆきで、急遽開演前にパイプ椅子を追加するという、嬉しい悲鳴が上がる公演となった。一方で、観客は普段見えない角度からも演奏を楽しむことができ、音だけでなく視覚でも楽しめる、前田さんの粋にはまらないスタイルに合ったステージが生まれたと感じる。終演後のサイン会には長蛇の列ができ、またそのうちには若い人も多く含まれていた。

<総括>

担当の小林さんは、コーディネーターと共にどうすればより良い方向へ進められるか、とても真摯に考え取り組まれていた。またそんな小林さんを後方からサポートする財団スタッフの皆さんの温かさも印象的である。

今回のアーティスト前田さんは同県出身ということもあって、ホールや地域と今後につながる関係が築かれたようであり、今後が楽しみである。

実施団体：川根本町

実施時期：平成27年10月15日（木）～平成27年10月17日（土）

出演アーティスト：前田 啓太（打楽器） 藤原 耕（打楽器）

アクティビティ

タイトル：ワークショップ

期 日：平成27年10月15日（木） 10：35・11：20

会 場：川根本町立第一小学校 集会室

参加者：1・6年生 50人

前半はボディーパーカッションなど言葉を使わず音と体でコミュニケーションをとり、子どもたちには一気に笑顔があふれた。町の杉板を叩いて演奏した時には、着座して演奏するアーティストを囲み、間近で体感することができた。最初は遠慮しがちだった子どもたちも終盤のサンバ演奏では積極的に参加、ノリの良い先生たちはサンバの列に加わり、児童だけではなく学校一体となって楽しむことができる機会となった。

タイトル：ミニコンサート

期 日：平成27年10月15日（木） 13：30・14：20

会 場：川根本町立本川根中学校 集会室

参加者：1・3年生 37人

川根本町の中学校には町として芸術鑑賞事業を実施しておらず、今回のようにプロの演奏家が上質な音楽を直接届けることができたのはとても意味あることであった。特に川根本町をイメージした即興は、「情景が浮かんだ」とアンケートに書いた生徒もいた。また、演奏だけではなく、アーティスト自身の生い立ちやプロを目指すきっかけを話し、生徒たちはアーティストを身近に感じる事ができた。

タイトル：ワークショップ

期 日：平成27年10月16日（金） 10：30・11：15

会 場：川根本町立南部小学校 音楽室

参加者：1・6年生 34人

町で一番小規模な小学校で、全校児童34名対象のワークショップを実施。ユーモアたっぷりのコミュニケーションに児童も先生も応え、アーティストとのパフォーマンスに積極的に参加した。児童数が少ないため、多くの子どもがアーティストの演奏技術を間近で体感することができ、特にスネアドラム演奏では演奏中のドラムを真下から見上げるなど非常に貴重な体験をした。



タイトル：ミニコンサート

期 日：平成27年10月16日（金） 15：00・16：00

会 場：静岡県立川根高等学校 音楽室

参加者：吹奏楽部・郷土芸能部 20人

対象が音楽を志す生徒であるため、質疑応答の時間を多く設けた。プロになるまでの経緯はもちろんのこと、『いい音楽』を奏でるための心得を伝授した。アーティストと生徒の年齢が近いため共感する部分が多いようで生徒はアーティストの言葉を真剣に聞き入った。演奏ではプロの技術を惜しみなく披露し、即興音楽ではお題を生徒から募り「松岡修三」という題名で見事に演奏。会場を沸かせた。

コンサート

タイトル：パーカッションパラダイス・響き

期 日：平成27年10月17日（土） 14：00開演

会 場：川根本町文化会館 ホール（定員：286人）

入場者数：102人

「音楽を楽しむ、音楽に親しむ」を第一に考えた素晴らしい構成をしていただいた。堅苦しいクラシック音楽ではなく、ユーモアたっぷりの楽しいコンサート。川枝高校郷土芸能部や中川根語り部の会話楽座との共演は本町ならではの演目であり、お客様を十二分に楽しませた。川根本町産の杉の木を使用した楽器の音色と演奏は観客を驚かせ、多彩な打楽器演奏は超一流で聞く者を圧倒した。



① 応募の動機・事業のねらい

川根本町文化会館は平成23年に民間企業と自主事業パートナーを結び、本町の地域資源を生かした本町ならではの多種多様な自主事業を協働して実施してきた。パートナーの得意分野であるパフォーマンス部門においては、これまで常にオリジナル作品を創るなど一定の成果を上げているが、音楽ジャンルへのアプローチが不足していた。そこで公共ホール音楽活性化事業に応募し、クラシック音楽公演及びアウトリーチの企画運営のノウハウを学び、今後、町民が上質な音楽に触れる機会を創出したいと考えた。

② 企画のポイント

アウトリーチでは子どもたち（次世代）を中心にプロの技術を間近で体感する機会をつくり、コンサートでは老若男女問わず町民が楽しむことができる、元気になるような事業にしたいと考えた。また、川根本町らしさ、川根本町でしか出来ないことを模索し、実現させたいと考え実施した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

① 川根本町らしさを生かした本町ならではの公演にするにはどうしたらよいかと考え、地元産木材や河原の石を楽器として演奏することや、地元太鼓演奏グループや地元民話語り部とのコラボレーションを企画したが、その実現に向けての調整。

② クラシック音楽公演未経験のため集客方法の工夫や見込み客の分析。未就学児入場不可にしたことによる多少の葛藤。

③ 別の事業が日程的に被ったことによる人手不足

④ 上記③をどのようにクリアしたか

① アーティスト代理人、コーディネーターや地域創造事務局との密な連絡はもちろんのこと、8月に行われた支援事業のプレゼンテーションに出席し、アーティスト本人及びコーディネーターと直接話げできたことが大きかった。

② クラシック音楽公演ということで、コーラスグループなど普段音楽を志す団体に宣伝活動を行い、テレビ局、新聞社へしつこくプレスリリースを実施した。結果、テレビ局1社、新聞掲載は2紙に計3掲載された。未就学児入場不可から、いつもは実施する保育園幼稚園へのチラシ配布は見送った。見込み客は当日まで読めなかったものの、地域文化を巻き込んだ公演となり、関心も高く多くの来場があった。

③ 多くの地域の方々がボランティアで手助けをしてくださった。しかしながらアーティストやコーディネーターの皆様にはご迷惑をおかけした。

⑤ 事業を実施しての成果

ワークショップでは多彩な打楽器を使い、中でも川根本町産の杉の木の板材を小枝のスティックで叩いた見事な演奏は驚きと感動を与えた。小学校では児童たちと一緒にサンバを演奏し、中学校では生徒からの質問に音楽を始めたきっかけや自分の中学生時代の話などユーモアたっぷりに答え、高校では音楽を奏でる心得を伝授した。どの会場でも前田さんは終始、プロの演奏技術を惜しみなく間近で披露し、皆その迫力に圧倒された。共演の藤原さんと即興も披露し、今この場でしか聞くことできない演奏に聞き入った。成果は子どもたちの表情にありありと表れた。

コンサートの課題であった「川根本町ならではの」の演目「赤石太鼓との協奏」「民話との共演」「地元産杉板楽器演奏」がいずれも好評であった。人類が最初に作り出した音楽用の道具とされる打楽器は、誰もが手軽にリズムを刻める身近な楽器。その打楽器を極めたプロの演奏を、間近で見て・聞いて・感じた観客からは絶賛の声があがり、アンケートでも「繊細なマリンバの響きに涙が出そうになった」「素晴らしい演奏で体が震えて涙が出た」「素晴らしい！心がゆさぶられる演奏だった」などの感想をいただき、音楽が持っている魅力に気づいた人が多かったと実感した。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

自分の能力不足や別事業との同時進行により、事業実施についてのノウハウを十分に吸収することができなかったが、アーティストが現地で音楽に集中する環境を整えておくことの大切さを痛感した。一番の課題は「継続していくこと」にあると考えている。今回の経験を来年度以降に生かし、町民に継続して上質な音楽をアウトリーチ・公演を通して届け、地域の音楽ニーズの掘り起こしや、次世代の育成を図りたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティ先での子どもたちの表情や反応を目の当たりにし、一流の音楽を間近に体感することの意義を実感した。本町には古来の民謡などなく音楽グループも少ないため、音楽文化に対する町民の関心が希薄ではないかと思っていたが、コンサートを実施しそれは間違いであったと痛感した。

この事業を通じて、音楽文化が豊かな生活の形成並びに相互理解及び文化交流の促進に大きく資すること、そして、この文化会館が地域における音楽文化の振興について重要な役割を担っていることを改めて考えた。

アシスタントレポート

桜井 しおり

川根本町は静岡県の中央部に位置する、人口が約7,600人の町である。町の面積の約90%を森林が占めており、平成26年度には南アルプスの一部がユネスコエコパークに認定された。今回のおんかつ事業は、ホールとして川根本町オリジナルの公演を実施したい、町の子供たちにアーティストと触れあう機会を提供したいという担当者の願いから、打楽器奏者の前田啓太さんを迎えて実施された。

<アクティビティについて>

事前視察の際、町内の小学校では川根本町の間伐材を机の木として使用していることがわかり、この間伐材を楽器として使用するプログラムを入れてみてはどうか？という提案があった。全アクティビティ及びコンサートでは、板状に加工した4本の間伐材をマリンバの鍵盤のように作成し、共演者の藤原さんと演奏した。

① 川根本町立第一小学校、川根本町立南部小学校

川根本町立第一小学校においては、おんかつでは珍しい50人という大人数の全校生徒に対しての実施となった。以前、川根本町では生徒数減少のため近隣の小学校を統合させることが検討されたが、少人数学級であることのメリットを忘れてはいないだろうか？という教育長の思いから少人数学級を継続させる事となった。このような背景から、現在は少人数学級のメリットを活かし、学年の垣根を越えて学校全体が一つになることを目指しており、学校側より、「是非全校生徒への実施をお願いしたい」との要望を受けたものであった。

両校通じて前田さんは演奏だけではなく演出にもこだわり、登場した瞬間から生徒たちを一瞬で惹きつけていた。途中には生徒たちとのコール&レスポンスを行うことで、コミュニケーションをはかったりと参加型プログラムもふんだんに取り入れていた。また、川根本町の間伐材を使った演奏では、生徒たちの輪の中に入り、藤原さんと息の合った演奏を披露した。圧倒的な演奏、マリンバの美しい音色に終始聴き入っていた生徒たちの姿が印象的であった。

② 川根本町本川根中学校、静岡県立川根高等学校

今回は演奏と共に前田さんの中学・高校時代の話も取り入れてほしいという学校側の要望から、1曲演奏を終える度に質問コーナーを設けるという構成をとった。両校とも最初は恥ずかしそうにしていた生徒たちが、一つ一つの質問に丁寧に回答する前田さんの姿をみて、徐々に発言するようになっていった。また、小学校では取り入れなかった即興演奏をプログラムの中に取り入れ、生徒達から提示してもらったテーマを元に藤原さんと二人で即興演奏を行った。二人のアイコンタクト・呼吸、演奏を通じてのコミュニケーションを目の当たりにした生徒達からは、演奏後に感嘆の声が上がった。

<コンサートについて>

川根本町文化会館でのコンサートでは、2つの地域資源を活かしたコラボレーションが取り入れられた。

1つ目は川根本町に残る民話の朗読と打楽器によるコラボレーション。川根本町では現在も多くの民話が残っており、それらをまとめた文献の中から“ダイラボッチ”という話を前田さんが選出し、中川根語り部の会「話楽座」の方と互いに朗読をしながら打楽器を演奏する形で実施した。短い話ではあるが、語り部の方にもカリンバで演奏に加わって頂き、会場は音楽と伝統芸能が融合しているという非常に抒情的な世界観に包まれていた。

2つ目は伝統芸能の赤石太鼓を部活動として行っている川根高等学校、郷土芸能部の生徒達との共演。1998年より川根高等学校で立ち上げられた郷土芸能部は川根本町外にも活動の幅を広げており、今回は

9人の生徒と共に「SPIRITUAL DRUMMER」の曲を演奏した。前日の練習では洋楽器と和楽器をどのような形でコラボレーションするのか試行錯誤を重ねたが、当日は前田さんと打楽器を取り囲むように赤石太鼓を配置し演奏された。お客様にとっても地元が誇る赤石太鼓を演奏する若い学生とプロのアーティストとの共演は、非常に魅力的なものであり、終焉後のアンケートでも多くの嬉しいお言葉を頂いた。

前田さんのコンサートは、全体を通してお客様を飽きさせないとてもユニークな構成で成り立っており、往來のクラシックコンサートとは一味違う音楽の多様性を伝えるコンサートとなった。一方的に演奏を聴かせるだけではなく、時にはお客様と演奏を通じてコミュニケーションを取りながら会場を一つにしていく姿が見られた。終焉後には写真撮影、サイン会の行列となり、お客様の笑顔と熱いお言葉から、大変ご満足して頂いたことが見てとれた。

<総括>

今回のおんかつで感じたことは、地域の特性・資源とアーティストがもっているこだわり、スタイルが反応すると、そこには新しい何かが生まれるという事である。無論、アーティストの「地域に対する歩み寄りの姿勢」も大切であるが、同時に地域もアーティストを理解しないと良い反応は起きないと感じた。今回のおんかつは、双方の姿勢とコーディネーターの的確な指示により成功したと言えよう。アーティストの演奏に間近に触れた、これからの川根本町を担う若い世代の世界観が少しでも広がっていくことを願いつつ、上記でも記した通り、人口が1万人弱だからこそ可能となる町の一体感を失わずに、新しい可能性にも挑戦をし続けてほしい。

実施団体：裾野市

実施時期：平成27年10月15日（木）～平成27年10月17日（土）

出演アーティスト：高見 信行（トランペット） 城 綾乃（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：奏でよう！トランペットコンサート①

期 日：平成27年10月15日（木） 10：30～11：20

会 場：裾野市立富岡第一小学校 音楽室

参加者：小学6年 62人（2クラス 6-2、6-3）

鳩と少年の曲で入場し、様々な種類のトランペットを使い演奏した。楽器体験では、ホースとジョウゴで作った簡易的なトランペットを吹いてもらい、音が鳴るかどうかわ、ホースの振動を子供たちに感じてもらい、トランペットの構造を学んだ。最後には、君をのせてを生徒たちが合唱し共演した。

タイトル：古民家の音楽会 ～郷愁の響き～

期 日：平成27年10月15日（木） 16：00～16：45

会 場：裾野市中央公園 旧植松家住宅（国指定重要文化財）

参加者：裾野市立西中学校 吹奏楽部30人

国指定の重要文化財の古民家の中でコンサートを開催した。出演者の衣装も羽織袴に着物と意匠を凝らし、照明による雰囲気作りや、草花を設置するなど、工夫を凝らした。近くの中学校の吹奏楽部の生徒を迎え、トークも交えながら演奏を行った。曲目も、童謡のふるさとや紅葉をいれ、特別な空間での演奏をじっくり聞いてもらうコンサートとなった。

タイトル：奏でよう！トランペットコンサート②

期 日：平成27年10月16日（金） 10：30～11：15

会 場：裾野市立富岡第一小学校 音楽室

参加者：小学6年 36人（1クラス 6-1）

15日と同じ場所で、残る1クラスの子供たちに演奏した。担任の先生にも楽器体験をしてもらい、音のでの楽しみを感じてもらった。やはり最後は、君をのせてを合唱し共演した。

タイトル：未来のアーティストを育む！トランペットコンサート

期 日：平成27年10月16日（金） 15：00～15：45

会 場：裾野市立深良小学校 音楽室

参加者：小学生 吹奏楽クラブ27人

吹奏楽クラブの楽器にふれている子供たちを対象に、プロの技術を存分に披露した。説明や冗談を交えつつ、音楽の楽しさを伝えた。



コンサート

タイトル：おやこで楽しむ！トランペットコンサート

期 日：平成27年10月17日（土） 14：00 開演

会 場：裾野市民文化センター 多目的ホール（定員：344人）

入場者数：190人 + 3歳以下の幼児

親子で参加できる、楽しいトランペットコンサート。第一部は、トランペットの魅力を存分に聞く内容とし、曲の雰囲気に合わせて照明も凝って、親子に聞いてもらった。休憩をはさみ、第二部では、曲調もノリノリの曲が多く、ミラーボールを取り入れたほか、親子いっしょに参加できる内容とし、開場前にエンタランスで、楽器作りワークショップで作ったペットボトルで作る楽器、ペッカーとブラッパーを使い、共演したりと盛り上がった。



① 応募の動機・事業のねらい

静岡県や裾野市の教育基本計画にある、子供たちに本物の芸術に触れる機会を提供することを目的に開催する。小中学校の児童生徒を対象とし、学校や歴史ある文化財で音楽を聴き、感受性や表現力の向上を図りたい。

② 企画のポイント

対象を子供たちに絞り、プロの演奏を“いつもの音楽室”や“普段は入れない特別な空間”や、“本物のコンサートホール”で提供することを目的とした。アーティストと子供たちが、自然にふれあい、交流できる場を創造し、今回の事業に関わる人々が、コンサートを通して楽しめる時間を作った。アーティストのキャラクターと企画の内容がとても合ったところ。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

1. アクティビティ先の学校や施設の調整
2. 本公演の集客がなかなか伸びなかったところ

④ 上記③をどのようにクリアしたか

1については、裾野市行政の方がとても良くしてくださり、学校側への調整や連絡をしていただいた。2については、アウトリーチをしていく中で本公演の宣伝を、アーティストの方がたくさんアピールしていただいた。仲良くなった子供たちが本公演に見に行くといい、当日の販売枚数がかかなり伸びた。

⑤ 事業を実施しての成果

子供たちの感想を、アンケートにて集計したところ、トランペットやピアノにとっても関心が高まり、またとても楽しいひとときを経験できたと、大好評だった。静岡新聞や地元新聞にも取り上げていただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

集客力と会館人員不足。本公演の広報戦略の見直し、掲載媒体を絞りつつ親子へ直接チラシが届くように図る。WEBやSNSなどを利用した販売促進や、Q & A以外にもアーティストと参加者のコミュニケーションの創造。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

市内には多くの文化的資源があると再認識した。子供たちがとても素直でノリが良かった。田舎の子の良さが出たと思う。その反面、知らないことや関係のないことだと、全く興味を示さない土地柄。如何にまきこみ、流れを作るかが集客につながると思った。

静岡県東部に位置し、富士山を眼前にのぞむ人口約4万5千人の裾野市。東京から新幹線で1時間ほどで、富士山の豊富な水源に恵まれ、景色の豊かさが魅力である。

そのような裾野市でのおんかつは、「自ら体験し、楽しむこと」に大きな主軸を置き、トランペット奏者・高見信行さんとピアニスト・城綾乃さんと親子向けのコンサートとこども向けのアウトリーチを行うことになった。

■アクティビティ

アクティビティは、小学校6年生を2回、小学校吹奏楽クラブ、中学校吹奏楽部が選定された。

技術的な課題を抱えたのは、中学校吹奏楽部へのアウトリーチだった。「いつかは裾野市を離れていってしまうこどもたちにも、ふるさとの風景心に留めてほしい」と事業担当・土屋さんの思いから、中学校隣接の公園内にある国指定・重要文化材の旧植松家住宅（江戸時代につくられた古民家）を会場にしたいと提案があった。この場所でアウトリーチを行うにあたって、建物の使用許可、電子ピアノの手配、PAの設置、照明の設置などのハードルがあったが、土屋さんと八木さんが事前に何度も何度も会場に足を運び懸案事項を確認し、さらにアウトリーチ前日にもアーティストとともに会場の下見を行うなど、万全の対策で当日を迎えることができた。

アウトリーチの内容は、トランペットの音色を楽しめる代表的な曲目。そして、演奏はもちろんだが、対象者の音楽の経験や年齢に合わせて、トークの内容を微妙に変化させ、興味・関心を引き出す高見さんの話術が素晴らしかった。こどもたちの小さな発言にも耳を傾けて、しっかりと受け止めて寄り添う高見さんの姿勢と、物怖じせず、人懐っこいこどもたちの双方のコミュニケーションによって、アウトリーチならではのあたたかな雰囲気をつくられたことは大きな成果であったと思う。

■コンサート

親子をターゲットに「親子でたのしむ！トランペットコンサート」と名付け、第1部ではトランペットの音色や演奏を楽しんでもらうとともに、「体験を加えたい」という土屋さんのアイデアから、第2部では手作り楽器を使った大合奏をメインとしたプログラムができた。

親子で気軽に楽しめるように考えた、普通のクラシック公演にはない2点の工夫を紹介したい。まずは座席である。可動式座席の前方5列を撤去し、平土間のスペースをつくり、パンチカーペットを敷いて「かぶりつき席（床座）」をつくったこと。そして、2点目は開場中の「楽器作りコーナー」にて楽器作りワークショップを行ったこと。普段からお手伝いをしてくださっているボランティアの皆様にご協力いただき、ペットボトルでつくる「プラッパー（ブブゼラのような音になるもの）」と「ペッカー（ビーズを入れたマラカス）」の2種類の楽器を作成した。

第1部はトランペットの名曲ゲディケの「コンサートのための練習曲」やアンダーソン「トランペット吹きの休日」などを、ピッコロ・トランペット、古楽器、フリューゲル・ホルンといった複数の楽器を使い、多彩な音色で演奏した。続く第2部は、数曲演奏を聴き、イタリア民謡「フニクリ・フニクラ」、葉加瀬太郎「情熱大陸」では手作り楽器で合奏を行い、客席総立ちの大盛況で終幕となった。

■最後に

裾野市おんかつを成功に導いた最大のキーポイントは、指定管理者ケイミックスと行政（市役所生涯学習課）の連携・協力体制だろう。事業制作・企画に秀でている指定管理者ケイミックスの土屋さんが公演制作を取りまとめ、市役所生涯学習課の八木さんがアウトリーチ先の学校との調整を行った。それ

ぞれが得意とする分野を担当し、分業できたことで、アウトリーチ先であっても、ホール公演の準備であっても、不足なくむしろその都度よりよいものにアレンジする余裕があった。担当者がひとりで抱え込み、走り回るのではなく、強力な協力者がいることが、長期的にみてもホールの事業制作には欠かせない。その点で、八木さんが市役所のみなさまを巻き込み、担当以外の方々にもアウトリーチとコンサートそれぞれに足を運んでもらい、事業の良さを理解してもらえたことが、今後の事業運営の大きな助けとなるだろう。

おんかつ初年度から、体験を含んだオリジナルな企画を成し遂げた土屋さん・八木さんに心からの拍手を送るとともに、来年度以降はどんな企画で裾野市を盛り上げてくれるのか大きく期待したい。

実施団体：浅井文化ホール（株式会社口ハス余呉）

実施時期：平成27年12月10日（木）～平成27年12月12日（土）

出演アーティスト：高見 信行(トランペット) 田村 真寛(サクソフォン) 城 綾乃(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：キラキラワークショップ

期 日：平成27年12月10日 10：45～11：30

会 場：七尾小学校 音楽室

参加者：4、5、6年生 36人

地域の子どもたちに生のクラシック音楽に触れてもらう機会をつくりたいと考え、今回のアウトリーチ先に小学校を選んだ。アーティストが部屋の外から剣の舞を吹きながら登場し、ワークショップがスタート。その後、それぞれの楽器のソロ演奏と楽器紹介が行われ、トリオで演奏をして終了。2人の演奏に引き込まれ、子どもたちには真剣な表情が見られた。

タイトル：キラキラワークショップ

期 日：平成27年12月10日 14：40～15：25

会 場：北郷里小学校 音楽室

参加者：6年生 48人

内容は全校共通。初めて見る楽器に興味深々。楽器の仕組みに興味を持ったようで、自分から質問したり、アーティストの問いかけにも積極的に答える児童が多かった。「この曲知ってるよ」など、子どもたちの嬉しそうな顔が見られた。

タイトル：キラキラワークショップ

期 日：平成27年12月11日 10：50～11：35

会 場：長浜南小学校 音楽室

参加者：5年生 62人

内容は全校共通。初めて見る楽器や奏法に興味津々。最後の質問コーナーでは、楽器についてのことや練習についてのことなどたくさん質問が上がった。授業終了後にアーティストは子どもたちと給食交流。ワークショップでは聞けなかった話や、サインを書いてもらったりとアーティストと身近に過ごすことのできたひと時だった。

タイトル：キラキラワークショップ

期 日：平成27年12月11日 14：35～15：20

会 場：虎姫小学校 音楽室

参加者：5、6年生 80人

内容は全校共通。最後のアウトリーチということで、ワークショップ内容もずいぶんレベルアップした。今までの学校より人数が多かったこともあり、歓声が上がったりと大盛り上がり。初めて見るトランペットの様々な種類のミュートに子どもたちは興味深々。「面白かった」「楽しかった」など嬉しい声をたくさん聴くことが出来た。



コンサート

タイトル：長浜管合戦「冬の煌煌コンサート」
期 日：平成27年12月12日（土） 14：00開演
会 場：浅井文化ホール 大ホール（定員：483人）
入場者数：207人

前半は、歴史ある長浜市にちなんで「合戦」をテーマに、トランペットとサックスの2つの楽器によるソロ演奏。それぞれの楽器の名曲をバトル風に順番に演奏。名曲合戦が繰り広げられた。後半では、和睦ということで、仲良くコラボ演奏。アウトリーチの成果か、子どもからお年寄りまで幅広い年代にお越しいただくことができた。



① 応募の動機・事業のねらい

当ホールは交通の便が悪いことや採算性の観点から様々なジャンルの音楽事業を開催することが難しかった。そのため、地域の方に生の音楽をホールで鑑賞する機会を少しでも多く提供したいと考えた。気軽にホールに足を運ぶためのきっかけづくりとして子どもたちにアウトリーを行い、クラシックをはじめ質の高い音楽を身近に触ることで創造力や豊かな感性を育み、音楽を愛する地域をつくっていきたいという思いから応募した。

② 企画のポイント

できるだけ多くの小学校でアクティビティを行うことで、地域の子どもたちに生の音楽を身近に体感してもらい、感性を刺激する。また、子どもたちと音楽・楽器との印象的な出会い・出来事として、将来にわたって音楽を愛し、ホールと親しい関係性を保てるような事業としたい。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

管楽器単体、また、クラシック音楽のコンサートにあまり馴染みない地域のため、どのようなコンサートにすれば集客につながるか考えるところが難しかった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コンサート内容をこの地域にちなんだテーマ性のあるものとし、“このまちらしさ”を取り入れたことで市民の興味を惹くことができた。また、チラシにテーマとなる素材を盛り込むことで市民の目につきやすく、たくさんの方に自然とチラシを手にとっていただくことができた。

⑤ 事業を実施しての成果

ホールに足を運んでいただくためにこちらから出向いてアウトリーチを行ったことが私たちホール職員にとって非常に貴重な経験となった。今回のアウトリーチ先は小学校でしたが、管楽器のコンサートということもあり中学校の吹奏楽部の生徒にとっても喜んでいただけた。どのアウトリーチの参加者も間近で生の音楽に触れることができたことに感動され、ぜひとも今後もこのような機会を作ってほしいとの声をいただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートの内容等、企画全般をコーディネーターやアシスタントに頼り切ってしまったところを反省したい。来年度は自分たちだけで進めていかないといけないため、次回に生かせるように今年度の事業をしっかりと振り返りたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

音楽にあまり馴染みがないため集客が難しいかと思っていたが、今回のコンサートのアンケートを見ると、実際は想像以上に市民が音楽に興味を持っているという事がわかり、今後はもっと様々なジャンルの音楽イベントを企画できるのではないかと考えた。魅力のあるイベントを企画することはもちろんであるが、長浜市にあった料金設定など、ホールに足を運んでいただきやすくするための工夫を考えていく必要がある。

滋賀県長浜市は、琵琶湖東側に位置する都市で人口は約12万人、豊かな水源と自然に恵まれ、石田三成出生の地のほか、姉川の合戦跡など戦国時代を駆け抜けた武将たちの足跡が残る歴史ある土地である。今回音活事業に取り組んだのはその長浜市でもほぼ中央に位置する長浜市浅井文化ホールで487席の座席をもつホールである。

浅井文化ホールでは、これまで音楽事業の展開が少なく、地域にクラシック音楽の土壌がないこと、アウトリーチなどの事業を実施していないことなどから、地域の文化環境を改善したいという気持ちから音活事業を実施した。

アクティビティは、地域の小学校4校で実施した。各小学校とも特色があり、山間にある七尾小学校では、先生からの「打ち解けるまでに時間がかかる」との話もあり、生徒たちは当初緊張した面持ちでスタート。だんだんと音楽に触れ笑顔もみられるように。終わりには楽しそうな笑顔で友達同士話す姿が印象的であった。その他の3校、北郷里小学校、虎姫小学校、長浜南小学校は比較的市街地にある小学校で、人数も多く活発な印象をうけた。それぞれの小学校生徒さんの様子を担当の先生方に伺ったのだが、各小学校とも控えめで進んで前に出る子はあまりいないとの話であったのだが、実際に伺うとどの学校も生徒達は自分たちの学校にアーティストがやってくるという特別な時間の中で、興味をもって楽しんでいた。質問コーナーを設けた小学校などは、アーティストになった理由やその考え方や感じ方に親近感を持ったり、共感したりと興味津々。まさにアーティストが近く見えるアクティビティならではの時間を過ごすことができた。

本公演は、地域の人達に喜んで貰おうとホール担当者の清水さんをはじめ、ホールスタッフの皆さんが、クラシック音楽を身近に感じてもらうため、様々なアイデアと意見を出しあった。長浜市の歴史、とくに戦国時代の合戦をテーマにコンサートをつくり、今回のアーティストであるサクスの田村氏とトランペットの高見さんが競演するという構成に。楽器解説などもあり、盛りだくさんのコンサートとなった。アンケート結果からも、「音楽から遠ざかっていたが、またやってみたくなった」「ホール活用による地域振興に協力したい」との意見や「小学校の音楽室で聴いた時もすごかったけど、文化ホールの方がすごかったです」という意見もあり、アーティストや公共ホールについて知ってもらうための第一歩として多くのお客様が満足できるコンサートとなった。

特に今回の長浜市の音活事業で感じたことは、施設の管理者と施設の設置者である行政とが連携して事業を実施していることである。今回の音活事業全般において長浜市の担当者の方がアクティビティ、本番コンサートに同行してくださった。これは、非常に重要なことで、それぞれの連携が公共施設の設置目的や、事業実施の目的が共有されることにつながり、共通認識のもとに事業展開できる。アクティビティやコンサートをすること自体が目的になってしまう場合があるが、アクティビティやコンサートを目的達成の「ツール」として進める。行政は管理者に、その市における文化芸術のビジョンを与える必要があり、管理者はそのことを念頭に置きながら実務に取り組むことが求められる。長浜市では、これらのことが実践されており、行政の担当者とホール管理者が非常に良い形で連携され、ともに熱い思いをもって事業に取り組んでいたのが印象的であった。今後も連携を維持し、音活事業を継続して実施するなど、文化施設や行政の熱い思いを地域の人たちに発信する地域のための文化施設を目指してほしい。

実施団体：(公財) 呉市文化振興財団

実施時期：平成27年10月7日(水)～平成27年10月9日(金)

出演アーティスト：金子 三勇士(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：金子三勇士ピアノ物語

期 日：平成27年10月7日(水) 10:45～11:30

会 場：呉市立警固屋小学校 音楽室

参加者：4年生 20人

演奏から入ることでインパクトを与えると同時に優しい語り口で親しみを持ってもらい、子どもたちの心をつかんだ。ピアノや楽器について紹介したあと英雄ポロネーズで、ピアノの下や鍵盤の近くなど好きな場所で音の違いや迫力、指使いなどを間近で体験。そうすることで、身近に本物の音楽に触れることがねらい。

また、音楽にはどんなジャンルがある？どんなときに音楽を聴く？と問いかけ、音楽の楽しみ方、聴き方は人それぞれで良いということ、音楽がどんな力を持っているのか気づかせる。

愛の夢では、愛って何だろう、夢って何だろうと音楽から受けるイメージを一人一人が想像する。こどもたちは、音楽の持つメッセージを受け取り、自分の体験や思い出などを重ね合わせることで、深く心に届く。

難しいと思っていたクラシック音楽が実は身近にあるということをつとむとジェリーに出てくるハンガリー狂詩曲で紹介。イメージをふくらませて聴くことの楽しさを伝えた。

●発言も多く、活発なクラス。いきなり何も言わずに演奏から入ることでインパクトを与えて、ソフトな語り口で出身地、家族やルーツの話を中心に自己紹介。丁寧に音楽の紹介をしながら、伝えたいメッセージを要所にちりばめ、子どもたちとやりとりをしながら、音楽の楽しみ方を上手に伝えていた。女子が多く私語も多めだったが、愛について、夢について考えているときなどは、イメージをふくらませながら静かに聴き入っていた。終わってからの感想を言う時には、愛の夢を聴いて、亡くなった家族を思い出したという子もおり、心が震える体験となったようだ。



タイトル：金子三勇士ピアノ物語

期 日：平成27年10月7日（水） 17：00～17：45

会 場：児童養護施設 仁風園 明るい丘ホール

参加者：未就学児童から高校生まで 53人

●基本的には小学校のアウトリーチと同じ流れで行ったが、いろいろな事情で施設に入所し、心を閉ざしがちな子どももおり、年齢差もあるという難しい環境でのアウトリーチであった。

施設の子ども達に向けて話す内容として、夢の話は子どもたちにどう受け取られていたか、考えさせられるところだった。

特別に構えることなく、好きな場所で聴いて良いとしたことは、良かったと思う。自分の居心地の良い場所を見つけていたようだった。

幅広い年齢層だったにもかかわらず、後半になるほど集中して聴けていたと思うので、音楽の持つ力、それを引き出し伝える演奏に惹きつけられていると感じた。



タイトル：金子三勇士ピアノ物語

期 日：平成27年10月8日（木） 10：35～11：20

会 場：呉市立宮原小学校 音楽室

参加者：5年生 24人

先生の提案により「曲を聴いて感じたことを言葉にし、色や形も加え詩にする」という活動を加えることになった。授業の中で、同じような活動を既に行っていたが、一度きりの生演奏で行うことが初めてで、不安もあったので、子どもたちの想像力を刺激するため、プログラムを一部変更。

英雄ポロネーズのあと、先生を紹介してくださいと子どもたちに投げかける。「先生は〇〇」という風に一人ずつ答える。その答えから先生のイメージにぴったりの曲を金子さんが選んで弾くという流れ。

音楽から先生のイメージを探すことで、音楽を一層楽しんで聴くことができた。新しい音楽の楽しみ方、聴き方を子どもたちが見つけているようだった。

子どもたちのイメージから先生の曲として弾いたのは「愛の夢」。弾き終わってその曲を選んだわけを話し、子どもたちに先生にふさわしいかどうか感想を聞いた。反応は様々で、とても興味深かった。

次の「ハンガリー狂詩曲」でどんな言葉がうかんでくるかやってみようと次の曲につなげ、演奏後次の授業で詩を作るところまで見届ける。子どもたちが集中して作業をする教室に金子さんが入っていき交流。



●金子さんは一度きりの生の音楽との出会いを「一期一会」という言葉にたとえ、子どもたちが身体全体で音楽を捉えられる準備を整えた。

金子さんの演奏が終わった後、誰もが余韻を残したまま静かに紙に向かい、教室に戻ったあと素晴らしい集中力で言葉をつなげて詩を創り、色と形を添えて完成。先生と子どもたちの「あ・うん」の呼吸で、スムーズに行うことが出来た。そしてコンサート会場での披露へつなげることができた。

タイトル：金子三勇士ピアノ物語

期 日：平成27年10月8日（木） 13：50～14：35

会 場：呉市立音戸小学校 音楽室

参加者：5年生 25人

●お行儀よく、発言も多く、落ち着いたクラス。素直にいろいろな疑問を投げかけ、集中して聞いていた。演奏後、控え室に戻った金子さんに聞こえるようにと子どもたちからの合唱「プレゼント」のサプライズなおくりものがあった。前もって何の話もなかったので驚いたが、音楽の先生と担任の先生との連携が取れておらず、共有出来ていない部分があったと感じた。



コンサート

タイトル：金子三勇士ピアノ・リサイタル ～リストをめぐる音楽の旅～

期 日：平成27年10月9日（金） 18：3開演

会 場：呉市文化ホール（定員：1,070人）

入場者数：574人

入場料金：一般2,500円、高校生以下無料

広 報：ホームページ、文化ホール情報誌、友の会（会員1,000）への案内

朝日新聞購読世帯への新聞折込、市政だより、自治会への折込等

斡旋販売：地元ピアノ教室、地元企業など

●平成24年にトリプルピアノで一度ご出演いただいたことがあり、リサイタルを望む声がとても多かった。そのお客様に加え、ピアノ教室の生徒さん、アウトリーチ先の先生や子どもたちがたくさん来てくれていた。子どもたちが多かった割には、ざわつくこともなく金子さんの素晴らしい演奏に加え、流暢で、とても温かいトークに魅了されていた。

曲間での曲目解説、作曲家のエピソードなどのトークがクラシックに馴染みのない方にもわかりやすく、アンケートでも大変好評だった。終演後はサイン会を開催し、長蛇の列となった。

●アウトリーチとのつながり

- ・小学校へのアウトリーチの様子を写真で紹介
- ・宮原小学校の詩を全員分カラーコピーして紹介
- ・コンサートの中でアウトリーチのことをトークで紹介し、宮原小での詩の中から3人の作品を紹介



① 応募の動機・事業のねらい

おんかつ応募の一番の動機は、公民館への出前コンサートや昨年度からスタートしたアーティスト派遣事業のアーティストに何らかの刺激となり、地元アーティストを元気にしたいという願いからであった。

以前から地元の育成団体の所属アーティストを小学校に派遣しているが、アウトリーチで何を伝えるか、という一番大事なことが薄まってきているのではないかと感じていた。

おんかつアーティストとの出会いによって、音楽を伝えるという演奏家としての「原点」を思い出せるような、おんかつアーティストと地元アーティストとの交流会などを実施し、もう一度新たな気持ちでアウトリーチに取り組んでいこうというきっかけにしたかった。

アウトリーチを続けていくためには、地元で活躍するアーティストのスキルアップは欠かせない。そのため、スタンダードとなるようなアウトリーチを実際に体験し、目指していくものを地元のアーティストと一緒に考えたいというねらいもあった。

また、アウトリーチで、何よりもプロのアーティストの本気の音、楽器独特の音色や迫力、音楽が持つ心を揺さぶるような感動体験を子どもたちに届けたいと思い、演奏で子どもたちの心を捉えることが出来るアーティストを希望した。音楽を聴くことで、子どもたちの感性を刺激し、新しい興味につながり、音楽を聴く楽しみを見つけるきっかけになってほしいと思った。

② 企画のポイント

① 地元アーティストへの働きかけ

このおんかつ事業が地元アーティストにとって、刺激となり、ステップアップしたいという意欲につながるには、どういう仕掛けをするかということが大きなポイントだった。今後も計画的にてこ入れする必要があるので、こちらの思いや意図を地元アーティストに理解してもらえるかが鍵だった。

② 職員のスキルアップと受け入れ側との協力体制づくり

アーティストが伝えたいものやそのための準備、サポート、アイデアなどを担当者が考え、共有していくことの大切さを学ぶための事業でもあるので、受け入れ先側の学校、担任の先生との調整、情報の交換、事業のねらいについての理解など、よりよい形で子どもたちに届けるための工夫、話し合いが重要である。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

企画のポイント①について

交流会を開催するにあたり、アーティスト間の温度差が見られた。どこまで広げて広報するかということも、はっきりしておらず、中途半端な呼びかけとなり、何のための交流会か、真意を伝えきれていなかった。

企画のポイント②について

アーティストのやりたいこと、伝えたいことがはっきりしており、かなりかちつとしたプログラムが準備されていたため、それにこちらの意向を加えるためにはボワツとした内容ではなく、全体を作り込んだ仕掛け作りが必要となった。しかし具体的には子どもたちの想像力を邪魔したり、限定的になった

りする方法に陥ったり、必然性に欠けたり、取って付けたようなものになるということで、一時は難しいと思えた。先生との連絡も時間的制約があり、なかなか形具体的にならなかった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

①について

集まってみると、育成団体の他にもアウトリーチに興味を持ったアーティストや、これから音大を目指す高校生も参加してくれており、前日まで行った声かけが実を結んだ。そこで、実際のアウトリーチのDVDを見たりしながら意見交換を行う中で、アーティストの中に実際のアウトリーチを見たいという方も出てきて、その内容を他のアーティストとも共有したいとの申し出があり、座談会効果は非常に高かったと思う。

②について

1校の担任の先生と電話で何度か話し合いをし、新しい提案をいただいた。何とかその提案をプログラムの中に入れることになっていたが、前日の夜まではっきりとした形にはなっていなかった。前日の夜初めてテーブルの上に上げて検討が始まったときはどうなることかと思っただけ、その日基本形のアウトリーチを見ていたため、そのアウトリーチの内容にどう組み入れていくかを具体的に考えることができた。

ねらい、意図するもの、何を使って、どうしゃべって、どうつなげて、何を作るか…。すべてが整ってはじめてうまくいくと感じた。何度も流れを確認し、行きつ戻りつする中でできあがったプログラムは、とても前日まで決まっていなかったとは思えないぐらい自然で、オリジナルなものとなった。

⑤ 事業を実施しての成果

これまでの距離のある地元アーティストとの関係性を変え、積極的にアウトリーチについて意見交換したいと思っていたが、こちら側が一方的に押しつけても、何かきっかけがなければ難しいと思っていた。

そこで、おんかつアーティストの力を借りて外側からのアクションを起こしたけれど、果たしてねらいとしていたカンフル剤的刺激となったかどうか、不安は残る。ただ、その中で何人かがアウトリーチを見学し、その内容を他のアーティストとも共有する場を設けたいとの申し出があったことで、その次につながるような動きをしてくれたことは、とても良かったと思う。

そして、交流会の中で今後のアーティスト派遣について、今後一緒にアウトリーチについて考えていこうというメッセージを伝えることが出来たとも思う。

アーティストとの距離が近い事業だからこそ、得られる感覚がたくさんあった。アーティストの視点を学ぶ良い機会になったし、準備の段階で出来ることがたくさんある。たとえば受け入れ先との調整は何よりも大事だし、そこにどれだけ時間をかけられるかによって、集客にも少なからず影響があると思う。

どうやってアウトリーチ先の学校、家庭を巻き込むかが課題だと思っていたので、全校児童に「すごいアーティストが来る」という内容のチラシを配ってもらった。子どもからのアナウンスがどれだけ保護者に伝わるか、そのあたりの話をじっくり先生としておくことは大事だと感じた。

今回、1校はアウトリーチとコンサートをうまくつなげることが出来た。その効果はコンサートにその学校の先生や子どもたち、保護者の方々の来場が多かったことということにはっきりと現れていた。

他の受け入れ先とも何か出来たのではないかという反省もあるが、こちら側の意識・やる気次第でアウトリーチ、コンサートにいくらかでも厚みをもたせることが出来るということを実感した。

児童養護施設でのアウトリーチは新しいチャレンジだったが、ホールに来ることが難しい子どもたちへ届けるという目的がはっきりしており、音楽を聴く時間をみんなで共有することが出来て良かったと思う。また、これをきっかけにして、財団主催コンサート招待などの交流につなげることができた。

地元のピアノ教室に働きかけ、先生が生徒を連れてたくさん来てくれていた。早い内から広報したので協力も得られ、今後にも繋がる良い関係を作ることが出来た。

⑥ 事業を実施しての反省点

事業自体の性質からスタッフ間の共有の部分で足りないところがあったように思う。コーディネーターの方々と連携やアーティストとの関係性など、時間をかけて作っていくため、どうしても個人的な動きとなりやすい。スタッフ間で全体の流れを把握し、イメージを共有できているかが大事だと思うので、限られた時間の中でそういった機会を作る努力をしていく必要があると思った。

また、地元アーティストの方々に、もっと突っ込んで話をしておく必要があった。もともと距離があったとはいえ、話し合う場を作ってこなかったことは問題であり、こちらの意向や思いは充分伝わってなかったと思う。その機会をまず設定するべきであったと反省している。また、コンサートとのつながりも薄かった。

教育委員会へは事前に働きかけ、当日も学校教育課の方々が見学に来てくれていたが、事業について情報を提供する時期が遅かった。もっと早くから期待感を持たせる働きかけを行うべきだった。また小学校や施設のある地域の協力者の情報をキャッチしておらず、PTAをはじめ議員など今後の事業に対しての理解を得られるチャンスを生かすことが出来なかったことも反省点の一つである。

アウトリーチ先の先生とのコミュニケーションの取り方が難しかった。時間的制約もあるが、事前の打ち合わせだけでは十分に意図が伝わりにくく、こちら側がある程度の投げかけをしないと、反応がない場合がほとんどである。今までは先生に無理をさせまいと何も求めてはいけなかったと思っていたが、今回の先生からの提案を受けて新しいプログラムを作っていく活動から、子どもたちの心を深く揺さぶるための仕掛けについては、先生とじっくり話し合っていく必要性を感じた。積極的に先生に関わってもらえるような提案の仕方を考えていくことが大切だと思った。

アウトリーチ先を決めるときに、もっと明確に誰に何を何のために届けるか、整理しておくことが必要だと感じた。新しい環境へのチャレンジはもっとリサーチをしっかりとしておくべきだったと思う。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アウトリーチとは実験のようなものだった。音楽をとおしてどういう結果がでるか、そのやり方で良いのか、やってみないとわからない。子どもたち、先生、アーティスト、場所、学年などいろいろな要素が組み合わさってできる化学反応のようなものだから、良いとも悪いとも結論はすぐに出ないし、

二度と同じ反応はない。とても面白い反面それは無責任にもなりがちである。

子どもたちは見たことがないもの、聴いたことのないもの、初めて出会うものをワクワクして待っている。その実験を仲間や先生と共有する。その一期一会のワクワク時間は貴重な時間だ。だからこそ、自信を持って「これだ！」というものを届ける責任があり、深く心に届くような演出するのが私たちの仕事かなと思った。

この事業をとおしてアーティストの伝えたいこと、生き様を深く知り、心を震わす体験を実際に目することができた。この感動体験を多くの子どもたちに届けたいと思う。そしてアウトリーチを積み重ねていくことによって、呉の子どもたちに少しでも元気になる、音楽や芸術が心を豊かにするということを伝えて行けたらと思う。そして、この事業に地元のアーティストが積極的に参加できるようになり、継続的に行えるような体制作りが出来て初めて形となるのではないだろうか。そのために、私自身もアンテナを高く張って、いろいろな可能性をつなげていけるよう、柔軟な心構えていたいと思う。

今回の事業で私が事業をするときに大事にしたいと思ったこと

- ①ひとつひとつの事業の目的とターゲットをはっきりさせる
- ②アーティストを知る
- ③自信をもって広報する
- ④縦横関係プレイ
- ⑤失敗を恐れず攻める
- ⑥楽しんで取り組む

<概要>

呉市は広島県南西部に位置し、明治時代以降海軍および海上自衛隊の拠点としてよく知られた街である。今回のおんかつの会場となった呉市文化ホールは平成元年にオープン、1,600席の豊かな音響を誇るホールを活用して、自主制作公演を含む舞台芸術公演事業を活発に行っている。また、地域のアーティストを活用してのアウトリーチ事業にも積極的に取り組んでおり、その活動を発展させる意図も込め、ピアニストの金子三勇士さんを迎えて実施された。

<アクティビティ>

今回は市内3小学校（4年生1校、5年生2校）と、児童養護施設でアクティビティを行った。うち宮原小学校では、担任の先生の希望で金子さんの演奏から児童たちが感じたものを言葉でアウトプットするワークショップを取り入れたため特記しておきたい。

金子さんは、かねてより児童たちの想像力を狭めることを大変危惧されていたため、その方法についてはホールの担当者小笠原さん、金子さん、コーディネーターで十分に議論を重ねた。結果、金子さんのピアノ演奏を聴いて児童たちがイメージを言葉で紙に書き留め、続く時間に色を塗ったり好きな形に切ったりし、言葉を詩としてまとめるという方法へとたどりついた。金子さんがハンガリー狂詩曲を弾き終えるやいなや音楽室は静寂に包まれ、児童たちが紙に向かいながら金子さんの奏でた音楽の世界にぐっと入り込んでいる感じが感じられた。色を塗ったり切ったりという仕上げの作業は児童たちの教室で行われ、金子さんと一同が後から覗きに行く形にしたが、我々の想像をはるかに超える素敵な作品が完成していった。どのようにワークショップへ移るかの導入部をよく練ったこともあるが、金子さんの巧みな進行と、何より日頃から児童たちの発想を妨げることなくうまく伸ばしてあげる先生の指導方法が鍵であるように感じられた。「アーティストが授業に来て楽しかった」というだけでなく、日頃の指導と特別な機会の相乗効果が生まれる、意義のあるアクティビティであったように思う。

<コンサート>

ホールでのコンサートは、金子さんらしい正統派の曲が並びつつもトークを1曲毎に入れて初心者にも気軽に楽しめる構成で、今回訪れたアクティビティ先の紹介や、宮原小学校の児童たちの作品も、金子さんの朗読によって一部紹介された。ここでも金子さんの巧みな進行により、会場は終始あたたかい雰囲気になっていった。

終演後の観客の様子やアンケートからも、アクティビティで訪れた先の関係者をはじめ、新たな観客層をホールへ呼び込むことができたこと、また楽しんでいただけたことが伺えた。

<総括>

今回のおんかつは、日頃から公演活動もアウトリーチ活動も積極的に行っているホールであったため、担当者の中で今抱えている課題と目的が明確であった。そこにコーディネーターと金子さんが入って議論を行うことで、課題解決に向けた建設的な取り組みを行うことができたように感じる。また、今回は日頃市内でアウトリーチ活動を担っている地元のアーティストの方々にもアクティビティを見学していただいたり、金子さんとの意見交換の場を設けるなどの取り組みも行った。それらが今後の呉市のアウトリーチ活動のさらなる発展へとつながることを期待したい。

実施団体：NPO 法人こどもステーション山口

実施時期：平成28年1月14日（木）～平成28年1月16日（土）

出演アーティスト：田村 真寛（サクソフォン） 大野 真由子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：本と音の素敵なハーモニー！

期 日：平成28年1月14日（木） 10：00～11：00

会 場：山口市小郡地域交流センター 講堂

参加者：大人 15人

市民ボランティア団体である、市立図書館友の会「鉢の子」。この団体は、住民が図書館に足を運ぶきっかけをつくろうと、毎月歴史や科学などの講座を開催している。今回の活動を通して他団体や職員とのつながりをつくり、図書館での活動の広がりの可能性を求めていた。今回の事業に向けて「音に関する本」の選書をして展示を行った。アクティビティでは、山口市出身の詩人・中原中也の「サーカス」のイメージから選曲した演奏やミニコンサート、田村氏の本との関わりのお話などがありました。



タイトル：これからの私達とサクスの新しい出会い！

期 日：平成28年1月14日（木） 14：35～15：25

会 場：山口市立二島中学校 音楽室

参加者：1年生 16人 2年生 15人 合計 21人

アクティビティに向けて、生徒には冬休み中の宿題「音が出る物の制作」があり、それらを持ち寄っての合奏やミニ演奏を行った。オリジナルな楽器は本物に負けないくらいよく作ってあるものもあり、今回だけの使用では勿体ないくらいだと大人から感想が出た。田村氏と大野氏からは「音」「曲」に関連しての興味深いお話や、循環呼吸の実体験をするなど、サクスという楽器を通して、広く知識を得たり体験ができ、サクスという楽器にとっても興味を持ったようだ。最後に、演奏方法や難しい曲は？など質問がありました。



タイトル：サクスで素敵な大人との出会い！

期 日：平成28年1月15日（金） 10：35～11：20

会 場：山口市立大海小学校 音楽室

参加者：5年生 24人 6年生 21人 合計 45人

楽器の説明や中原中也の詩をイメージしてのミニ演奏を行い、児童が各自持ち寄った楽器での合奏を行った。子どもたちは、最初少し緊張気味だったが、田村氏の親しみのある穏やかな語り口や素敵な音色に、次第に笑顔がみられるようになった。6年生にとっては、進学した先の中学校に吹奏楽部があることを見据えてか、「どうやって音が出るの？」「一つの楽器を楽しく演奏する秘訣は？」「サクスと一緒にどうしてピアノも弾くの？」など素朴な疑問や質問がたくさん出ました。



タイトル：サクソとの素敵な出会い！

期 日：平成28年1月15日（金） 14：00～15：30

会 場：アカペラホール

参加者：大人 15人

市立図書館で目の不自由な方へ本を読む活動をしている対面読書「愛メイト」の団体。目の不自由な方2人の参加もあり、いつもは対面で読み聞かせをしているが、今回は同じ方向を向いての活動となった。会場は個人で所有している小さいホールで、田村氏のミニコンサートと様々な楽器との合奏を行った。終了後は茶話会を行い、身近に聴くサクソの魅力について感想を述べ合い、共感する時間を持てた。

コンサート

タイトル：WONDER！TENDER！SAXOPHONE！～田村真寛 魅惑のクラシック～

期 日：平成27年1月16日（土） 14：00開演

会 場：クリエイティブ・スペース赤れんが ホールII（定員：100人）

入場者数：96人

クラシックや日本民謡をアレンジした曲、映画音楽などバラエティに富んだプログラムでした。田村氏の素敵な音色は勿論のこと、その演奏テクニックやピアニストとの息の合った共演も相まって、観客の皆さんは大満足であった。「魂に触れたようで感動した」「プレイヤーの息吹、表情、熱、といったものがダイレクトに感じられる空間だった」など絶賛であった。



① 応募の動機・事業のねらい

赤れんがのホールは平土間で、イスを並べてキャパが100席と、とても狭くて小さいホールである。チケット収入のみで、プロの演奏家を招へいすることは容易ではない。しかし、プロの奏者によるクラシックコンサートを開催し、心豊かな時間を市民の皆さんと共有したいと考えた。また、小さいホールだからこそ、観客が生演奏を身近に感じる事が出来るメリットもあると考えた。一番の魅力だったのはサクソという楽器である。山口市内や赤れんがで、ソロのサクソ演奏を聴く機会がないので、ぜひ実現したいと企画した。また、館を飛び出してのアクティビティで、新たなつながり(施設利用者)をつくりたいと考えた。

② 企画のポイント

子どもと大人、両方に届けたいと思った。アクティビティ先の学校へは、卒業を控えた小学校高学年と、中学校では時季的に受験に差支えない学年にした。市民ボランティア団体へは、「図書館」「本」＝「静か」というイメージを払しょくし、新たな活動のきっかけと活動の活力になればと思った。

③ 企画実現にあたり苦労(問題となった)した点

- (1) 時季的に高校受験があり、アクティビティ先として打診するも、受け入れが困難な学校がいくつかあった。
- (2) アクティビティ先へ、その意義や目的などを分かりやすく伝えるのが難しかった。
- (3) コンサートについては、どのようなコンサートにするのかも含め、内容を決めかねることが多々あった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- (1) 粘り強く何校か打診して、受け入れ先を見つけた。結果、受け入れてくれた学校はかなり好意的であった。
- (2) 下見の時の打合せで受けたコーディネーターからのアドバイスをもとに、それぞれの市民ボランティア団体に対する意義などをしっかり考えて、伝えるようにした。
- (3) こちらから提案しながら少しずつ進めていった。

⑤ 事業を実施しての成果

今回実施したことで、学校や団体と新たなつながりが出来た。職員にとっても「おんかつ」を活用して館から飛び出して文化芸術の素晴らしさを伝える機会となり、困難なこともあったが、地域と地域、人と人をつなげるコーディネーター役を少し果たせたと思う。アクティビティ先では、間近で音楽や楽器、奏者とふれあうことができたことにより、児童生徒にとっては、これからの目標を決める良い機会となり、市民ボランティア団体にとっては、人と人とのつながりが出来、活動のヒントを得たり、元気をもらったようだ。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アクティビティ先への説明、特に市民ボランティア団体への説明が難しかった。単なる出張コンサートではなく、地域づくり人づくりへとつなげていき、元気に地域で活動して欲しいとの意図を分かり易く伝えられるようにしたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

山口市は、県庁所在地でありながら人口は19万人と少なく、自然豊かで落ち着いた街だが、身近に文化芸術に触れる機会は少ない。ましてやクラシック音楽の公演はあまりないように思える。しかし、今回アクティビティなどで子どもから大人までがクラシックをアレンジしたサクソ演奏を聴いたことにより、クラシックに対してハードルが下がり、身近なものとして感じてもらえたようだ。アクティビティもコンサートも皆さん大満足で、企画は大成功だった。「音楽」は生きる力や希望を人にもたらすことがよくわかった。これからも丁寧で思いのかよった企画をして市民に届けたい。

今回の山口市クリエイティブスペース赤レンガでのおんかつ。アクティビティでは学校が小学校、中学校のそれぞれ1校。残りの2回は音楽以外の活動をする大人向けのもので、この組み合わせがよかった。「多感な時期の子供たちに音楽を」と学校でのアクティビティを実施することが多く、実際私が立ち会うのも学校が多いけれど、大人向けのアクティビティも良いものだと改めて思う。こんなエピソードがあった。アーティスト田村真寛さんがサクソフォーンの名曲中の名曲P.モーリスの「プロヴァンスの風景」～カブリダンを演奏する前に、この曲がある生き物を表していることを伝える。細かい音符が3分強駆け巡る演奏の後にどんな生き物を表しているか聞くと学校では「鳥」「蜂」「犬」のように単語で答えが返ってくる。確かに音楽から連想される生き物たちの名前だ。同じことを小郡図書館のボランティアサークル「鉢の子」と目の不自由な方への本を読むボランティア「愛メイト」とのアクティビティでもそれぞれ聞いた。「仔馬が楽しそうに野原で遊んでいるところ」「喋が花から花へ飛び回っている様子」など具体的に生き物とその情景を答えてくれた。特にこちらが強く促す訳でもなく、ずっとこの返事が出てきたので本当に、演奏や作品からそう感じとってもらえたのだろう。大人だって多感なのだ、更に言うとも音楽が大人を子供の心にしたんだ。と思った。僕らは事業を企画するときに思い込みをする。例えば「子供は多感。大人はなかなか反応してくれない」のように。そういった思い込みをせずに、特にアクティビティでは丁寧に対象者と向き合い情報を共有することが大切だと感じた。

学校でのアクティビティでは吉松隆のファジーバード・ソナタを使っての即興演奏での共演が印象的だった。細かいルールや音符があるのでなく田村さんの簡単な使用する音の指示の後に、直ぐに即興演奏に入る。小学校では学校の楽器、中学校では冬休みの宿題として各自が作ってきた創作楽器やフルートを習っている生徒は自分のフルートを持ってきて共演した。演奏を進めていくうちに戸惑いが楽しさに変わっていくのが分かった。出てくる音楽もエネルギーのあるいい音。即興での演奏を選択した田村さんのアイデアと勇気に拍手を贈りたい。楽譜の無い世界に飛び込むと戸惑うかもしれないが、楽譜が無くなることで演奏者と聴き手の障害も無くなって、子供との距離や立ち位置が近くなる機会になるし、その経験が演奏にも反映されていくだろう。こちらの即興演奏も「愛メイト」と一緒に行ったが、皆さん更に子供の心になって楽しんでいた。

今回のおんかつはアーティストとホールスタッフが協力して対象者の「いい音楽を聞く」という期待以上の何か特別なものを常に提供し、それがきっかけとなってアーティストと対象者とホールの交流が深まることになった。今後のクリエイティブスペース赤レンガの発展につながるものと思っている。

実施団体：川棚温泉まちづくり株式会社

実施時期：平成27年11月5日（木）～平成27年11月8日（日）

出演アーティスト：高見 信行（トランペット） 中井 亮一（テノール） 新居 由佳梨（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：Power to the People! 心に届け、音楽の力♪

期 日：平成27年11月5日（木） 13：45～14：35

会 場：山口県立豊浦総合支援学校 音楽室

参加者：小1～高1（小学生8人 中学生17人 高校1年生6人） 教職員15人：合計46人

小1～高1の多様な子ども（と付添う先生方）を対象に音楽室で椅子に着席で実施。序盤で全員で自分の「声帯」に触れ震えを体感し緊張がほぐれ、続くトランペットの演奏体験、テノールと一緒に歌う「ビリーブ」（昨年文化祭の全員合唱曲）等では生き生きと積極的に参加し、一方で前奏の始まった瞬間に聴くモードに切り替わる集中力を見せる子どもの姿に「奇跡です」と言った担当教諭の涙まじりの笑顔が今回の充実を物語っていた。



タイトル：いつも素敵な貴女へ、音楽の花束を！

期 日：平成27年11月5日（木） 19：40～20：30

会 場：下関市川棚公民館 講堂

参加者：女声合唱団“こうる・しおさい” 31人

元々期待度が高い対象者の心を1曲目からわしづかみにし、次曲紹介の度に客席から感嘆詞が洩れる選曲で進む。歌詞の「発音」ワークショップに続いての「落葉松」と「瀬戸の花嫁」では、流行歌が力強く奥深い音楽としてそれぞれの心に届き涙する女性達。トランペット奏者のオブリガートと指揮で合唱団のレパートリーと一緒に歌うというサプライズは、二度と得難い体験として歓喜に沸いた。団内で19枚の本公演券売。



タイトル：～杜から森へ～大樹への感謝をささげるコンサート

期 日：平成27年11月6日（金） 13：00～13：50

会 場：国定天然記念物 川棚クスの森

参加者：クスの森を守る会、小野地区住民 60人

クラシックの生演奏になじみない層に対して、故郷と自然をテーマに選曲した鑑賞型。神々しい大クスを背後にした奏者の正装姿が目にも美しく、舞台上には落ち葉、客席では蝶が舞い、鳥が囀る中での演奏は、奏者と聴者の両方にとって稀有な体験となった。終曲は「ふるさと」を一同で。アンコールの拍手で雲間から陽光が3人を照らす場面も。固い表情が徐々に柔らかくなり最後は参加者皆が笑顔に。本公演来場者も数名あり。



タイトル：スター・トランペッターとテノール王子が夢中にやってくる！

期 日：平成27年11月6日（金） 17：00～17：50

会 場：下関市立夢が丘中学校 多目的スペース

参加者：夢が丘中学校吹奏楽部19人、その他の参加希望生徒9人、教職員10人：合計38人

全校生に希望を募り集まった生徒と希望教諭を対象に放課後実施。高見信行による「呼吸」ワークショップと技術的な奏法説明の後に披露した骨太な曲、また中高生の時はトランペット奏者を目指した中井亮一による「夢トーク」等、「ならでは」の内容に、見学した弊社経営陣も「鳥肌がたち痺れた」。感極まって泣きながら感想を述べた代表生徒の挨拶では、凄まじい緊張感と集中力で聴いていた生徒達全員の感動が一気に溢れ出た。



コンサート

タイトル：Classic Salon in Cortoto Hall vol2. 高見信行 x 中井亮一 ソロ&デュオコンサート 饗宴

期 日：平成27年11月8日（日） 13：30開演

会 場：下関市川棚温泉交流センター 大交流室(定員:200人)

入場者数：118人

全アクティビティ終了後にプログラムを確定し、音楽・構成（演出）両面での集大成となった。前半は本格的な選曲のため音響優先でカーテンを開け、窓外の景色が見える中で実施。保守点検用の螺旋階段を演出に使うなど設備の不十分を逆手にとる閃きにも客席は沸いた。後半は娯楽性の高い選曲で、カーテンを閉めて照明の色を効果的に用いた。事業紹介を狙った交流プログラムの写真放映（開場・休憩中）が、本公演に来場したアクティビティ対象者が感動を追想する効果もあった。



① 応募の動機・事業のねらい

『おんかつ』は、「まちかどに音楽を」をモットーに事業展開している当館にとって、そもそも最適な事業であり、これを多角的に利用すべく応募した。すなわち、「音楽で地域を元気にする」という大きな目的達成のために、対住民・対社内（経営陣・他事業スタッフ）・対株主・対行政・対教育者へ、当ホールがそして音楽事業担当者である私が目指すことの本質を伝え、理解と共感を獲得するねらいを達成するための一連のプレゼンテーションとして本事業を位置づけ、実施した。

② 企画のポイント

「音楽でみんなを幸せにする」という単純明快なコンセプトの元、「多角的」にひとを巻き込み伝える為に、可能な限り企画を複雑にしようとした。つまり、一見ちぐはくに思われる二つの楽器と相反する個性をもつアーティストに共演を依頼し、属性の全く異なるアクティビティ対象者と、あえて行政との折衝を要する会場の選択、オフ日の観光企画、宿泊場所の選択など、より多くの人の協力を仰ぎ、より多くの人にその恩恵を享受してもらえるように働きかけた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

今回接触した全ての組織や個人にそれぞれのルールや立場があり、それにそのまま従うと実現不可能に見える局面がいくつかあった。例えば、中学校の総下校時刻を超過してのアクティビティの実施、国定天然記念物保護区域内でのステージ設置許可の取得、現地入りするまで顔合わせをすることが出来ない3人の出演者間のコミュニケーション不足、音楽専用ホールでない当館の設備上の問題等。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

当社の組織および私個人としてこれまでに構築してきた人脈をフルに生かし、それぞれのエキスパートを頼り相談してみんなで解決策を探した。最初は他人事な相手に対しては、②で述べた単純明快なコンセプトを相手の立場に沿う切り口で丁寧に説明し、少しでも当事者感覚をもって『おんかつ』を捉え参加していただけるように努力した。

⑤ 事業を実施しての成果

大小様々な困難をクリアし、4回の交流プログラムとホールコンサートを無事に終えられたということ自体が、今までの当館の音楽事業では関わりを持てなかった多くの人を巻き込めたということの証明である。更に音楽的内容の質が非常に高かった事から、音楽の直接の享受者のみならず、その家族や知人への口コミで音楽が与えた感動の波及効果があった。「音楽でみんなを幸せにする」というコンセプトは達成されたと思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

11月という最もよい季節を選んだ為、近隣での催し物の競合が非常に多く、広報活動及び集客に苦戦し、収支目標を達成できなかったことが一番の反省である。以後は、実施時期を再検討したい。また今回は①②で述べた通り「多角的」というねらいの元、多少の無理を承知であえて企画したものの、綱渡りな部分が多かった。次回以降は今回得られた理解をベースにターゲットを絞り、より深い音楽的内容による交流を追求したい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

この町の「気にはなるが当事者にはなりたくない」様子見層の背中を押すことができれば彼らも動き、「本物」に対する実直な感受性を備えていると分かった。音楽ホールでない当館の弱みを逆手に取り他館では不可能な隙間的企画を展開していく覚悟でこれまでもやってきたが、それを楽しみながら一緒に作り上げてくれるアーティストとの協働制作によって、設備の不利を超越した舞台芸術を観客に届けられる確信を得た。と同時に、ホール設備を改善する努力を常に怠ってはいけないと肝に銘じた。

山口県下関市川棚温泉交流センター・川棚の杜は、響灘を望む豊浦地区にあり、海、山、温泉と豊かな自然と歴史のある温泉街に立地する。世界的音楽家アルフレット・コルトーもこの地に魅了され、この素晴らしい自然を「こんなに美しい夢のような風景は見たことがない」と言い残したという。そんな数々の歴史を残す川棚の温泉地にできた文化施設が川棚の杜だ。外観はまるでコンクリートで出来たテントのような出で立ちであるが、その先進的な外観は古き良き温泉街と一体となっている。

今回の音活事業に取り組むきっかけとなったのは、川棚温泉交流センターが「まちの拠点」としてホールと地域の人々をつなぎたいとの担当者の強い思いがある。担当者の増田さんは地域の人々が誇りに思えるホールを目指し音活事業に取り組んだ。

アクティビティ先として選択したのは、「未来を担う子供たち」として県立豊浦総合支援学校、市立夢が丘中学校の生徒。また、地元キーパーソンとして地域のコーラスグループこうる・しおさい、そして川棚クスの森として樹齢1000年以上のクスの樹を管理する、クスの森を守る会である。

豊浦総合支援学校では、小・中学部25名が引率の先生方と一緒に音楽にふれる機会となり、どの生徒も先生が驚くほどの集中力で見入っていた。普段なかなか集中できない子供とのことだが、曲が始まると集中して聞いていた。同じ世代でも音楽経験のある夢が丘中学校では生徒たちの演奏者に対するまなざしは演奏を楽しむとことと同時に、そのプロのテクニックに魅了され、間近でその演奏に食い入るように見入る姿がみられ、学生たちにとってもより有意義な時間だったのではないだろうか。また、地域のキーパーソンにターゲットを見据え実施したコーラスグループ、こうる・しおさいでは、一曲一曲に熱烈な拍手をもらい、中には涙ぐむ方もいらした。地域の音楽を楽しむ方々に交流センターの実施している音楽事業を体験してもらえたことは大変意義深く、この方々は今後ホール運営に理解を示す中核になる方々になると予感されるアクティビティであった。そして、クスの森を守る会でのアクティビティは、屋外ということもあり、地域の方々の力を借り、舞台・機材設営などを行い、まさに地域の方々とつくるコンサートとなった。樹齢1000年のクスの樹をバックに聞く音楽は非常に神秘的で、聞いているクスの森の方々や地域の方々とも、地元ホールが行うイベントへの協力を通じて一体感が生まれた。

そんなアクティビティを経て実施した、ホール公演では予想を超える多くのお客様にご来場いただき、地域でのアクティビティ実施の意義を改めて感じることとなった。会場内は熱気に包まれ、公演終了後にホールを出て行かれる方々の笑顔がそれを物語っていた。

公共ホールは、その使命から地域の人々と協働することで、その価値を高めていけるものだと考えられる。地域の人々の協力とホール関係者など様々な関わりの中での努力があり、ホールが活かされ、活用されていく。地域の方々の協力なしでは成り立たない。その地域の人々の協力を得るためには、ホールがその地域の公共施設としてのビジョンを持ち、ホールスタッフが様々な関係者とミッションを共有し、その目的達成にむけ運営を進めていくことが必要になる。今後、川棚温泉交流センターが地域を巻き込んだイベントを継続して実施していくことになると、より一層の目的共有と情報共有が必要になるであろう。

今回の成功のポイントは、担当者だけでなく、多くの関係者の方々、地域の方々の協力があり成り立っているということだ。今後、その事を意識しながら、その関係をより密にして事業を進めることで、交流センターは地域の方々と共に歩む、地域の人々が誇りに思う「杜」になるのではないだろうか。

実施団体：公益財団法人 白石町文化振興財団

実施時期：平成28年1月28日（木）～平成28年1月30日（土）

出演アーティスト：金子 三勇士（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：音の探検！おとどけクラシック

期 日：平成28年1月28日（木） 10：30～11：20

会 場：有明東小学校 音楽室

参加者：4、5年生 43人

オープニング曲目「オスティナート／バルトーク」の迫力ある演奏に子供たちの表情が一変し、その指使いの速さとダイナミックでキラのある一つ一つの音に驚いた様子で、微動だにせずに聴き入っていたのが印象的であった。その後は、金子さんの自己紹介や音楽のジャンル、楽器の種類等音楽の歴史を紐解くためのクイズ形式によるトークを交えることわずか開始10分で子供たちと先生方も完全に金子さんに魅了され、自然と笑みがこぼれていた。

タイトル：音の探検！おとどけクラシック

期 日：平成28年1月28日（木） 14：05～14：55

会 場：白石小学校 音楽室

参加者：4、5年生 44人

2曲目では「英雄ポロネーズ／ショパン」の演奏を自分の好きな場所で鑑賞してもらったプログラムを実施した。子供たちは一斉にピアノの周りに集まり、金子さんの演奏技術やピアノ内部パーツの動きに驚いている様子が伺えた。なかにはピアノの下に入るなどして自由に動き回りながら、大迫力の音の響きを体感していた。この学校ではアーティストの問いかけに対して、子供たちの活発な意見が多かったため、やや時間オーバー気味であったが、最終演奏プログラムを「ラ・カンパネラ／リスト」に急ぎょ変更され、金子さんの咄嗟のご配慮により予定時間どおりに終了した。

タイトル：音の探検！おとどけクラシック

期 日：平成28年1月29日（金） 10：40～11：30

会 場：福富小学校 音楽室

参加者：5年生2クラス 44人

町長と副町長にご覧になっていただくなか、プログラム3曲目「愛の夢／リスト」では、“愛とはいったい何か”という金子さん流のユニークな問いかけで子供たちより多くの発言が挙がった。最終的に各々が愛というものについて深く考え、それらが明確になっていったかのようにアーティストの話の一つ一つなずきながら耳をかたむけていた。それを踏まえてのピアノ演奏は、真剣そのものであった。演奏終了とともに顔の表情が明るくなり、お互いを思いやるとような優しい雰囲気が見えた。



タイトル：音の探検！おとどけクラシック

期 日：平成28年1月29日（金） 14：15～15：05

会 場：有明南小学校 音楽室

参加者：4、5年生 36人

最後のプログラムでは、フランツ・リストの話からご自身のピアノとの出会いや生い立ちのご紹介をもとに、“一度きりの人生なので自分の夢を諦めないで一生懸命にやれば夢は叶う。だから、みんなも諦めないでほしい。”と話された。その後、「ハンガリー狂詩曲／リスト」を演奏された。それはまさに音楽と真剣に向き合っている大人（＝子供たちにとって将来の等身大の自分）の姿を実際に間近で体験することで、人間の凄さや可能性といったものを発見し、夢を持つことの大切さについて想いを届けられている金子さんのメッセージともいべき渾身の一曲であった。ここでも子供たちの集中力は誰一人として途切れることなくキラキラと目を輝かせて聴いていた。



コンサート

タイトル：金子三勇士が奏でる 音とふれあうコンサート2016

期 日：平成28年1月30日（土） 18：30開演

会 場：白石町有明スカイパークふれあい郷 自有館ホール(定員：708人)

入場者数：261人

クラシック初心者から幅広い年齢層の大人までが楽しめるようにトークを入れて実施した。舞台演出については、特殊照明機材等を使用した視覚的に観客の感情を煽るといったことは一切おこなわず、アーティストの生演奏を重視した。プログラム及び舞台進行の内容は、M1:バラード第1番/ショパン→MC→M2:夜想曲第2番/ショパン→幻想即興曲/ショパン→MC→M4:ピアノソナタ「月光」/ベートーヴェン→休憩(20分間)→M5:オスティナート/バルトーク→MC→M6:セーケイ人達との夕べ/バルトーク→M7:6つのルーマニア民族舞曲/バルトーク→MC→M8:ラ・カンパネラ/リスト→M9:愛の夢/リスト→MC:アウトリーチ紹介→M10:ハンガリー狂詩曲第2番/リスト→M11(E1):英雄ポロネーズ/ショパンを実施。特に終盤においては、今回のアウトリーチの様子をサブスクリーンに投影し、その活動内容の紹介とともに町内の観光名所めぐりの様子も披露したことで観客と金子さんとの間にさらに親近感が生まれた。その後アウトリーチ先で演奏された当館の希望曲1としてM10へと繋げた。さらに、希望曲2のM11を実施するにあたり、アンコールの代わりにお客様のお見送り曲として観客(希望者に限り)を舞台上にあげて通常では絶対に体験できない、ピアニストの演奏を間近で聴いていただくというスペシャル企画が実現した。割れんばかりの拍手と大歓声のなか、2時間20分の終演を無事に迎えた。



① 応募の動機・事業のねらい

白石町は平成24年度から2年間に渡り、ピアニストの田村緑氏によるアウトリーチと本公演を行なった実績がある。この経験を踏まえて、町内各小学校に一流の音楽家による生の演奏や芸術音楽とふれあう機会を一過性のものでなく、継続的に実施していくための手助けを必要としていた。本事業を契機に、さらにアウトリーチに関する知識を学ぶとともに学校や行政との連携を深め、この町独自のやり方による芸術普及活動の環境づくりを行ないたい。

② 企画のポイント

アクティビティ：本事業を足掛かりに「音の探検！おとどけクラシック」というタイトルのもと、小学生を対象としたアウトリーチの継続化への基盤となる関係各所との連携をいかに構築していくことができるか。コンサート：今後もシリーズ化していくことを視野に入れ、メインタイトルを「音とふれあうコンサート」とした。通常のリサイタルではなく、クラシック初心者でもアーティストを身近に感じられる内容にすることで、クラシック音楽への支持層の拡大とホール利用度の活性化を目指した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティ：“3つのS”という本事業の方針の1つである40人程度の“少人数”という1コマの人数制限のもと、実際に各小学校にその受講対象児童での選定依頼をした場合、「4～6年生の60人はダメでしょうか。」「どうして、うちの子たちの学年は対象外なんですか。」「やはり全校生徒を対象に体育館でお願いできませんか。」など、先生や保護者からの不満や苦情が出るのは明白であり、まずはこの問題を解消するために町内全小学生が平等にアウトリーチを受講できる仕組みを申請以前から模索していた。コンサート：スクリーンを使用したスライド投影付きでのトークによるアウトリーチ紹介コーナーを企画したが、準備段階で問題が発生した。(1) 1日目のアクティビティ分ほとんどの保存画像に不具合が生じていた為、当初こちらが想定していた内容での実施が絶望的となり、当該コーナーを取りやめざるを得ない状況となった。(2) 事前に具体的なトーク内容や方向性が煮詰まっていない状態で本期間を迎えた為、本公演当日の入りと同時に金子さんにトーク内容をお考えいただくという負担をお掛けする状況となった。(3) これは問題というより大変さを感じた部分だが、あのタイトなスケジュール(実質4日間)の中で、本公演で使用するスライド画像作成に要する作業時間の捻出とプレッシャーは予想以上のものがあった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティ：将来的に町内の全児童が平等にアウトリーチを受講できるための当館独自で考案した開催計画案を作成し、これを基に教育委員会をはじめ各校のご担当先生方への事前説明会を実施した。その際、実施校の対象学年を事前にこちらで指定したが、すべて問題なくご承諾いただいた。同時に次年度の実施校に対しては、その受け入れ態勢を事前に整えていただくことが可能となった。コンサート：(1) アウトリーチの取材で訪問されていた関係各所から画像データを提供いただいたおかげで危機を回避した。(2) 実際には金子さんに負担をお掛けしたことに変わりはないが、アクティビティを終えた本公演前日に金子さんとコーディネーター方との緊急会議を開き、現状範囲内で実施するための最善策とともにトーク内容の方針が決定した。(3) アクティビティ期間中のニッチタイムと開催当日のアーティスト入りされるまでの時間でなんとかスライド画像を完成させた。その代わりに本事業の副担当者をはじめとする各関係スタッフには負担をかけたが、率先して協力してもらえたおかげでこの作業に集中することができた。

⑤ 事業を実施しての成果

本事業の開始当初と比較すると町教育委員会をはじめ各小学校や町内音楽関係者等との関係性が強化でき、今後のアウトリーチ開催にむけた流れを構築した。また、表敬訪問の実施により町長と副町長にアウトリーチ及び本公演とにもご覧いただき、本事業に対しての深いご理解を得たのは大きな成果といえる。そして、本事業を通じて多岐にわたり貴重な経験を積ませていただいたことは、当ホールにとって何よりの収穫となった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

反省点と課題は山積みであるが、その中でも1つだけ挙げるとすれば、スタッフ不足が課題である。当ホールでは、ホールサポーターというボランティアによる自主事業時にお手伝いをさせていただく組織を作っているが、今回の実施期間中においては欠席者が多かった為、今後はこのような事態にも対応できる人員確保について検討しなければならない。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

コンサートにおいては好評につき、現在でもその反響が大きく残っている程の公演であっただけに、もっと多くの地域の方にご来場いただきたかったというこの点においては残念でならない。特に広報面には力を入れてきたが、期待したような効果までに至らなかった。この結果を真摯に受け止めた上で、今後の改善に努めたいと考えている。しかし、これはクラシック音楽に対する地域の関心度がきわめて低い現状にあることが最大の要因ではないかと認識している。今後は、さらに当ホールがアーティストと町民とをつなぐ橋渡しの担い手であるという自覚と責務を持ち、このような現状を打破するためにも将来を見据えた芸術音楽の普及活動として、吸収力と感受性の高い児童へのアウトリーチ事業の継続的な実施とともに地域住民を対象としたコンサートの開催を併行しておこなっていく必要性を改めて強く感じた。

アシスタントレポート

桜井 しおり

佐賀県白石町は佐賀県の南西部、佐賀市中心部から25km圏内に位置する、旧白石町、旧福富町、旧有明町の3町が合併し誕生した町である。人口は約24,000人で広大な白石平野、有明海といった美しく個性豊かな自然が揃っているのが特徴である。過去に2回、自主事業にてピアニストの田村緑さんをお迎えし、町内8校全ての小学校に対してアウトリーチを実施した経験があるが、今回はおんかつ支援のことも視野に入れている為、おんかつ事業にて金子三勇士さんを迎えての実施となった。

<アクティビティについて>

今回は4回のアクティビティ全てが小学生対象に行われた。学年も4年生以上に絞り、平均40名の着席型にて実施された。通常、おんかつのアクティビティでは、アーティストに対し親しみを抱いてもらうために平服で演奏されることが多いが、金子さんの「元来欧州ではクラシックの演奏は燕尾服着にて行われる事から、そのスタイルを日本でも継承していきたい」という思いから4回全てが燕尾服にて実施された。

アウトリーチ全体の流れとしては1曲終了ごとにアーティストの自己紹介、楽器の紹介、ピアニストという仕事について等を語るという形で構成されていた。圧倒的な演奏は勿論のこと、豊富なボキャブラリーと知性に富んだ切り口から繰り広げられるトークで、金子さんの魅力が存分に発揮されていた。特にリスト作曲の《愛の夢》の演奏の前には、「愛ってそもそも何だろう？」と小学生に問いかけ、愛にはどんな気持ちが含まれているのか全員に質問する場面が印象的であった。小学生対象に“愛”のテーマは哲学的で壮大過ぎると思われがちだが、金子さんは生徒達からの発言を丁寧にすくい上げ、自身が考える“愛”を真剣に語られていた。その姿に生徒たちも真剣なまなざしを金子さんに向けており、その後に演奏された《愛の夢》ではそれぞれが“愛”について想いを馳せながら鑑賞が出来たことだろう。また最後の演奏の前には、幼少期よりピアニストになりたいという夢を追い続けてきたというご自身のお話から、金子さんが生徒達の先輩として、「夢を持って諦めないで挑戦し続けてほしい、夢は必ず叶う」というメッセージを送っていた。

全体を通して、シンプルな構成でありながらメッセージ性が非常に強い、金子さんにしかできないオリジナリティ溢れたアクティビティになったと感じた。

<コンサートについて>

コンサートでは、4月のアーティストプレゼンテーションにて担当者が体験した、舞台上がって金子さんの演奏を間近で聴くという体験をお客様にも是非してほしいという願いから、プログラムの最後にお客様も舞台上がって頂き《英雄ポロネーズ》を演奏している金子さんの側を通ってお帰り頂く時間を設けた。結果、予想以上に多くのお客様が舞台上がって下さり、間近で聴く金子さんの演奏や手の動きに釘付けとなっていた。通常は客席でしか聴く事の出来ない一流アーティストの演奏を間近で聴く経験をしてほしいという担当者の願いは、お客様にも十分に伝わり、非常に贅沢な時間であったと感じた。

また、当日は町内外からも多数のお客様にお越し頂き、音楽関係者やピアノを習っている親子の姿が多く見られた。また終焉後のCD販売・サイン会も長蛇の列となり、お客様の笑顔から大変ご満足して頂いていることが見てとれた。

<総括>

今回の白石町でのおんかつはアクティビティ、コンサート共に大成功で幕を閉じたが、これを支えた

のは、公演までの担当者の細やかな配慮だと感じた。実施に至るまでに担当者がいかに地元の学校の先生や町長と良好な関係を築いているかが成功へのとても重要な鍵となる。今回はアクティビティを行った小学校全てが我々を温かく迎えて下さり、町長もアクティビティの視察にお越し頂くなど、担当者と良好に構築された関係性が伺えた。これは4月から熱い思いを持って取り組んでくださった担当の大曲さんの賜物といえる。そこに金子さんの圧倒的な演奏、お人柄が相まって大成功となった。白石町はスポーツが盛んな町と伺っていたが、今回のおんかつは今後の白石町での音楽事業拡大に一つの布石を落とせたのではないだろうか。

実施団体：時津町教育振興公社

実施時期：平成27年12月15日（火）～平成27年12月17日（木）

出演アーティスト：金子 三勇士（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：オンガクたくはいびん

期 日：平成27年12月15日（火） 10：30～11：15

会 場：とぎつカナリーホール ステージ上

参加者：時津幼稚園 年長園児（32人）

バルトーク：オスティナート、ショパン：英雄ポロネーズ、バッハ：プレリュード、リスト：愛の夢・ハンガリー狂詩曲を演奏。ピアニストという職業についての話や、曲解説など園児とのトークを交えつつ進行。

また、「英雄ポロネーズ」演奏時にはピアノの周りに園児を集め、ピアノの迫力を体感できる場面もあった。

タイトル：オンガクたくはいびん

期 日：平成27年12月15日（火） 13：00～13：40

会 場：とぎつカナリーホール ステージ上

参加者：ひらき幼稚園 年長園児（28人）

バルトーク：チェルゲー、ショパン：英雄ポロネーズ、バッハ：プレリュード、リスト：愛の夢を演奏。ピアニストという職業についての話や、曲解説など園児とのトークを交えつつ進行。

また、「英雄ポロネーズ」演奏時にはピアノの周りに園児を集め、ピアノの迫力を体感できる場面もあった。

タイトル：オンガクたくはいびん

期 日：平成27年12月16日（水） 10：00～11：15

会 場：長崎県立盲学校 音楽室

参加者：長崎県立盲学校 児童・生徒（14人）

バルトーク：オスティナート、リスト：愛の夢、ショパン：英雄ポロネーズなど、クラシックの名曲をMCや児童・生徒とのトークを交えつつ演奏。全体を2グループに分け、ピアノの周りを一周し、場所による音色や聞こえ方の違いを聞き比べた。

アクティビティの最後には、ピアノの演奏に合わせ、同校愛唱歌「愛のうた（作詞：永井隆/作曲：小林健一郎）」の合唱をした。

タイトル：オンガクたくはいびん

期 日：平成27年12月16日（水） 13：30～14：10

会 場：とぎつカナリーホール ステージ上

参加者：鳴鼓幼稚園 年長園児（32人）

バルトーク：チェルゲー、ショパン：英雄ポロネーズ、バッハ：プレリュード、リスト：愛の夢、ハンガリー狂詩曲を演奏。ピアニストという職業についての話や、曲解説など園児とのトークを交えつつ進行。

また、「英雄ポロネーズ」演奏時にはピアノの周りに園児を集め、ピアノの迫力を体感できる場面もあった。



コンサート

タイトル：平成27年度公共ホール音楽活性化事業 金子三勇士
ピアノリサイタル

期 日：平成27年12月17日（金） 14：30 開演

会 場：とぎつカナリーホール（定員：770人）

入場者数：560人

一般販売のほか、町立中学校の3年生（約330名を招待し実施。
バルトーク：オスティナート、ショパン：幻想即興曲、英雄ポロネーズ、夜想曲第2番、リスト：ラ・カンパネラ、愛の夢、ハンガリー狂詩曲第2番を演奏。演奏だけでなく、作曲家や曲についてのトークを交えながらのリサイタル。



① 応募の動機・事業のねらい

アクティビティでは、入場が制限されがちな未就学児童や、公演を鑑賞したくても来場が困難な盲学校生徒にも、音に触れ、生の音楽を楽しんでもらう機会を提供したい。

有料公演では、「カナリーステージナイン（町内小中学生鑑賞事業）」と絡めて実施したい。一部座席を町内の中学3年生（330名程度）の招待席とし、これまで多くのリクエストはあったが鑑賞事業では取り上げたことのない、ピアノ公演を鑑賞する機会を提供したい。

② 企画のポイント

アクティビティでは、客席ではなくアーティストと同じステージ上で聴いてもらう。ピアノの下に潜ったり、間近で音を聴いたりすることで、ピアノの迫力を体験してもらう。

また、アクティビティ・本公演ともに、一流の演奏を提供しつつも、来場者（クラシックを聞き慣れていない方）が構えてしまわないように、MCを通して、アーティストの人柄や聴きどころを伝え、親しみを持ってもらう。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティの人数の問題。当初は、町内中学生（330名）を対象として実施を希望していたが、人数の都合によりアクティビティとして実施できなかったこと。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティの対象とすることが難しくなった中学生の代わりに、普段ホールに足を運びにくい県立盲学校の児童・生徒を対象に実施し、当初アクティビティの対象と考えていた中学生は本公演に招待する形で解決した。

⑤ 事業を実施しての成果

まず、幼稚園児たちは生の音を聴き、ピアノ、音楽に興味を持つことができた。県立盲学校の生徒からは、「色々な場所に移動してピアノの音を聞き比べられたことにより、響きの違いに気づくことができた」「曲にまつわる話を詳しく聞けたのでとても勉強になった」「コンサートホールに足を運ぶ機会の少ない自分たちにとって、とても貴重な経験となった」とのお手紙をいただいた。

また、本公演の来場者からも、MCがあり楽しく、詳しくクラシックを楽しむことができたとのアンケート結果が出た。クラシックを敬遠されてきた方は、以前より構えることなく楽しんでいただくことができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

本町民は、クラシックに馴染みのない方や、「クラシック」と聞いただけで構えてしまう方も多い。多くの方が「クラシックは分からないから」と仰るが、そうであれば分かるように、曲解説など出演者のMCを取り入れて、アーティストの人柄にも触れ、そこからクラシックにも親しむというアプローチも考えなければならない。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

これまで、クラシックや舞台芸術に親しむ機会が少なかった町民が多くいるということ。

「クラシックは分からない(だから楽しめないと思う)」という固定観念がコンサートに来ない理由になってしまっていること。

本格的なクラシックのプログラムも必要だが、そればかりでなく「クラシック入門編」のプログラムもニーズがあると考えた。

長崎空港から高速連絡船で25分、長崎市内から車で約15分のところに時津町はある。大村湾に面しており、岩崎弥太郎が起こした三菱系の工場も点在する。長崎市のベッドタウンでもあり、近年人口が増加している町である（2015年度統計で30,555名）。

とぎつカナリーホールは、2002年に開館した多目的文化ホール（770席）だ。ホールは「文化の森公園」のなかにあり、ホールのほか民俗資料館、中央児童館、練習室、リハーサル室が併設されている。ホール横の公園で元気に遊んでいる子どもたちが、そのまま民俗資料館やホール受付に立ち寄る姿は、日常のヒトコマだ。練習室は地元のピアノ教室に開放され、レッスンは行われ、まさに「まちの文化広場」である。

これらの全施設を管理運営しているのが、時津町教育振興公社である。館長含め、小規模な運営チームにも関わらず、積極的な主催・共催事業のほか、小学校・中学校の全学年を対象にした芸術鑑賞事業「カナリー・ステージ・ナイン」、大学や文化団体と連携した「カナリー音の博物館」など、子どもを対象にした無料プログラムも充実している。それらの多様なプログラムが、潤いある地域づくりに貢献する文化活動支援と子どもたちの育成事業として高く評価され、平成24年には地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞した。

このようにある意味、「まちの文化広場」として確立されつつある文化施設が、公共ホール音楽活性化事業に応募した理由は何であったのだろうか。一つは、新しいコンサートスタイルへのチャレンジ。もう一つは、ホールスタッフの育成だったと感じる。

大きな目的の一つめは、主婦層をターゲットにした平日昼公演枠の試験的实施であった。これまでにない新しい時間帯と新しい客層を開拓するための布石として位置づけられた。これはホールの過去公演データから導かれたターゲットだった。託児サービスも用意し、チケット価格も一般前売り1800円（当日2000円）、学生800円（当日1000円）とした。公演終了後、CDサイン会を待つご婦人方から「もともと昼間しか出歩けない。これぐらいの金額ならお小遣いで来られるので嬉しい」という声も聞かれた。券売に関しては、これから様々な方略を検討することになると思われるが、細かい顧客分析データがあってこそその新事業開発であったように思う。

もう一つの目的は、今後より地域に密着した活動を展開していくために欠かせない人材の育成であった。とぎつカナリーホールには、経験豊富なベテラン職員群と、時津で生まれ育った若手職員群が在籍する。いつもはベテラン群がリードをすることが多いそうだが、今回は若手の太田早紀さんが担当者として抜擢された。一度は大手企業に就職したものの、とぎつカナリーホールで働きたいとUターンしてきたそうだ。それ故に、館長はじめベテラン群が寄せる期待も大きいのだろう。アクティビティやコンサートの制作過程で、大小様々な関門があったにちがいないが、ベテラン職員の絶妙なサポートを受けて、最後のコンサートまで走り抜けた数ヶ月だったと思う。

さて、今回の一連の事業について概観したい。すでに町独自の芸術鑑賞事業「カナリー・ステージ・ナイン（以下、CS9）」で小中との連携が実現しているため、アクティビティ先には幼稚園3園と県立盲学校が選ばれた。幼稚園3園のアクティビティはCS9に倣い、幼稚園生たちをホールへご招待した。舞台上には舞台スタッフ力作のひな壇が用意され、そこを客席に見立て、園児たちもアーティストと同じ舞台上で音楽体験を共有した。アーティストは、ピアノの金子三勇士さんだった。冒頭に演奏されたバルトーク作曲〈オスティナート〉では、突然はじまる激しいリズムに思わず、お尻ごと飛び上がる園児もいた。金子さんは園児たちにたくさん質問を投げかけた。その中の印象的なやり取りを紹介したい。「演奏家って何のためにいると思う？」と半ば哲学的な金子さんからの質問に対して、園児たちは間髪入れずに「皆と歌をうたう」「いい音だなと思わせる」「疲れたときに音楽をききたいから」「楽し

くなるため」と。リストの〈愛の夢〉について話している金子さんに対して、ある男の子が「みゆじさんも愛ってあるん?」。演奏をし終わった金子さんに「今、寝てたの?」(目をつぶっていたから)。

長崎県立盲学校でのアウトリーチは小学部から高等部を対象にした75分の特別プログラムだった。「ピアノの響きの豊かさ」を体感させたいという学校側の提案に対して、ショパン作曲〈ノクターン〉の演奏中にピアノに触れながらピアノの周りを歩いて、お気に入りの場所を見つけるミニワークが取り入れられた。ほとんどの生徒が同じ場所をお気に入りポイントに選んだのだが、面白いことにその場所はピアノ演奏録音の際にマイクを立てる場所だった。リスト〈愛の夢〉ではピアノの側に再び近づいたり、下に潜ったり、各自好きな場所で鑑賞した。「ピアノの中に入っているみたい」「音が床全体に響いて、音の震動が身体に揺れて迫力があつた」などの感想が聞かれた。最後は県立盲学校の愛唱歌〈愛のうた〉を全員で合唱した。この作品は、原爆で被爆をした永井隆博士が盲学校に贈った詩に、2011年の東日本大震災の直後に「苦難を乗り越え、強く生きて欲しい」という願いを込めて指揮者・小林研二氏が作曲をした作品だ。途中、ハンガリーで活躍する小林マエストロと、ハンガリーと日本の血をひく金子さんのプライベートな交流についてのお話があると、会場は一層の盛り上がりを見せた。

コンサートについては、前述したとおり、平日昼間に開催された。主婦層をターゲットにした公演枠の常設に向けた一歩であった。なお、この公演には時津町内の中学3年生約300名がCS9の一環として来場した。実際にチケットを持ち、一般のお客様と同じようにコンサートホールでの時間を過ごした。公演の途中、金子さんが舞台から客席に降り、マイクを中学生たちに向け、アウトリーチさながらの質問コーナーを行う場面もあった。

この公共ホール音楽活性化事業は、単にアーティストやコーディネーターを派遣するプログラムではない。公共ホールを生き生きとした地域の文化拠点に形成するために、そこで働く人材をOJTで育てる役割も持つ。スタッフが地域に住んでいる強み、既存の地域ネットワーク、目に見えない資源、そして潜在的可能性をたくさん秘めた人材は、どこの文化施設にもある。コーディネーターやアーティストが外部から入ることで、ある種の揺さぶりや摩擦が生まれ、今まで見えなかったことが見えてきたり、新しい活動への萌芽が立ち現れる。今回の時津町のおんかつ事業でも、たくさんの気づきや発見があつたと思う。それらを材料に、今後も「まちの文化広場」として意欲的なプログラムに挑戦し続けてほしいと願う。

第3部
平成27年度公共ホール
音楽活性化事業
コーディネーターレポート

定着と再考

アウトリーチやワークショップなど、アクティビティと呼ばれるプログラムが公共ホールの活動に革命をもたらしてもう随分になりました。今や、こうしたプログラムに取り組んでいない公共ホールを探す方が難しいくらいに全国に広まり、定着した。と言えるでしょう。一方で、初めてアクティビティに取り組んだ時から随分と月日が経ち、担当者の異動も何代も重なり、目的を見失ったアクティビティが増えてきているのも事実で、最近では「何のためにやっているのか分からない。」とか「マンネリ化」などの相談が増えてきています。

個人的には、アクティビティは鑑賞型事業（いわゆる買取公演）とは異なり、そのホールが目指していることやスタッフの企画制作力などが如実に分かってしまうため、安易な気持ちで取り組むことは危険だと思っています。

もし、「目的を見失っている」とか「マンネリ化」など、少しでも疑問を感じるのであれば、一度、活動のねらいや意味、目的を見つめ直してみたいかでしょうか？

成熟

初期のおんかつ事業は、コミュニケーション重視の少人数制アウトリーチコンサートや地域資源の活用、他ジャンルとのコラボレーション、体験型ワークショップ、お届け型、呼び込み型、インリーチなど、手法開発的な取り組みや斬新な企画、新しい考え方などが次から次へと生まれてくる時代でした。その後、事業（手法）の成熟に伴い、そうした実験的な取り組みは減り、スタンダードな取り組みが増えてきました。

アクティビティの効果的な活用

一方で、おんかつ事業が手法開発に取り組んできたことにより、様々なアクティビティを効果的に組み合わせる企画、実施することが可能となりました。そして、今、そうしたプロジェクトに注目が集まっています。

“アウトリーチ から ホールコンサートへ ” という、おんかつ事業の枠組みを基礎としながら、アウトリーチからホールコンサートまでの間であったり、コンサートの後に、ワークショップや地域資源の活用、体験型、参加型など、様々なプログラムを効果的に組み合わせ、一体的なプロジェクトとして行うことにより、「出会い」から「参加」、「体験」、「発見」、「創作」、「発信」までの流れをトータル的にコーディネートすることで、より高い成果を得ることができるのではないかと期待されています。

ノウハウ、ビジョン、ミッション

こうした複雑なプロジェクトを実施するためには、優れた制作力と企画力が必要不可欠となります。制作力では、基礎的な知識と経験の獲得しながら、作業の簡素化と標準化が重要となり、企画力では、単発的なアイデアではなく、中長期の視野を持ったビジョンが求められます。

そして、何より、自分達は何を目的として活動しているのか？企画の根拠となるミッションの確認が最も重要となります。

プレゼンテーション～交流会 アーティストと企画の考え方を共有する

毎年恒例の「おんかつ」プレゼンテーション、登録アーティストがホールの事業担当者にアピールする重要な機会、又、その後に開催されるアーティストとの交流会は、公共ホールの事業担当者にとっては、企画の方向性をアーティストに伝え、アーティストの考え方を共有する大事な時間です。

[ここで言う「企画」とは、アウトリーチとコンサートを、何時、何処で、どのアーティストで、どんな内容〈具体的な楽曲プログラムではなく対象者に届けたいメッセージ等〉を、どのような方法で、実施するのかという意味]

毎年「おんかつ」の全体研修会では、プレゼンテーションの前に「プレゼンテーションの聞き方(見方)」と言った内容のゼミが展開されますが、事業担当者はどのような視点でプレゼンテーションを鑑賞するのか、その後の交流会では、アーティストと何を相談すべきかを改めて考えてみたいと思います。

プレゼンテーションはアーティストが自分自身でプログラミングし、どのようなアウトリーチやコンサートが出来るかを事業担当者に演奏とトーク等で提案する唯一の機会です。対して、その後の交流会は、プレゼンテーションを鑑賞した事業担当者が、企画のイメージをアーティストに伝え、どのような「おんかつ」を実施したいか、アーティストに事業担当者が逆にプレゼンテーションする、これも唯一の機会ではないかと思えます。

プレゼンテーションは限られた時間の範囲でアーティストも真剣勝負を挑んできます。楽曲の構成、選曲に込められたメッセージ、演奏のスタイル、表情や言葉遣い、醸し出す雰囲気等、これらから直感的に且つ総合的に自らの企画のイメージに合うか、実現に向けて考え方を共有できるか感じ取る事が最も大切だと思えます。

交流会では、企画のイメージをアーティストがどのように理解し共有するか、又はアーティストの視点から別のアイデアを投げかけてくるか、重要な事はここでアーティストと企画の考え方を共有出来るかどうか、その後の企画実施に大きく影響してきます。そのやり取りは一般的なキャッチボールではなく、変化球も駆使して、自分の夢を具現化してくれる人かどうか、恋人を選ぶような感覚で、アーティストの考え方や個性を見抜く事が事業担当者には求められてくるのだと思えます。

では、どのようにアーティストを選ぶのか、インスピレーションも重要ですが、まずは現実的に企画の骨子なりテーマを明確に設定した上で

- (1) どのようなアウトリーチやコンサートをしたいのかイメージが明確になっているか。
- (2) その内容をアーティストが理解し共有してくれるか。
- (3) その上で、実現出来るアイデアや応用力があるか。

を念頭において交渉して欲しいと思えます。

企画が明確になっていないと、いざ実施と言う時点で、何も前に進みません。アーティストは決定しているものの、内容やタイトルが決まらず、結果アーティスト任せになってしまい「おんかつ」の魅力や個性がなくなってしまいます。又、アーティストとの意思疎通がしっかりと取れていないと、イメージと異なった内容になり、目的・目標が全く別の企画になってしまう恐れもあります。アーティストと理解、共有は出来たものの、実現に向けたアイデアが乏しい、応用性が弱い、拘りが強い、等々の場合は、一方的な中身の薄い内容になってしまいがちです。極端に言えば、この点をクリア出来るかどうか、根本はプレゼンテーションと交流会の交渉に遡ってくるのではないかと思えます。

アーティストとの交渉で、ポイントになってくるのは企画の内容と方法です。日時・場所等の具体的な情報は伝えれば済む事ですが、内容や方法は、そう簡単にイメージする事は難しい項目です。又、そ

れぞれが自分に都合良く解釈したり捉えたりしがちな曖昧な情報なのです。だからこそ、このポイントを丁寧に説明し理解しあう事こそが一番重要になってくるのです。

事業担当者にとってアーティストと企画の相談や交渉をする事は、一見むずかしく捉えがちですが、事業担当者には音楽の専門的知識は無くても良いのです。一番重要な事は地域のプロフェッショナルであって欲しいと言う点と、音楽から何かを感じ取ってその価値を言葉にして他者に伝えると言うコミュニケーション能力さえあれば、何も音楽の知識に精通している必要はありません。

又、アーティストとの付き合い方、距離の取り方は非常に難しいと言う事です。ファンになってしまうと冷静な視点を失い、その価値を過大に受け取ってしまう恐れがあります。地域のプロとして、アーティストと常に対等に交渉する事を心がけて欲しい点です。ファンにならず、恐縮せずに、自分の企画案やアイデアを冷静に伝える事が重要でありスタート地点なのです。

今年担当させていただいた各地域、それぞれに素晴らしいアイデアと万全な準備により「おんかつ」の理念が反映された事業が展開されました。詳しいレポートについてはアシスタントコーディネーターの方に委ねるとしまして、それぞれが支援事業を継続されると伺い、一定の成果はあったものと思います。担当コーディネーターとしてはそれぞれの地域で、異なるポイントではありつつも、事業の進捗の経過で、事業担当者とアーティストの思いがそれぞれぶつかりあう場面に遭遇し、この原因は何に起因するのかを考えたところ、やはり、アーティストと最初に出会うプレゼンテーション、そして交流会と言う一連の流れの中で、いかに本質的な部分の交渉、意見の擦り合わせが出来ているかが非常に重要であると改めて感じた「おんかつ」でした。

先日、ある本で以下のような文章に出会いました。

Vision without action is a daydream. Action without vision is a nightmare.

「行動を伴わない理想はただの夢。理想のない行動は悪夢でしかない」日本のことわざと言われていますがそれに該当するものはないようで、もっぱら英文（英訳）の方が広まっています。それはさておき…。今年度担当させていただいた裾野市、時津町、そして高岡市のいずれも、この“理想”と“行動”がキーワードになった気がします。

3市町とも、アウトリーチ活動については実績の差がありましたが、ホール公演については（自主・買い取りを含め）定期的に公演を行っているホールです。そのようなホールの担当者の方が「おんかつ」に参加されて何を求めているかということ、「より地域に密着した・地域のニーズに応えられる企画作り」、「新しい聴衆層の開拓」という目標の達成でした。どんな目標もそうですが、その実現には具体的なイメージが必要です。こうあって欲しい、こういうものにしたいという自分たちが理想とする姿をイメージすることが重要で、今回の場合、ホールを訪れた（地域の）人々の満面の笑みや感動した表情、それまで目にしたことのない年齢層の人々がホールに集い来った光景がそれにあたります。

最初の裾野市の課題は、「子供も楽しめるクラシック・コンサート」を作ることでした。子供向けのイベントは完売するのに、“コンサート”という形式になった途端、子供を対象にした内容にもかかわらず子供たちが集まらない。そのような現状を打破すべく、最初に取り組んでいたのは、「どんな内容にすると子供たちもコンサートに来てくれるのか」を考えていただくことでした。手法としてのアイデアが多数出ましたが、その中から本来の目的や現実的な条件と照らし合わせて厳選し、最後に残ったのは「アーティストとの高見さんとの共演」というアイデアでした。ただ演奏を聴くだけでなく、アーティストと一緒に演奏したり舞台上上がったことで“楽しい・ワクワクするような体験をする”。そして、共演するために必要な子供たちの楽器をどうするかということから、自分たちで簡単につくれる楽器をそれぞれ用意してもらうことにしました。公演当日は、通常の開場時間より早くホールを開けてロビーに楽器作りができる作業スペースを設け、持参していただいた材料（ペットボトルやプラスチック・カップ）やホールで用意した材料でその場で手作りの楽器を作ってくださいにしました。このロビーの盛り上がりはホール内の他の施設を利用しに来ていた来館者の目にも留まり、中には予定があるからコンサートは聴けないが、楽器作りだけ参加したいと申し出られる人も出るほどでした。

さらに、コンサートを子供たちにより楽しんでもらえる工夫として、可動式座席というホールの特色を活かして座席は後部のみ使用することにし、舞台に近い前部は、平土間のままにしてカーペットを敷いて好きな姿勢で座ったり寝っ転がったりしてもいいという場を作りました。刃物を使う楽器作りのコーナーや、楽器を持った子供たちが大勢集まったカーペット席など、子供たちの状況に気配りしなければならない場面が増えたため、ボランティア・スタッフにも通常の場合案内以上のことをお願いすることになりましたが、逆にボランティア・スタッフの皆さんもより深くコンサート作りに参加することができ、一緒に楽しんでいただけたように見受けられました。

次にお伺いした時津町は、既に自主事業の実績をしっかりと積み重ねていたホールでした。そのようなホールの担当者さんが「おんかつ」で目指していたのは、「新しい聴衆層の開拓」でした。特に今回ターゲットとしたのは、夜の公演には足を運びにくい主婦層でした。そのため、主婦が外出しやすい時間帯をと考えて、通常コンサートの開催時間としては避けられる平日昼間をあえて選んでコンサートを企画

しました。その主婦層が求めるのはどのようなアーティストか、またどのような形・内容のコンサートにすると足を向けてくれるようになるかを考えていただきました。その結果、アーティストとして選ばれたピアニストの金子三勇士さんには休憩無しの1時間という（忙しい主婦の皆さんの負担にならない）コンサートで、ショパンやリストの名曲を中心とした、トークも交えたプログラムを用意していただきました。結果は、平日午後の1時間、日常から離れた特別に贅沢な空間・時間として楽しんでいただくことができました。この成功の裏には、効果的なチラシ作りもあったと思います。完成したチラシはコンサートの贅沢な雰囲気アピールすることに重点を置き、演奏中の金子さんの写真を活かして文字情報を極力削ったお洒落なデザインにしました。

一方の高岡市では、前田啓太さんを「クールでカッコいい」アーティストとしてアピールすることにしました。狙いは、ワークショップには参加してくれるのにコンサートにはなかなか足を運んでくれない吹奏楽部の児童生徒たちの集客でした。また、会館でこれまで様々な公演をされてきた中で、パーカッションは未知の世界ということで、その面白さ・魅力も伝えたいということでした。

パーカッションの魅力を最大限に伝えていただくということで、前田さんには「これぞパーカッション！」というプログラムをお願いしたのですが、ここで立ちほだかったのがパーカッション作品の知名度の低さという問題でした。聴いてもらえれば十分面白いのですが、知らない作曲家の名前が並んでしまう。そこで出たチラシ案は、パーカッション奏者としての前田さんのクールでカッコいいイメージを全面に出し、その雰囲気でお客様を誘うというアイデアでした。そしてコンサートの方は見せ方（演出）を工夫することにし、前田さんが持参されたたくさんの楽器を舞台のあちこちに島のように組んで並べ、曲毎に別の楽器のセットに移動して演奏していただくというものでした。それにより、“聴く”だけでなく“観る”コンサートにもし、さまざまな楽器だけでなく、それを演奏する前田さんの姿や体の動きも楽しめる舞台にしました。

高岡市は本来高岡市民会館で「おんかつ」を実施するはずでしたが、耐震診断の関係で会館が使えず、駅前の生涯学習センターホールを使用することになったのですが、このことが結果的に幸いしました。座席が常設になってしまっている市民会館と違い、可動式の座席で縦にも横にも使える生涯学習センターホールだからこそ、舞台のレイアウトを自由にすることができたからです。当日は予想を大幅に上回る来場者数で、急遽追加の椅子を出すほどでしたが、普段コンサートにあまり来ない吹奏楽部の生徒たちがかぶりつきの席で前田さんの演奏を聴き、演奏する姿に興奮していたのが印象的でした。

自分が企画するコンサートの理想像や具体的なイメージを持つことはなかなか難しいことですが（自分自身が色々な会場で色々な公演を聴いたり見たりして、1人の聴衆としての体験を積み重ねること、客席の雰囲気を味わってみることが必要）、それは同時にとても楽しい作業でもあると思います。どうしたらお客さんをワクワクさせられるか、どうしたらホールの中を優雅な世界・夢の世界に変えられるか…。まずは“理想像”を持った上で、次にそれをより効果的に実現できる方法・手段を考えて実行する。“理想”とそれに基づいた“行動”の組み合わせにより、理想的なコンサートが“悪夢”でも“ただの夢”でもなく、現実のものとなります。その成功例を、今回の3市町のホール公演の中に見た気がします。

今を遡ること四半世紀。私の卒業アルバムの寄せ書きページには、教科でも部活でも全く接点のなかった先生に書かれた「因果応報」という文字が、でかでかと毛筆で鎮座しています。アルバムを開いて思い返すなんてことは皆無だけれど、ある時ふとこの四字熟語が思い出されるのです。

さて、おんかつについて。事業を進めるにあたっては、前途洋々に進行することもあれば悶々と苦しいばかり等々、色んな経験をされていることだろうとお察しします。たくさん現場を見てきたけれど、担当者1人でザクザクと進めていたり、想いを仲間と共有しようと苦心していたり、迷いながら道を模索していたりと実に様々。疲弊した現場の比率が高いことに目を背けたい気もするけれど、実際みなさんお疲れの様子です。

ただ、そんな中でも、疲れを次へ向かう予備運動に変え、新たな課題を自分で見つけ出し、課題をどのようにしてクリアしてやろうかと、常に前向きに画策している担当者に出会える時があります。そして、その人たちは「もっとできる！」というエネルギーに溢れています。

何がこんなにエネルギーにさせるのだろうと思い巡らしてみたところ、こんな共通点が見えてきました。それは、担当者自身に目指すものが見えていること。向かうべきところがある、ということ。

今年度に伺った地域で、《音楽を聴いて、詩を作ったり、絵を描いたり、音楽から感じたものを言葉や絵にすることを通して、子どもたちの頭の中を形にしてみよう。(63字)》、という活動を行いました。

遡ること全体研修会のアーティストプレゼン。多くの担当者の心をつかんだ、とあるアーティストのアーティストおよび楽器と間近すぎる位置で音楽と触れるプログラムに、その担当者の心も奪われました。これを自分の町の子どもたちにも体験させたい、と。使命感とも言えるこの思いもまた、向かうべき場所へと向かわせる原動力なのだと思います。

音楽と詩と絵との活動を言葉にすると、前述の通り63字ぽっちなのですが、ここに至るまでには足しげく学校に通い、担任の先生と会い、問題点や可能性を探り解決していった担当者の粘りがありました。

子どもたちに何をさせたいのか、アーティストと音楽の立ち位置はどこにあるのかについて話し合い、先生の経験やお知恵もお借りしてアクティビティのテーマを導き出しプログラムを作ったものの、45分という限られた時間内ではプレゼンで心奪われたプログラムを入れることが難しいね、となり、それ抜きのプログラムを作成して提案したところ、担当者より即却下。まさにちゃぶ台返し。でも、そこに担当者の強い思いを見せつけられ、皆、奮起。夜更けのホテルのロビーには、作っては壊しを繰り返すDMな集団が居ました。

音楽が雰囲気作りのためのBGMではなく、子供たちの中に何かを芽生えさせるものという大前提のもと、その芽生えのための45分をどのように組み立てるか、皆が臆することはなく意見を言い、アイデアを出し合いました。疲れた体はロビーのソファーに沈んでいくものの、頭は冴えてくるという、人間の底力。そしてまた思い知らされました。相手を尊重するというのは相手にお任せするのではなく、「意図」を汲み、そこに個を認め、さらにそこに個として関わっていくからこそ構築されていく信頼関係から生み出されいくものだというところを。

余談になりますが、プログラムが出来上がったときには抜け殻になっていたスタッフ陣だけれど、その後アーティストはプログラムをシミュレーションし、我々では思い至らなかった各所を補完する作業を行い、すばらしいプログラムに仕上げてくださいました。平伏そして、感謝。

一手一手が実に丁寧に、レンガをひとつずつ組み上げるように固くしっかりと構築されていく様を見るにつけ、これで結果がついてこない訳がない、と思いました。

事業を終え、冒頭の四字熟語を思い出しました。本来の意味とは違うかもしれないけれど、私の中でこの言葉は「やっただけのことは報われる」という意味で身体にしみついています。頑張り切った人を見るとふと浮かんでくるようです。

ここに書ききれない事例は山ほどあり、ご紹介できないのが申し訳ないですが、今年度もたくさんの「因果応報」を思い出させてくださって有難うございました。

第4部

平成26-27年度公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

平成26-27年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 実施概要

1 事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

- ①対象団体（研修事業・総括公演プログラム事業）：（公財）岐阜県教育文化財団
- ②公演実施団体（市町村公演事業）：関市、美濃加茂市、飛騨市、下呂市、岐南町、東白川村

(2) 事業内容

対象団体は事業を2ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア) 研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内または政令指定都市内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象として、アウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ) 研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ) アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として4日間の連続した日程で次の事業を実施する。

- ア) 地域交流プログラム 学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業。原則として6回（1日につき2回・3日間）実施する。
- イ) コンサート 公共ホール等において有料のクラシック音楽のコンサートを実施する。

3 事業実施に対する支援

(1) チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

(3) 講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

- ・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
- ・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
- ・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の2年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、1団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、1団体につき5万円を限度として負担する。

5 派遣アーティスト 及び 派遣コーディネーター

(1) 派遣アーティスト

ピアノトリオ（ピアノトリオ Linon）：高田有莉子（Pf）、徳永希和子（Vn）、水野由紀（Vc）

弦楽四重奏（グランツ弦楽四重奏団）：桐原宗生（Vn）、長山恵理子（Vn）、高宮城凌（Va）、松本亜優（Vc）

木管五重奏（Franc 木管五重奏団）：荻本美帆（Fl）、中川愛（Ob）、工藤雄司（Cl）、後藤美紗子（Hr）、小野木栄水（Fg）

(2) チーフコーディネーター

児玉真（（一財）地域創造プロデューサー、いわき芸術文化交流館アリオスチーフプログラムオフィサー）

(3) コーディネーター

楠瀬寿賀子（（公財）せたがや文化財団 音楽事業部）

大島路子（ヴィオラ奏者、桐朋学園大学キャリア支援センター員）

田村緑（ピアニスト）

(4) アシスタントコーディネーター

菱川浩二（（株）TmZm代表取締役社長／プロデューサー）

高井晴美（（公財）ひろしま文化振興財団 事業推進員）

田辺沙保里（相模女子大学非常勤講師、お茶の水女子大学大学院 表象芸術論領域 博士課程在籍）

6 事業概要

(1) 研修事業

①研修プログラムⅠ（シンポジウム）

期 日：平成26年9月3日（水）

場 所：岐阜県図書館

内 容：市町村文化担当者、公共ホール職員等を対象とした、アウトリーチ活動の意義や可能性を学び、理解を深めるためのシンポジウム

シンポジウムプログラム

時間	内容	講師等（敬称略）
13:30～13:40	開会のあいさつ	—
13:40～14:40	「公共ホールのアウトリーチと芸術家の役割」	児玉真（チーフコーディネーター）
14:45～15:45	「アウトリーチフォーラム—市町村連携とその後の活動」	田嶋安紀子（和歌山県海草地域振興局地域振興部総務県民課）
15:55～16:40	模擬アウトリーチ	Quatuor B（サクソフオーン四重奏）
16:50～17:20	アーティスト・トークセッション	Quatuor B（サクソフオーン四重奏） 児玉真（チーフコーディネーター）
17:20～17:30	閉会のあいさつ、事務連絡	—

②研修プログラムⅡ（全体研修会）

期 日：平成27年7月13日（月）

場 所：ふれあい福寿会館

内 容：市町公演事業担当者を対象とした、事業実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会

全体研修会プログラム

時間	内容	講師等（敬称略）
13:30～13:45	オリエンテーション	—
13:45～15:15	アウトリーチフォーラム事業について	児玉真（チーフコーディネーター） 楠瀬寿賀子（コーディネーター） 大島路子（コーディネーター） 田村緑（コーディネーター）
15:30～16:00	事業説明	（一財）地域創造 担当者
16:00～17:00	個別打合せ	—

③アウトリーチ研修

期 日：平成27年9月3日（木）～9月8日（火）6日間

場 所：ふれあい福寿会館、岐阜大学教育大学付属小学校、岐阜市立加納小学校、羽島市立足近小学校、瑞穂市立西小学校

アウトリーチ研修スケジュール

日程	時間	内容
9月3日 (木)	15:00	開講式 及び オリエンテーション
	16:00	グループ別リハーサル（ふれあい福寿会館）
	18:30	交流会
	20:30	終了
9月4日 (金)	9:00	グループ別リハーサル（ふれあい福寿会館）
	21:00	終了
9月5日 (土)	9:00	グループ別リハーサル（ふれあい福寿会館）
	21:00	終了
9月6日 (日)	9:00	グループ別リハーサル（ふれあい福寿会館）
		各グループのランスルー グループ別リハーサル
	21:00	終了
9月7日 (月)	10:40	付属小学校にてアウトリーチ（ピアノトリオ、弦楽四重奏、木管五重奏）
	16:00	全体ミーティング（ふれあい福寿会館）
		グループ別リハーサル（ふれあい福寿会館）
	21:00	終了
9月8日 (火)	11:30	加納小学校にてアウトリーチ（木管五重奏）
	11:35	足近小学校にてアウトリーチ（ピアノトリオ）
	11:40	西小学校にてアウトリーチ（弦楽四重奏）
	16:30	閉講式

(2) 市町村公演事業

●飛騨市公演、美濃加茂市公演

アーティスト：ピアノトリオ Linon

高田有莉子 (Pf)、徳永希和子 (Vn)、水野由紀 (Vc)

コーディネーター：田村緑 アシスタントコーディネーター：高井晴美

公演①

実施団体	飛騨市文化交流センター指定管理者NPO法人ひだ文化村
実施時期	平成27年10月28日（水）～10月31日（土）
●アクティビティ 10月28日（水）河合小学校、宮川小学校 10月29日（木）古川小学校、山之村小中学校 10月30日（金）古川西小学校	
●コンサート 10月31日（土）15：00開演 飛騨市文化交流センター スピリットガーデンホール	

公演②

実施団体	美濃加茂市
実施時期	平成27年11月18日（水）～11月21日（土）
●アクティビティ 11月18日（水）下米田小学校 11月19日（木）三和小学校、伊深小学校 11月20日（金）加茂野小学校	
●コンサート 11月21日（土）14：00開演 美濃加茂市文化会館	

●関市公演、岐南町公演

アーティスト：グランツ弦楽四重奏団

桐原宗生 (1st Vn)、長山恵理子 (2nd Vn)、高宮城凌 (Va)、松本亜優 (Vc)

コーディネーター：楠瀬寿賀子 アシスタントコーディネーター：田辺沙保里

公演①

実施団体	関市教育委員会
実施時期	平成27年11月25日 (水) ~ 11月28日 (土)
●アクティビティ 11月25日 (水) 瀬尻小学校 11月26日 (木) 安桜小学校 11月27日 (金) 山之保小学校、洞戸小学校	
●コンサート 11月28日 (土) 開演14:00 関市文化会館	

公演②

実施団体	岐南町
実施時期	平成27年12月2日 (水) ~ 12月5日 (土)
●アクティビティ 12月2日 (水) 西小学校 12月3日 (木) 北小学校 12月4日 (金) 東小学校	
●コンサート 12月5日 (土) 14:00開演 岐南町中央公民館	

●下呂市公演、東白川村公演

アーティスト：Franc 木管五重奏団

荻本美帆 (Fl)、中川愛 (Ob)、工藤雄司 (Cl)、後藤美紗子 (Hr)、小野木栄水 (Fg)

コーディネーター：大島路子 アシスタントコーディネーター：菱川浩二

公演①

実施団体	下呂交流会館
実施時期	平成27年10月14日（水）～10月17日（土）
●アクティビティ 10月14日（水） 金山小学校 10月15日（木） 中原小学校 10月16日（金） 馬瀬小学校	
●コンサート 10月17日（土） 開演14：00 下呂交流館アクティブ	

公演②

実施団体	東白川村
実施時期	平成27年11月4日（水）～11月7日（土）
●アクティビティ 11月4日（水） 東白川小学校 11月5日（木） 東白川保健センター、東白川村高齢者生活福祉センター 11月6日（金） 東白川中学校	
●コンサート 11月7日（土） 19：00開演 はなのき会館	

(3) 総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

平成28年2月20日（土） 14：30開演

ぎふ清流文化プラザ

出演：ピアノトリオ Linon、グランツ弦楽四重奏団、Franc 木管五重奏団

平成26-27年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 派遣アーティストプロフィール

ピアノトリオ Linon

徳永 希和子 / Kiwako TOKUNAGA (ヴァイオリン)

5歳よりヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学を経て同大学研究科修了。同大学卒業演奏会、室内楽演奏会に出演。いしかわミュージックアカデミー、クールシュベール夏期国際音楽アカデミー、モーツァルテウム音楽院夏期国際音楽アカデミー等、国内外のアカデミーでザハール・ブロン氏やドーラ・シュバルツベルク氏、エドワード・シュミダー氏のマスタークラスに参加。ファイナルコンサートに出演する。宮崎国際音楽祭やちちぶ国際音楽祭、JTアートホール室内楽シリーズ出演するなど、ソロや室内楽、オーケストラで多方面に活動中。これまでにヴァイオリンを鈴木和子、久保田良作、辰巳明子、室内楽を徳永二男、東京クアルテットの各氏に師事。

水野 由紀 / Yuki MIZUNO (チェロ)

9歳よりチェロを始める。桐朋学園大学卒業後、同大学研究科修了。2012年、山形交響楽団と共演。同年、大学在学中オクタヴィア・レコードよりCDデビュー。2013年、2ndアルバム「アルペジオーネ・ソナタ」をリリース。2014年にヤマハホールにて2月に恩師である堤剛氏と共演。12月には飯森範親氏指揮・日本センチュリー交響楽団と共演。また関西フィルハーモニー管弦楽団にゲスト 首席として度々招かれており、ソロ・室内楽・オーケストラなど、一層意欲的に活動の幅を広げている。これまでにチェロを堤剛、菊地知也、室内楽を徳永二男の各氏に師事。

高田 有莉子 / Yuriko TAKADA (ピアノ)

3歳よりピアノを始める。桐朋女子高等学校音楽科を経て、ドイツ国立ハンブルク音楽演劇大学卒業後、英国王立音楽大学大学院修了。2011年 Music and Earth International Competition 第1位及びブルガリア赤十字賞、カジム・イシノフ賞。映画「のだめカンタービレ最終楽章」前編・後編にて手の吹き替えと演奏指導や、文化庁「子どものための優れた舞台芸術体験事業」、浦安市「ミュージック・デリバリー」などにおいてアウトリーチ活動にも力を入れる他、全日本ピアノ指導者協会ピティナ・ピアノステップトークコンサートに出演など、日本各地にて幅広く活動中。これまでにピアノを拝田正機、小林秀子、竹内啓子、エフゲニー・コロリオフ、ケヴィン・ケナー、室内楽を菊地真美、ラルフ・ナットケンパー、ジュリアン・ジェイコブソンの各氏に師事。

グラント弦楽四重奏団

2014年5月、桐朋学園大学の室内楽を愛する4人の学生により結成された。カルテット名の「Glanz」(グラント)とは、ドイツ語で「輝き」を意味する。これまでに、東京クワルテット、クアルテット・エクセルシオ、山崎伸子、堤剛、毛利伯郎、崎谷直人、花田和加子、竹澤恭子、児玉桃、クス・クアルテットの各氏に師事。サントリーホール室内楽アカデミー第3期フェロー。サントリーホール チェンバーミュージック・ガーデン2015に出演。

桐朋学園大学音楽部門 第94回室内楽演奏会、調布音楽祭2015に出演。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2015特別賞受賞。

桐原 宗生 / Muneo KIRIHARA (1st ヴァイオリン)

1992年生まれ。第4回九州音楽コンクール最優秀賞。第64回全日本学生音楽コンクール全国大会第2位。2014年4月より一年間、NHK交響楽団 N響アカデミー生として在籍。堀正文、久保良治の両氏に師事。

長山 恵理子 / Eriko NAGAYAMA (2nd ヴァイオリン)

1993年生まれ。第65回全日本学生音楽コンクール東京大会入選。第25回新人演奏家コンクール優秀賞。2015小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXⅢに参加。原田幸一郎、神谷美千子の両氏に師事。桐朋学園大学音楽学部4年に在学中。

高宮城 凌 / Ryo TAKAMIYAGI (ヴィオラ)

1992年生まれ。第50・56回全日本学生音楽コンクール福岡大会第1位。第14回日本クラシック音楽コンクール第3位。2008いしかわミュージックアカデミーにてIMA音楽賞受賞。第12回東京音楽コンクール入選。原田幸一郎、神谷美千子の両氏に師事。桐朋学園大学音楽学部4年に在学中。

松本 亜優 / Ayu MATSUMOTO (チェロ)

1992年生まれ。多摩フレッシュ音楽コンサート2009優秀賞。2009いしかわミュージックアカデミー奨励賞。第20回日本クラシック音楽コンクール第3位。毛利伯郎氏に師事。桐朋学園大学音楽学部研究科2年に在学中。

Franc木管五重奏団

Franc（フラン）はフランス語で「自由に」という意味。堅苦しいイメージのあるクラシックだけでなく、肩ひじ張らず自由に、気軽に聴ける音楽づくりをしていきたいという願いから名づけられた。これまでに、稲沢市民会館「ワンコインコンサート」、広小路ヤマハホール「管楽器リサイタルシリーズ」、名古屋ポストン美術館「親子で楽しむ木管五重奏」、宗次ホール「ランチタイム名曲コンサート」等に出演。2011年、武豊春の音楽祭にて「Franc木管五重奏団～春の音楽会～」を開催し好評を博す。その他にも中京圏を中心に、学校・施設での音楽鑑賞会やショッピングモールでのコンサート、パーティーでのBGM演奏などジャンルにとらわれず様々な演奏活動を行っている。レパートリーにはメンバーが編曲したものも多数あり、好評を得ている。

荻本 美帆 / Miho OGIMOTO (フルート)

愛知県稲沢市出身。名古屋芸術大学卒業、同大学院音楽研究科修士課程修了。現在、フリーのフルート奏者として演奏活動をする傍ら、後進の指導にもあたっている。これまでにフルートを富久田治彦、村田四郎、伊藤公一の各氏に、室内楽を青木明、依田嘉明の各氏に師事。

中川 愛 / Ai NAKAGAWA (オーボエ)

三重県菰野町出身。名古屋芸術大学卒業。現在、フリーのオーボエ奏者として多岐にわたり活動中。これまでにオーボエを寺島陽介、諸岡研史、山本直人の各氏に、室内楽を依田嘉明氏に師事。

工藤 雄司 / Yuji KUDO (クラリネット)

岐阜県瑞浪市出身。名古屋芸術大学卒業、同大学研修生修了、パリ・エコール・ノルマル音楽院音楽修了資格取得。2009年と2012年にリサイタルを名古屋市と多治見市で開催し好評を博す。現在、フリーのクラリネット奏者としてソロや室内楽等で活躍中。三重県立白子高等学校 文化教養（吹奏楽）コース、名古屋音楽学校、可児・蟹江カルチャーセンターのクラリネット講師、名古屋市小学校部活動外部指導者。これまでにクラリネットを小出紀仁、小松孝文、竹内雅一、品川政治、加藤明久、G.ドゥプリュの各氏に、室内楽をC.ルローン氏に師事。

後藤 美紗子 / Misako GOTO (ホルン)

三重県桑名市出身。名古屋芸術大学卒業、同大学研修生修了。2008年、同大学在学中にデンバーで行われた「ラファエル・メンデス・ブラス・インスティテュート2008」を受講。2011年、三重県新人演奏会に出演。現在フリーのホルン奏者として名古屋フィルハーモニー交響楽団をはじめ、吹奏楽・室内楽など多方面に活動すると共に後進の育成にも積極的に携わる。Ensemble ALK、Ladies Brassのメンバー。T.ペーコン、S.ドールの各氏のマスターコースに参加。NHK交響楽団のメンバーによる公開レッスンをEnsemble ALKで受講。これまでにホルンを野々口義典、國木俊之、井手詩朗の各氏に師事。

小野木 栄水 / Emi ONOGI (ファゴット)

愛知県春日井市出身。名古屋芸術大学卒業。同大学主催の定期演奏会、卒業演奏会、同大学同窓会主催の新人演奏会をはじめ、読売新人演奏会、ヤマハ管楽器新人演奏会等に出演。現在、セントラル愛知交響楽団契約団員。これまでにファゴットを伊藤武、依田嘉明、北川陽子、前田信吉の各氏に師事。

市町村の会館のアウトリーチ活動については、岐阜県は比較的熱心なところであろうと思う。特に、多治見、飛騨、山県など他地域のモデルになるような活動をしているところが何カ所かあって注目していたのだが、一方で、まだまだその経験が他の市町村のアウトリーチの空気の醸成につながっているとは言えないのかもしれないと感じていた。県立の会館もサラマンカホールをはじめいくつか存在するが、民間の指定管理者が入っているところもあり、岐阜県教育文化財団が会館運営をベースとしていないため、アウトリーチ活動に対しても積極的なアプローチをしてこなかったのかもしれない。それ故、県内の会館の連携の軸がはっきりしないところがあったのではないかと思われる。その意味では、今回のアウトリーチフォーラムの実施は、新しいネットワークのきっかけになるかかもしれないと思えた。

岐阜フォーラムは県の環境生活部と財団のタッグによって事業が行われたが、最初は趣旨がどこまで共有できているか若干心配をした。しかし、一年目のシンポジウムで、アウトリーチについて話をし、実際にクアチュール・ペー（サクソ四重奏団、おんかつアーティスト）にアウトリーチのモデルを実演して見てもらったところから、一気にスイッチが入り歯車がかみ合いだしたという印象である。フォーラムは基本的に学校へのアウトリーチをベースとして考えるが、今回、特に教育現場を知る県や財団の方々、事業がめざすべき内容と効果について霧が晴れるように見通すことが出来たことが大きな要因だと思う。それがそのままアウトリーチ研修（キャンプ。コーディネーターとアーティスト、地域のスタッフが一緒にプログラム進行案を考えていく）での理解の勘の良さに繋がった。教育の現場経験者ならではのものだと思う。

各地の学校で行ったアウトリーチの印象としては、岐阜県が生徒の発言へのうながしなど、学校教育について一貫した考え方に基づいて指導しようとしていることが窺え、芸術家が学校に行くことを活かす水脈はありそうだと感じている。

アウトリーチフォーラム事業は、数個の趣旨が複合的に存在する。それほど簡単に出来ることではないが、一つは、アウトリーチという活動に欠かせない質感をホール職員が理解すること。そして、演奏だけではなくその活動の質感を作り出す方法を考え、事業化へのイメージを持ってもらうこと。また、それによって、仲間意識をもち、より深い情報を交換するネットワークのきっかけになること。最後にアウトリーチ現場を通して演奏家の意識を変え、意欲的に取り組むことで彼らのスキルを上げること、である。

今回の取り組みでは、特に県及び財団の現場にいた人たちが、刺激を受け、アーティストの役割を再認識してくれたことは疑いなく意味があったと思う。しかし、継続するために、それが個人だけでなく組織としてのノウハウへと昇華していくためにもう少しのアクションが必要かもしれない。一方、県内の教育現場の経験豊かな人との共同作業は、市町村の会館の人たちや、アーティスト、そしてコーディネーターにとっても、ノウハウを有言無言に教えていただく機会にもなった。そのことはこれから各会館がアウトリーチをしていく上で大事な基礎知識でもあろうと思う。

市町村の会館の間では、今回は担当同士が情報交換をしたり、見に行ったりということが普段以上に出来ていたように感じられる。それは、単なる一般論の人的ネットワークではなく、同じミッションと具体的な課題があって、そのために動いていたことが大きい。それをきっかけとして、情報だけでなく「考えることの習慣」の共有などに拡がっていかれると嬉しい。

最後に、長い期間このアウトリーチ事業に取り組み、その面白さを理解しようとし、そして、それを見つけてくれた（と思う）、岐阜県や各市町村のスタッフの方に感謝するとともに、アウトリーチを考えていく中で見いだしたノウハウが、それ以外の様々な現場で活用できるスキルとなって使われていくことを期待したいと思う。

＜グランツ弦楽四重奏団＞

コーディネーターレポート

楠瀬 寿賀子

今回、岐阜県のアウトリーチフォーラムを実施した関市と岐南町は、それぞれの立地がかなり異なっている。

関市のアウトリーチでは、山間部の小規模校2校が含まれた。市町村合併でV字型になった地形の端と端の小学校を午前と午後にとつづつ訪れたため、その間が車で1時間半ほどの山間の移動となったが、その自然豊かな環境に照らし合わせたためか、子どもたちもみな穏やかで素朴な印象を受けた。人数の少ない小規模校では2ないし3学年合同となったが、心配した3年生も年齢なりの集中力と感性で音楽や言葉を素直に受け止めていたようであった。

一方の岐南町は、岐阜駅から車で20分くらいの、いわばベッドタウンで、小中学校の給食無料によって育児世代の家族が移り住み、子どもの人口が増えているそうである。子どもたちにも都会的な生活のようすがうかがえた。アウトリーチのあいだ身体が動いてしまう子どももいたが、その子なりに音楽を感じていたことが身体の動きから察せられた、と、あとで演奏家が述べていた。先生にとっては日常の光景なのかもしれないが、アウトリーチだから、と無理に抑えこむことなく見守ってくれたことが奏功していたと思う。

今回のフォーラムでは、岐阜県の方々にたいへんきめ細やかにサポートしていただき、また、財団に出向されている先生方からは、学校現場の話などアウトリーチ実施のための参考になることも多くうかがった。今後もアウトリーチを含めた事業が県内各地で継続されることを期待する。

アウトリーチのプログラムを考えると、演奏家には、①「どんなことを伝えたいか・感じてほしいか」、②「なぜ音楽をつづけているのか（なぜその楽器なのか）」、③「音楽に携わっていることが自分にとってどんな意味をもつか」といったことを訊ねる。これらの問いは“質問”という形で投げかけるというよりも、プログラムを構成する過程をとおしてこれらの問いを行きつ戻りつしながら、演奏家自身の考えや気質、興味・関心などを探り、プログラムに活かしていくのである。

まだ若く、アウトリーチの経験のない（少ない）演奏家の場合、①の問いに対しては、「音楽の楽しさを伝えたい」「楽器の仕組みや楽器ごとの特徴やちがいを知ってほしい」など、まだおおまかなイメージでしか捉えられていないことが多い。だからこそ、②や③の問いを繰り返すことがとても重要であり、フォーラムでのようなプログラミングの研修が大きな意味をもつ。

グランツ弦楽四重奏団もまだ若い演奏家たちだが、彼らから出てきた言葉は少しちがっていた。「クラシック音楽では感情が先にあることを伝える」「一生懸命な姿を見てほしい」、中でも「弦楽四重奏の作品の構造を、イメージしたり感じることでできるプログラムを作りたい」といった言葉には、少し踏み込んで弦楽四重奏を聴くためのアウトリーチになるという期待を抱いた。

モーツァルトの弦楽四重奏曲「狩」の第1楽章をメインに置き、曲中登場するいくつかのテーマで4つの楽器がどのような役割を果たし、どんなイメージを生み出しているか、といったことをシンプルに解析し、最後にとおして演奏する。「狩」に至るまでも、各楽器の音色とおもな役割、異なる奏法、「息を合わせる」といったことが巧みな選曲によって感覚的にとらえられるものとなった。

各人別々に学校へのアウトリーチの経験はあったものの、研修後最初の学校ではやはり少しぎこちなかった。しかし、子どもたちの前で実践したことで彼らが得られた実感は大きかったようだ。1校目が終わったところで、だれかが「これまでの子どもたちに申し訳なかった」と呟いた。「これほどきちんとプログラムを作り込まなければいけないことがよくわかった」という。その後はアウトリーチ1回ごとに、より明解で無駄を削ぎ落としたプログラムへと育っていった。

後日、彼らが出身大学の学生たちにアウトリーチでの経験を語る機会があったが、その中で「音楽家としての社会での役割を考えるようになった」という発言があったことも記しておきたい。

ガラコンサートでは市町のコンサートとは別の曲目を選んだが、市町村公演も含めて、日頃から緻密な練習を重ねていることがうかがえる、たいへん質の高い演奏を聴かせてくれた。アウトリーチのプログラムは、子どもたちには少々難易度が高いとも思われたが、作品についての解析が鮮やかに浮きあがる演奏があってこそ、言葉で聞いたことが感覚とリンクして、より豊かな聴き方ができていたのではないかと思う。ガラコン最後の合同演奏では、ゲネプロ時に厳しく指摘された中途半端な滑稽さの演出を修正して、柔軟な遊び心も持ちあわせていることを披露した。

< Franc 木管五重奏団 > コーディネーターレポート 大島 路子

当初から、フラン木管五重奏団がこの事業にける思いは、とても強かった。メンバーの大方が30代にかかっているフランにとっては、今年が最後のチャンスだったからだ。そして彼らが活動を続ける上で、どう考え、どう動き、どう発信していくのかという、グループの真価が問われる一年になるだろうということは、フォーラムが始まる前から彼らが覚悟していたことだと思う。室内楽をこよなく愛するコーディネーターとして、フランというアンサンブルが社会に積極的に関わっていけるアーティストとして成功してくれたら、それ以上に嬉しいことはない。

この岐阜フォーラムで、中京圏を拠点とするフランが選ばれたのは、地域での活動に将来つなげていくと欲している、という地域創造側の思いもあってのことだった。愛知県とその周辺地域に散らばって住んでいるフランのメンバーは、オーケストラの契約団員やエキストラ、吹奏楽の指導、その他フリーランス奏者としての演奏や教育活動などに、日々車で数十キロを走り回っている。そんな日常の中で、木管五重奏団としての活動に真剣に取り組む彼らに、このフォーラムは、本人達の期待をも超える成長をもたらした。フランがこれまで活動して来た中で培ったレパートリーは、何冊ものバインダーにどっさり詰まっている。ただそこから取り出した曲を一方的に手渡すのではなく、本当の意味で聴き手に届ける方法というのは、大いに考える価値がある。そして、本当に皆でよく考えた一年だった。

「自分達の思いの詰まった曲を、いかに届けるか。」という点で当初の彼らは空回りをしていた。木管五重奏のために書かれた名曲を、「いい曲だから」「私達が初めて取り組む曲だから」という台所事情だけでは外に出せない。9月の研修で実際にリハーサルや台詞決めが始まる前に、なんとかコンセプトだけでも考えておければと、チャットアプリなどで事前の話し合いを試みたが、なかなかお互い（フランのメンバーとコーディネーター、アシスタントコーディネーター）の意図は伝わらない。結局やはり顔を合わせてから、実際のところゼロから始めることになる。このプロセスに意外なほど時間をかけることになったのだが、それは避けて通れないことは皆が知っていた。

伝えたい音楽について、彼ら自身について、そして下呂と東白川という地について話しているうちに、自分たちの音楽を提示する方向が見えて来る。「こんなふうに想像が膨らむ曲なんだ」「ここを演奏している時に一番うれしくなるのは、こんな仕掛けがあるから」といった、聴く人の日常との関連付けや、想像を広げるヒント、曲の種明かしといった方向へ話が進んでいった時、プログラムは次第に形を見せ始め、フランらしい生命感のあふれるものになった。そして、納得のいく提示方法が見つかったときには、それを伝えようとする言葉にも迷いがなくなる。

フランの凄いところは、決してあきらめないところだ。研修時のみならず、市町村公演の期間も毎晩10時の閉館ギリギリまで話し合いやリハーサルを続けた。さらに、リード楽器奏者たちは夜中までリードを削り、また遅くまで個々でアウトリーチの際のMCを考える毎日だった。MCの内容に納得がいかないとき、小道具を作り変えるときなど、お互いの分担を自分の事とも捉えて助け合う。その方法は一見効率が悪いようにも見えるが、これがフランのスタイルであり、彼ららしい演奏やアウトリーチを作るうえで不可欠な方法のようだ。本人たちの言葉によれば、この事業に参加して目指す場所が変わったことにより、現状に飽き足らなくなって、努力を惜しまなくなったとのこと。リハーサルの際、また実務的な決め後をする際にも、グループ内での歩調が揃うようになったという。

東白川中学校の三年生向けにおこなった最後のアウトリーチは、忘れ難いものになった。少子化の進む東白川村の子供たちは、村にひとつの小中学校へ一緒に通う9年間を終えて、今度は村外のいくつかの高校に分かれて羽ばたいていく。そんな節目を数ヶ月後に控えてのアウトリーチコンサートだった。理想的な音楽ホールとも見紛う、美しい木造の食堂に、木管楽器の暖かく力強い音色が共鳴する。そして、「やりたいことを、とことんやってみようよ」という彼らのエールと共に、最後のプーランク（ノヴェレッテ）が15歳の心の奥深くへ届くのを、あの部屋にいた皆が実感した。

<ピアノトリオ Linon > コーディネーターレポート 田村 緑

平成26・27年度「アウトリーチフォーラム事業」岐阜セッションにおいて、この事業を機に結成されたピアノトリオLinon（リノン）と共に、アウトリーチ・プログラムを創り、飛騨市（飛騨市文化交流センター）と美濃加茂市（美濃加茂市文化会館）に赴き、アウトリーチ活動とホール公演を行いました。

オーディションから千秋楽のガラコンサートまでの16ヶ月、3人の演奏家が初めて集ったスタート地点から、試行錯誤しながらアウトリーチ・プログラムを考え、同時に公演のためのレパートリーを作り、特色を持ったグループに成長していったプロセスそのものが、今回の岐阜セッションの意義と言えるのではないかと感じています。

基本的なアウトリーチ・プログラムは以下の通りです。

* 3人の演奏家を個々に認識した上で、演奏を聴く

♪ モンティ：チャルダッシュ（またはピアソラ：天使の死）

（ピアノのみ音楽室内で演奏スタート。チェロのソロ演奏は室外。ヴァイオリンの室外ソロに受け渡したところで、室内演奏に加わる。ヴァイオリンも室内演奏に加わったところで、早い踊りのセクションに突入）

* 自己紹介&楽器紹介

（ともすれば、演奏家からの一方的な説明になりがちな楽器紹介。

子供達自らが、楽器の特徴、それぞれの楽器の違いを発見できるように導くことを心掛けてもらいました。

弦楽器もピアノも、音の鳴る道筋を追い、特徴的な効果は比較させることによって違いを示すなど、視覚・聴覚・感覚に訴えかけ、知的好奇心を育むことを狙いとしました。）

* 3つの楽器の音域チェックとトリオの役割を知る

（各楽器への理解を深めたところで、3つの楽器を同時に聴くステップを用意しました。

まずは音域チェック。三つの楽器で高い音を出せる楽器はどれなのでしょう。それぞれの楽器が、ゆっくり低音域から高音域まで、3つの楽器が対決。その後、曲の一部分をバラバラにし、低音域のみの演奏。中音域を足して演奏。高音域を足して演奏。3つの異なる音が層のように重なって一つの音楽になっていることを目から耳から確認しました。

そして、全く違う音を演奏している3人が「なぜ」同時に演奏できているかを発見してもらうプログラム。まずは3人が目隠しをして演奏し、視覚に頼らなくても演奏できることを実証しました。

次なるステップとして、「チャイコフスキー：花のワルツ」を通し、トリオが一緒に演奏するために必要なポイントを子供達に発見してもらいました。）

* 楽器やトリオに馴染んだ上で、音楽の世界に深く入っていく時間。そして、聴いたことのない曲を能動的に聴くことにチャレンジ。

♪ 運命

♪ エリーゼのために

（音楽、視覚、言葉によるベートーヴェンの紹介）

♪ ベートーヴェン：ピアノトリオ第四番 第二楽章

（テーマと変奏曲形式の曲。まずは、テーマの音楽のイメージを子供達に聞く。変奏曲のイメージをベートーヴェンの顔の表情を絵にして提示。演奏を紙芝居を見るように鑑賞。ある変奏曲は白紙になっており、音楽から子供達に自由にイメージを想像してもらった）

* タンゴのリズムに乗りながら、席替えの時間

♪ ピアソラ：天使の死（または モンティ：チャルダッシュ）

（心も体も開放されて、演奏を楽しむ時間）

最初は手探り状態で始まったアウトリーチ、回を重ねるごとに進化が見られました。自分のタスクに精一杯のうちは、子供の様子があまり見えておらずごちない感じが出ていました。しかし、余裕が出てきてからは子供の様子を察せるようになり、リノン自ら課題に気づき積極的に改善していく姿が印象的でした。その先には、「何を表現したいのか」「何を聴き手と分かち合いたいのか」という、表現者として尽きぬ課題が待ち受けています。研修の場を通して、妥協する事なく突き詰めていく時間が与えられたことも、彼らの飛躍的な成長の一助となりました。

今回、特筆すべきは、本公演でのリノンの躍進です。

アウトリーチ・プログラムを創っていた9月初めのキャンプの最中、10月末に行われる本公演のレパトリーがまだ確定していませんでした。言わば、キャンプは、レパトリーのない状態でスタート。リノンの特色がわからないままプログラムを創っていく作業でもありました。

しかし、飛騨市での本公演の後半で、ピアソラ：ブエノスアイレスの四季と日本の唱歌を組み合わせる組曲にしたいというリノン自らの強い希望がありました。編曲の段取りも整い、飛騨市でお披露目した組曲「Spirit Seasons」。組曲はリノンの命名で、デビューの地となる飛騨市文化交流センターのスピリットガーデンズにちなみ、今後この曲を演奏する機会があるときは、常に初心を忘れないようにしたいという想いが込められています。

組曲の構成は、紅葉（唱歌）～ブエノスアイレスの秋～雪（唱歌）～ブエノスアイレスの冬～朧月夜（唱歌）ブエノスアイレスの春。

個々で活躍している三人の演奏家の個性がぶつかり合い、トリオという枠組みを借りて躍動する。トリオとしてのリノンの特色が一気に開花した瞬間でした。

翌月の美濃加茂市公演では、後半、オブリビオン～組曲「Spirit Seasons」、アンコールではリノンの名刺代わりの曲「天使の死」を演奏するなど、ピアソラ一色＝リノンのカラー（特色）が全面に押し出されていきました。

普段、一緒に活動していないグループが短期間にここまでの成果を出せたこと。これは一重に、9月のキャンプ、そして、12回に及ぶアウトリーチの実地経験の賜物だと思っています。

この貴重な経験を、リノンとして、また演奏家一人一人が、それぞれの持ち場で今後の成長の糧としてくれることを願いつつ、このような素晴らしい研修の場を与えてくださった、岐阜県の皆様、各市町村ホールの皆様、関係者の皆様様に、改めて感謝申し上げます。

< Franc木管五重奏団 >

アシスタントコーディネーターレポート

菱川 浩二

【下呂市】

■会場／金山小学校音楽室 ■対象／小学校1・2・3年生50名 ■期日／10月14日（水） ■時間／4時間目 11：15～12：00

【地域の印象】下呂市の中では比較的人口密度の高い地域。学校を含めた地域全体が芸術活動全般に理解がある。

【報告】岐阜キャンプでは小学校高学年を想定したアウトリーチプログラムだったので、言葉遣いや小道具の改善など低学年向けに工夫を重ねた。／1回目のアウトリーチということもあり緊張状態の中でのスタートとなった。しかし、子どもたちの素直な反応がそれを解く助けとなり、自然な形で進行することができた。

■会場／金山小学校音楽室 ■対象／小学校4・5・6年生50名 ■期日／10月14日（水） ■時間／5時間目 13：25～14：10

【報告】低学年と比べ随分おとなしい印象。4・5・6年という3つの学年が一緒という慣れない緊張感が漂っていた。／子どもへの接し方、語り方が、引き出し方がより安定し、出演者の求めている答えを的確に引き出せていた。

■会場／中原小学校音楽室 ■対象／小学校1・2・3年生17名 ■期日／10月15日（木） ■時間／3時間目 10：30～11：15

【地域の印象】金山町と比較すると人口密度は低い。小学校としてアウトリーチは初めての体験であり、本プログラムを実施するインパクトは高い。

【報告】会場が比較的狭く、5人が4隅と中央の5箇所に分れて移動する場面では、安全を配慮し別の譜面台を予め出演者が移動する場所に用意した。／特別支援の児童が終始声を出している状況であったが、集中を切らすことなく最後まで演奏できた。

■会場／中原小学校音楽室 ■対象／小学校4・5・6年生21名 ■期日／10月15日（木） ■時間／5時間目 13：45～14：30

【報告】比較的早い段階でプログラムの骨格が固まったこともあり、言葉の使い方、間のとり方、児童へのアプローチ方法など、より細かな部分まで配慮できるようになってきた。

■会場／間瀬小学校音楽室 ■対象／小学校1・2・3年生20名 ■期日／10月16日（金） ■時間／4時間目 11：20～12：05

【地域の印象】日本でも有数の清流「間瀬川」が近くにあり、街そのものがとても美しい。間瀬小学校の校舎も木造づくりで、街の景観とフィットしている。

【報告】他の地域の小学校と同様、それ以上に子どもたちの素直な反応が素晴らしく、また、アウトリーチ経験を積んだ5人の力量が合わさり、低学年とは思えないほどの集中力であった。

■会場／間瀬小学校音楽室 ■対象／小学校4・5・6年生20名 ■期日／10月16日（金） ■時間／5時間目 13：40～14：25

【報告】低学年同様に素直な反応。貴重な機会を楽しもうとする雰囲気があった。しかし、狭い教室に多くの大人たちが取り囲むように存在していたためか、どことなく硬い空気が終始流れていた。／全アウトリーチ終了後に思いもかけないプレゼントがあった。間瀬小学校3～6年生の児童がフランだけのために合唱2曲を歌ってくれた。出演者がお礼のトークで「私達が成長させていただいたことに感謝」と発言。

■本公演：Franc木管ご重奏団コンサート ■会場／下呂交流会館アクティブ泉ホール ■対象／全年齢（未就学児入場不可）

■期日／10月17日（土） ■時間／13：30開場 14：00開演 ■料金／全自由席500円 ■入場者数／

106名（招待込）

【報告】初日の場当たりの時点で全曲演奏し、ある程度の演出の目星をつけた。全編に渡り曲目や解説を投影し、木管五重奏に馴染みの無い方でも親しめる演出を行った。／山の音楽家じゅんぼん協奏曲では楽器の特徴を文字情報として投影し、曲を止めること無く進行した。／本公演のメインプログラムである木管五重奏曲（T. ブルーメル）の解説を前半に行い、後半は演奏のみというプログラム構成とした。

【東白川村】

■会場／東白川小学校音楽室 ■対象／小学校1・2・3年生 39名 ■期日／11月4日（水） ■時間／10：40～11：25

【地域の印象】川沿いの自然あふれる美しい村。役場の方、民宿の方はもちろんのこと、道をすれ違う住民の方々、小中学生から普通に「こんにちわ」と声をかけられるなど、とても心温かい「まち」の雰囲気を感じた。

【報告】さもすると楽しくなりすぎる低学年を上手くリードし、最後まで集中力を保ち進行できた。／オープニングの「ブルーメル木管五重奏曲第一楽章」、エンディングの「プーランク ノヴェレッテ」の音源を事前に渡し、3週間ほど小学校及び中学校の昼休み時間に流した。子どもたちの集中力が最後まで途切れなかったことの一助になっている。

■会場／東白川小学校音楽室 ■対象／小学校4・5・6年生 56名 ■期日／11月4日（水） ■時間／13：55～14：40

【報告】午前中と比較すると56人と多く、また低学年と比べ体も大きいため会場が手狭に感じた。／低学年、高学年の順に実施すると高学年がおとなしく感じがちだが、低学年と良い意味で変わらない純粋さがあり、反応も素晴らしく、最高手応えを得ることが出来た。

■会場／保健センター ■対象／地域住民及び特別養護老人ホーム入所者 約30名 ■期日／11月5日（木） ■時間／10：00～14：45

【報告】施設入所者の方が12名と聴衆の半数近くを占めていた。介護レベルの高い方が想像以上に多く不安だったが、一般の方の反応が良く、全体として暖かな雰囲気にも包まれた。／サロンコンサートと学校アウトリーチの中間を着地点にプログラム検討を行った。アウトリーチのプログラムで扱う曲の一部を唱歌・歌謡曲に変更し、また、フラン5人全員がお客様の近くへ行き、声をかけながら楽器を見せるコーナーを新たに設けた。

■会場／せせらぎ荘 ■対象／介護支援対象者 約30名 ■期日／11月5日（木） ■時間／14：00～14：45

【報告】通常のアウトリーチとは趣をガラッと変え、心の琴線に触れるような曲を多数入れた。また、音楽手遊び、声掛け楽器紹介、せせらぎ荘の今月の歌「もみじ」の合唱も取り入れ、聴衆と触れ合うことに主眼を置いた。／参加した方のお礼の言葉「ココロのシワが伸びる思いがしました」にはフラン含めスタッフ全員が感動。特別養護老人ホームで実施するアウトリーチの意義を改めて感じる事ができた。

■会場／東白川中学校ランチルーム ■対象／中学校1・2年生 50名 ■期日／11月6日（金） ■時間／13：50～14：40

【報告】ランチルームの大きさ、天井の高い木造の空間が木管五重奏に最適。木で作られた温かみ、窓越しに見える素晴らしい景色、演奏会場として申し分ない。／今回のプログラムは小学校高学年とほぼ同じスタイルで臨んだが、言葉づかい等、もう少し大人として接しても良かった。／アウトリーチプログラムの完成度が高まるにつれ、演奏により集中することができるようになってきた。

■会場／東白川中学校ランチルーム ■対象／中学校3年生 21名 ■期日／11月6日（金） ■時間
／14：50～15：40

【報告】中学3年生に対しては、完全に大人に向けてのアウトリーチを心がけた。言葉遣い、専門用語、扱い方。一つ一つを丁寧に解説した。／小学校が45分に対し、中学校では基本50分のプログラム。その5分の使い方を検討した結果、これからの人生、進路について話した。

■本公演：Franc木管ご重奏団コンサート ■会場／はなのき会館 ■対象／全年齢 ■期日／11月7日（土） ■時間／18：30開場 19：00開演 ■料金／全自由席 100円 ■入場者数／150名

【報告】下呂公演の際には前半最後でブルーメル木管五重奏曲の解説を行い、後半に演奏というスタイルで臨んだが、意識が離れたという感想もあり、今回のプログラムでは後半にまとめた。／アウトリーチのメインコンテンツである「ユモレスク」をアウトリーチの手法を用い解説し演奏した。／音出しの際、舞台上以上に会場の響きが良いことに気づき、急遽アンコールで「ふるさと」を歩きながら演奏することにした。歌詞もスクリーンに投影し、エンディングは観客と一体になれるよう配慮した。

<ピアノトリオ Linon >

アシスタントコーディネーターレポート

高井 晴美

- Linonはハワイ語で“輝く”“光る”という意味の「lino」と、「on (音)」の組み合わせです。今回の事業を機に結成されたピアノトリオは、名前をお互いの共通点を探しながら考えたそうです。アウトリーチプログラム研修（キャンプ）では、トリオの魅力とは？子どもたちに伝えたいことは？などをそれぞれの意見を訊き合いながらスタートしていました。その姿勢は市町村公演期間中も変わらず、トリオであることを大切に、名前の通りそれぞれの個性が絶えず光り輝いていたと感じています。

Linonの市町村公演は、9月のキャンプ後、10月に北部の飛騨市、11月に南部の美濃加茂市という地域性の異なる2か所を約1ヶ月スパンで実施することになりました。アウトリーチ先はすべて小学校で、両市とも全校児童が対象となる小規模校、4～6年生が対象となる中規模校、クラス単位で実施する大規模校が選ばれました。

- 飛騨市は、人口24,813人（H27.4）、面積の93%が森林という自然豊かな場所で、小学校6校、中学校3校、音楽機能を中核とした702席の飛騨市文化交流センタースピリットガーデンホールを有しています。ホール指定管理者のNPO法人ひだ文化村は、年間に自主事業約20本、アウトリーチを数回実施するなど、独自公演やアウトリーチの実績が豊富です。もともと、地元住民の要望によってホールが誕生した経緯があるほど、文化芸術への関心が高い地域であり、クラシック音楽の生演奏に触れる機会を子どもたちにたくさん届けたい、というホールスタッフの強い想いがありました。

ホールはJR飛騨古川駅から徒歩5分という場所にありますが、市内の主な移動手段は車で、ホールから最も離れた小学校まで約1時間30分かかるなど、アウトリーチ活動の範囲は広域にわたります。当初、アウトリーチを市内全6小学校で実施することを希望されましたが、ホール公演を見据え、実施校を5校とし、アウトリーチ最終日の午後は本公演に備えるプランを提案されました。

タイトなスケジュールの中をホール公演に向けてLinonとホールスタッフは、アウトリーチ実施後も連日試行錯誤を重ね、ホールのこれまでのノウハウを活かしながら、Linonの目指す音楽を表現するため趣向を凝らした演出を作り込みました。

アウトリーチでは、行く先々の人々とホールスタッフの親密さがあふれ、地域全体が一つの家族のような印象を持ちました。そのようなアットホームな環境の中で、Linonは子どもたちとの距離をぐっと縮めていきました。キャンプで積み上げてきたものが子どもたちとの触れ合いのなかで動き始め、ホールスタッフの頼もしいサポートを受けてのデビュー公演となりました。

- 美濃加茂市は、人口55,144人（H27.4）、小学校9校、中学校3校（内1校は中高併設校）、古くから交通の要衝として栄え、利便性の高い土地として工業団地を抱える一方で、多くの田園風景を残しています。昭和29年に2町7村が合併して誕生した美濃加茂市に、昭和55年に設立されたのが804席の多目的ホールのある美濃加茂市文化会館で、耐震改修とこれからの会館のあり方が検討されている時期でした。

市直営のホールとして、これまでアウトリーチの実施はありませんが、地元アーティストによるロビーコンサートや関連施設での無料公演の実績がありました。ホールスタッフは、今回初めてとなるアウトリーチを子どもたちがホールに足を運ぶ機会、アーティストと間近に出会える機会と捉えプランを検討されました。

子どもたちが目にするポスター・チラシをポップで親しみやすいデザインにする、中学生以下は無料の公演でしたが、アウトリーチ先でアーティストが子どもたち一人一人に招待券を手渡すことを提案されました。また、学校からは共演という要望があがっていました。

プログラムのブラッシュアップを続けている中、これらの実現にはLinonの対応力とホールスタッフの調整力が発揮されました。その甲斐あってアウトリーチ最終日には、子どもたちの歌声とLinonの演奏が響き、ホール公演には招待券を持った子どもたちの姿が見られました。機材調達や各所との調整にホールスタッフが奔走し、デビュー公演で作り上げた演出の要素を活かした公演をもって市町村公演事業全てが無事終了しました。

○期間中、ランチルームでのサプライズ演奏、コミュニティ FMの生出演など様々な企画がありました。振り返ると本事業は、アーティストにとっても、ホールスタッフにとっても肉体的にも精神的にも過酷であったと思います。それぞれが信念を持って不測の事態を乗り越える姿を思い出すと今でも胸を打たれます。子どもたちに音楽を届けるならアウトリーチで充分かもしれません。多くの人に音楽を楽しんでもらうならホール公演で構わないかもしれません。アウトリーチとホール公演の凝縮が、係わる全ての人々に多彩な出会いと気づきをもたらしたように思えます。

<グランツ弦楽四重奏団>

アシスタントコーディネーターレポート

田辺 沙保里

関市は2005年の合併以降、関、洞戸、板取、武芸川、武儀、上之保の6つの地域から構成されている。その形は美濃市を挟んで丁度V字型で、東西の移動には車で1時間程度を要する。関鍛冶で有名な関市は、刃物産業がさかんであることは勿論、小瀬鵜飼、木彫仏像の円空上人、美術家の篠田桃紅、また最近話題になった「モネの池」など数多くの見所がある。

アウトリーチ先は、瀬尻小学校・安桜小学校・上之保小学校・洞戸小学校の4校。関地域にある瀬尻小と安桜小は5年生を対象に、小規模校の上之保小では3・4・5年生の合同、洞戸小では4・5年生の合同で実施された。

グランツ弦楽四重奏団には、楽曲分析的手法により一つの音楽作品を読み解き、その奥深さを知ってほしいという目的があった。ベートーヴェン《弦楽四重奏曲第9番（ラズモフスキー第3番）》の一部を演奏しながら、音楽室に4人のメンバーが一人ずつ快活に登場すると、子どもたちの期待感は一気に高まった様子であった。松本氏による楽器紹介に続き、ハイドン《弦楽四重奏曲「皇帝」第2楽章》で、アンサンブルにおける各パートの役割が説明された。アンダーソン《プリंक・プレंक・プランク》では、高宮城氏がクイズを出題し、4人の息がぴったりと揃ったピチカート奏法に子どもたちからは思わず笑みが溢れていた。モーツァルト《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》では、彼らがどのようにコミュニケーションを取り演奏の方向性を統一させていくのか、その秘密に迫ろうという仕掛けが用意された。具体的には、長山氏が前に立って1回だけ手を叩くタイミングに合わせ、クラス全体が同じタイミングでどれだけぴたっと揃えて叩くことができるか挑戦するという体験である。掛け声なしでも、目や呼吸を使った合図によって息を合わせられることが身を以て実感できたのではないだろうか。最後に、モーツァルト《弦楽四重奏曲第17番「狩」第1楽章》を題材として、注目してほしい部分を4人で実際に演奏しながら、桐原氏が、ただ漫然と音楽を聞くのではなく、様々な面白いポイントを発見するヒントを提示した。拍子や調性の変化、主旋律と伴奏形、全体の構成について等、実はかなり難しい内容に触れているものの、専門的な言葉を使用せず、また実際に音で示しながら進行したため、子どもたちにもメッセージが届いたのではないかと懸念する声もあった。しかし実施してみると、どの学校でも子どもたちは彼らの音楽の世界に引き込まれていたように窺える。また、瀬尻の校長先生が「子どもたちが間近で本物の演奏に触れられる特別な体験。体育館でやるのとは違いますね。」と意見を下さったことから、彼らのプログラムが高い完成度で実施されたといえる。

関市文化会館は1200席の大ホールでステージ上もかなり広いので、銀屏風を立てて空間を仕切り、視点が演奏者に集まるよう工夫された。事業担当者の西脇氏と長尾氏作成による各校のアウトリーチのスライド投影も行なわれた。担当者のお二人は、今後アウトリーチを継続していきたいと非常に積極的な姿勢で本事業の舵を取った。「演奏家と子どもたちが密な関係性を築くという主旨が、現場に入って本当の意味で初めて実感できた。それは書類上の言葉では表しきれず、また1回見学しただけでも恐らく気付かないことが沢山ある気がする」という言葉は印象的であった。学校側も歓迎する姿勢であることから、今後は今回訪れることができなかつた学校についても順次実施していきたい考えであるという。期間中極めて円滑に実施された本事業は、お二人の見事な連携プレーの賜物であったと感じる。

岐阜市の南に隣接する岐南町の人口は増加傾向にある。15才まで医療費・給食費が無料ということもその要因の一つと考えられ、子育て世代も増えているという。また、庁舎と保険相談センター、そして今回の会場となった中央公民館が一体となった新庁舎が平成27年7月に完成したばかりで、新たな拠点における本格的なクラシック音楽のコンサートは多くの住民から期待を寄せられていた。

アウトリーチの実施先は西小・北小・東小の3校で、対象は5年生と4年生。西小では、県のオペラにも出演している先生のバリトン独唱&生徒の合唱による《花は咲く》を、グランツと共演するシーンも企画された。関市で経験を積んだグランツのアクティビティには安定感が生まれ、ここでも子どもたちの反応は頗る良好であった。

320人収容の公民館講堂でのコンサートは、そもそも建物自体が音楽コンサートを想定した造りになっていないため心配な点が多かった。照明や音響等の設備をどう操作するか、ガラス張りであるためカーテンをどうするか、といった機構の確認から検討が始まった。チケットもぎりの方法、役場からパテーションを運び込んで用意した袖、楽屋からステージまでのアーティスト動線の考慮、アナウンス原稿の

作成など、事業担当者との細かい調整が必要であった。本番当日は、多くのお客様にご来場いただき、念入りに調整したため運営面で大きなトラブルに見舞われることもなく、大きな音楽ホールとはまたひと味違った距離感のコンサートとなった。

事業担当者の堀氏と伊藤氏は、アウトリーチもコンサート運営も全く初めての挑戦であったが、大変良い経験になったと語っていた。特に、元々現場の先生であった伊藤氏が、グランツの演奏を間近で聴いた子どもたちの目が輝く様子を見て、アウトリーチの在り方に心から賛同している様子が伝わって来た。また今後、講堂でコンサートを行なう際には、今回のノウハウが活かされ、様々な可能性が開かれていくことが期待される。

〈はじめに〉

「こりゃエライ（大変な）仕事やなあ。コンサートなんかできるんやろか…」忘れもしない平成27年4月6日（月）、児玉チーフコーディネーターと地域創造の水上さん及び磯部さんが来岐され、初めて顔を合わせて事業全般にわたるお話を伺った際の、私の偽らざる心境である。

本来、私は県の職員。直近の所属は県税事務所で、県教育文化財団（以下「財団」と略します。）に派遣されるまではおおよそ文化的な香りとは縁遠い部門ばかりを歩いてきた。財団生活は2年目であるが、旧年度の主要業務は県美術展の改革であり、音楽関連の仕事は全くの門外漢。恥ずかしながら、この「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」が本県で前年度からスタートしていたことすら認識していなかった。ただ、「アウトリーチ」自体は財団の助成金事業のメニューの中にも存在していたため、交響楽団が小中学校を訪問して演奏会を行うような場に同席する機会があった。その際、本物のオーケストラを間近で見た子供達の驚きや興味深げな目の輝き、そして演奏者と子供達の触れ合いを目の当たりにしていたので、意義深く楽しそうな企画だと第三者的には思えた。しかし、いざ自分が主催する側となれば話は別。類似事業を参考に何とかやるしかない…とは考えながらも、正直途方に暮れる思いに包まれていた。

〈平成27年度・各事業の流れ〉

既に前年度のうちに研修や公演の会場は押さえられており、アウトリーチを実施する6市町村も、9月のアウトリーチ研修（通称：キャンプ）で訪問する小学校も決まっていた。このように、ある程度のお膳立てが整えられた時点から業務を引き継いだことは幸運であった。とはいえ、私を含めて県側のスタッフ全員が新しい担当者、まずはキャンプで訪れる4小学校への挨拶・説明から始まった。幸い、教員OBの浅井先生（財団）と現任教員の岩田先生（県庁・文化振興課）のお二人が事業に関わってくださっているので、各校とも話はスムーズに進み、ひとまず「つかみはOK」といったところか。

やがて夏を迎え、7月13日（月）に全体研修会を開催。ここで全コーディネーター陣や各アーティストの代表者、さらに市町村担当者とも初めて顔を合わせて実質的業務のスタートを迎え、いやが上にも気分は盛り上がる。翌14日（火）はキャンプ訪問4校の下見だ。どの学校も非常に先生が熱心で、万全の協力態勢を敷いていただけることは本当に有り難い。また、事前に作成した「チェックシート」に記載された項目以外にも、どういった点に目配りすべきなのかを把握することができた。前後して、秋に公演を実施する6市町村も下見。遠隔地も含まれるので県側のメンバーは分散して同行し、各市町村担当者との連携も密に取れるようになった。

9月3日（木）からは、いよいよ前半の大きな山場であるキャンプ。最初の4日でプログラムを練り上げてラスト2日は小学校での公演、足掛け6日にわたる長丁場だが、その分参加者との一体感も生まれてくる。素人目にも、各アーティストのトークが目に見えて上手くなっていく様子がわかり面白い。学校では子供達の素直な感性に触れるだけでなく、一緒に遊んだり給食を食べたり、お礼の手紙や色紙の交換などの交流も深められ、お互いにかけてあげない経験となったことであろう。余談になるがキャンプの直前、我が財団はキャンプ会場の「ふれあい福寿会館」からガラコンサートの開催場所「ぎふ清流文化プラザ」へと引越した。せめてあと10日待ってくれよ…と不便な身の上を恨めしく思いつつ、夜10時近くに参加者の退室を見届けてから、毎晩のようにゴミ袋を抱えて引越先の職場へ戻ったことも今となっては楽しい思い出である。

芸術の秋、10月からは市町村公演が始まった。私は下呂市と東白川村でFranc木管五重奏団に帯同した。水～金曜日は連日小学校や施設で演奏会を行い、終了後は毎晩遅くまで練習し、息つく間もなく土曜日にはホールでのコンサート。アーティストにとっては極めてハードなスケジュールであるが、それを乗り越えることで新たな自信にも繋がる。小学校等ではキャンプ時の反省点を踏まえ、場数を踏む毎に確実に安定感が増していく。そして最終日のコンサートではひと味もふた味も違った魅力を見せる。他の2グループのホール公演にも足を運んだが、9月の小学校とは趣を異にする本格的な演奏ぶりを見聞きするにつけ、やはり彼等は実力のある若者達なんだな、と今更ながら感服せずにはおれなかった。

これら各カリキュラムの準備や本番に目まぐるしく動く一方、並行して最大の難問であるガラコンサートの構想を組み立てねばならない。とはいえ、どういったコンサートにしたいのか…と尋ねられて

も皆目見当がつかない。私はもとより我が財団に純然たるホールスタッフは不在で、舞台関係は指定管理業務の枠内で外部の業者にお任せしており、オリジナリティを追求するのは困難。しかし事業の各段階で様々な局面を見聞きするにつれ、自分がすべきことは何と何なのかという仕分けが進み、徐々に「エライ仕事やなあ」といった気負いや精神的負担も少なくなり、できることはたかが知れているのでそれだけは精一杯やろう、という心持ちに至るようになった（その結果、かなりの部分にかかる負担をスタッフの皆さんにおかけした面は否定できません。この場をお借りして謝罪させていただきます）。

そして月日は瞬く間に流れ、迎えた2月20日（土）、総決算のガラコンサート。当日は生憎の雨模様にも祟られながらも200人を超えるお客様に会場いただき、アンケートの結果も大好評。とりわけ、秋に実施したアウトリーチや公演を見て「良かったのでまた来た」という小学生や親御さんの声を少なからず聞いたことが嬉しく、この事業を実施した意義を大いに実感できた瞬間であった。

〈事業全般を振り返って〉

一連の事業を通して、素人の私なりに結論を見出せたことがある。例えば最後のガラコンサート、果たして「成功」か否かは何をもって判断すべきなのか。まず思い浮かぶのは客席の埋まり具合。しかし仮に満員になったとしても、興味のない人にまで動員をかけまくっての結果ならば「やらせ」でしかない。ならば演奏の善し悪しか。いや、これにしても技巧的な部分の出来不出来を聴き分けられる耳を持ち合わせているお客さんはそんなに多くないと思われる（あくまで推測で根拠はありません）。

となると最終的に落ち着くところは「自己満足」なのではないか。アーティストは演奏に満足でき、お客さんの反応も良く、スタッフは終演まで滞りなく業務を完結させれば公演自体は成功といえる。ただ、長い準備期間に比べれば本番は一瞬、終わり良ければそれまでの苦労を全て忘れ去ることもあろうが、本番に至るまでの過程に不満が残っているのは「良い公演」とは呼べないと思う。なので主催側の立場からすると、せめて岐阜に滞在していただく間には少しでも心地良い空間を提供できたかどうかが問われよう。9月のキャンプ、練習室に缶詰めになってプログラムを考える間、当然に悩みや行き詰まりもあったことと思うが、ある演奏者が帰京後に「私、すっかり『岐阜ロス』なんです…」と言っておられたと聞いた。また、ガラコンサート終了後には多くのアーティストや関係者から「岐阜で過ごした時間は楽しい思い出ばかり。岐阜県と関わりができて嬉しい」といった感想も頂戴した。これらは我々岐阜県民にとっては最高に名誉な褒め言葉。その意味において、それこそ自己満足にしかすぎないが、今回のアウトリーチフォーラム事業は成功裡に終了した、と評価してよいのかも知れない。

こうした好印象を抱いていただけた大きな要因として、参加各市町村の力を抜きにしては語れない。学校等での公演もホールコンサートも、それぞれに独自の色を出し、手作り感満載で工夫を凝らされたご苦労には本当に頭が下がる。また、某所ではコーディネーター氏が「今まで何百と見てきたアウトリーチの中でも最高。これほど反応が良く、自分の思いを素直に語ってくれる子たちはいない」と感想を述べておられた。田舎だから、の一言で済ますのは簡単であるが、子供は大人の背中を見て育つ。これは取りも直さず、学校の先生や役所の職員はじめ地域の大人の皆さんが日常生活の中で見せる姿勢やホスピタリティが広く地域全体に浸透している産物に他ならず、青少年育成に果たす環境の役割の重さをもまた痛感させられた次第である。

〈今後事業を実施される自治体の皆さんに〉

甚だ僭越ではあるが、経験県として一言申し上げたい。それぞれ、県民性の違いや音楽文化に対する認識・力の入れ具合には当然に差がある。さらに言えば、事業実施側の体制もまた千差万別である。なので各々やりにくい点やウイークポイントを抱えているであろう一方、「ウチは〇〇だったら他県にない大きな強味」といったセールスポイントも必ず何か有しているはずである。そうした強味を早期に見つけ、各自自治体独自の特色を生かして事業を推進されれば、そこに懸案事項をクリアできるヒントも隠されているかもしれない。

敢えて一点挙げるならば、教育に携わられた経験のある方がスタッフに加わると多面的な視点がプラスされるので、より効果的に事業を進められる。当県の場合、浅井・岩田両先生の存在が何より心強かった。小中学校での公演準備の際、現場を熟知した教員目線からの様々な助言は、私だけでなく百戦錬磨

のコーディネーターの皆さんも目からウロコであった。さらにガラコンサートの会場近隣の小中学校への周知・宣伝活動等においても八面六臂の大活躍をいただけた。全行程を通して「岐阜県は、教員の方がスタッフに加わっているところが大きなアドバンテージですよ」というスタッフからのお言葉を何度耳にしたことであろうか。

〈おわりに〉

4月、新たな年度がスタートした。岐阜県のアウトリーチフォーラム事業は27年度限りで一旦終了を迎えたが、県にとっても市町村にとっても、単なる打ち上げ花火に終わっては事業を実施した意味がなく、折角芽生えた「アウトリーチによる新たな文化の創造と地域の活性化」の機運やネットワークを途絶えさせるのはあまりにも惜しい。幸いにして、既に県内でコンサートの開催が決まったり、再度小学校を訪れる機会が設けられたグループもある。そうしたご縁を基にして、行政として何が継続できるのか、予算措置を伴わなくともできることは何かないのか、を常に考え、智恵を絞り続けていかねばならない。

最後に、3組のアーティストの皆さん、各コーディネーター・地域創造・クラシック音楽事業協会の皆さん、県内の事業実施6市町村及び関係小中学校・施設の皆さん、キャンプでお世話になったサラマンカホールと4小学校の皆さん、そして色々と協力をいただいた県及び財団、総合舞台はぐるまの皆さんなど、事業に関わった全ての方々に心から御礼を申し上げたい。本当にありがとうございました！